

な ら だい ぶつ だい  
市原市奈良大仏台遺跡

1 9 9 2

市原市土木部道路建設課  
財団法人 市原市文化財センター





## 序 文

千葉県のほぼ中央に位置する市原市は、市内を南北に貫流する養老川を擁し、気候温暖で自然環境に恵まれ、古くより多くの人々が生活を営み、多くの貴重な遺跡が残されています。

一方、昭和30年代にはじまる臨海工業地帯の建設を機に、宅地造成、交通網の整備、さらにはゴルフ場建設といった地域開発が急速に進展しつつあります。これは、社会資本としての自然環境、歴史環境の破壊につながることもあり、行政として、その保護と開発との調和をはかる責務がますます重なりつつあります。

今回、ここで報告する奈良大仏台遺跡は、道路建設にともなう記録保存を目的として、発掘調査がおこなわれたものであります。研究者のみならず、市民の文化財に対する普及と啓蒙に、また、将来に残す歴史史料として、本書が広く活用されることを願うものであります。

最後に、今回の発掘調査、および本書の刊行に際し、ご指導、ご協力を賜りました関係諸機関に対し、心から謝意を申し上げる次第であります。

平成4年3月

財団法人 市原市文化財センター  
理事長 星 野 一 郎



## 例 言

1. 本書は、千葉縣市原市奈良字屋敷台586番地ほか所在の、奈良大仏台(ならだいぶつだい)遺跡の発掘調査報告書である。本調査区(A地点)の地籍は、奈良字大佛台350番地である。
2. 調査は、市道119号線改良工事に先行して実施されたものであり、市原市(土木部道路建設課)の委託により、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもとに、財団法人市原市文化財センターがおこなった。
3. 調査対象面積は20,000㎡であり、うち10%にあたる2,000㎡について確認調査を実施し、この結果をうけ、A地点調査対象地区8,000㎡に対して本調査をおこなった。B地点については、確認調査において670㎡を拡張し実施した。
4. 発掘調査、整理作業は、下記のとおりおこなった。

|      |                      |      |      |
|------|----------------------|------|------|
| 確認調査 | 昭和63年12月1日～平成元年3月31日 | 調査担当 | 田所 真 |
| 本調査  | 平成元年4月1日～平成元年7月31日   | 調査担当 | 大村 直 |
| 整理作業 | 平成3年10月1日～平成3年11月30日 | 整理担当 | 大村 直 |
5. 本書の執筆、作成は大村が担当した。
6. 財団法人市原市文化財センター調査コードは、(セ94)である。
7. 本報告による遺構番号は、調査段階のものとはことなる。遺物注記は旧番号による。その対照については、本文表にしめしてある。
8. 本書の作成にあたって、堀越正行、菅谷通保氏よりご教示をいただいた。記して感謝の意を表しておきたい。

## 財団法人 市原市文化財センター組織表

### 昭和63年度(確認調査)

| 役 員     |                       | 調査課       |         |
|---------|-----------------------|-----------|---------|
| 理事長     | 星 野 一 郎 (教育委員会教育長)    | 課 長       | 石 田 広 美 |
| 副理事長    | 大 野 義 規 (教育委員会社会教育部長) | 主 幹       | 加 藤 正 信 |
| 常務理事    | 須 田 昇 三 (専任)          | 主任調査研究員   | 宮 本 敬 一 |
| 理 事     | 滝 口 宏 (早稲田大学名誉教授)     | 主任調査研究員   | 田 中 清 美 |
| 理 事     | 寺 村 光 晴 (和洋女子大学教授)    | 調 査 研 究 員 | 浅 利 幸 一 |
| 理 事     | 海 上 信 久 (姉崎神社宮司)      | 調 査 研 究 員 | 大 村 直   |
| 理 事     | 根 本 正 夫 (市企画部長)       | 調 査 研 究 員 | 近 藤 敏   |
| 理 事     | 宮 崎 芳 雄 (市総務部長)       | 調 査 研 究 員 | 高 橋 康 男 |
| 理 事     | 地 引 希 壹 (市都市部長)       | 調 査 研 究 員 | 田 所 真   |
| 理 事     | 安 藤 隆 一 (市総務部財政課長)    | 調 査 研 究 員 | 木 對 和 紀 |
| 監 事     | 元 吉 末 喜 (市会計課長)       | 調査研究員(嘱託) | 田 中 新 史 |
| 監 事     | 河 野 徳 三 (教育委員会総務課長)   | 調査研究員(嘱託) | 半 田 堅 三 |
| 職 員     |                       | 事 務 員(嘱託) | 高 浦 貞 子 |
| 庶務課     |                       | 事 務 員(嘱託) | 田 中 裕 子 |
| 課 長     | 田 丸 萬 富               |           |         |
| 主 事 補   | 大 鐘 光 江               |           |         |
| 事務員(嘱託) | 秋 田 晴 美               |           |         |
| 事務員(嘱託) | 石 渡 あゆみ               |           |         |

## 平成元年度(本調査)

| 役 員        |                       | 調査課       |         |
|------------|-----------------------|-----------|---------|
| 理 事 長      | 星 野 一 郎 (教育委員会教育長)    | 課 長       | 矢 戸 三 男 |
| 副理事長       | 大 野 義 規 (教育委員会社会教育部長) | 係 長       | 宮 本 敬 一 |
| 常務理事       | 須 田 昇 三 (専任)          | 主任調査研究員   | 田 中 清 美 |
| 理 事        | 滝 口 宏 (早稲田大学名誉教授)     | 主任調査研究員   | 浅 利 幸 一 |
| 理 事        | 寺 村 光 晴 (和洋女子大学教授)    | 調 査 研 究 員 | 大 村 直   |
| 理 事        | 海 上 信 久 (姉崎神社宮司)      | 調 査 研 究 員 | 近 藤 敏   |
| 理 事        | 根 本 正 夫 (市企画部長)       | 調 査 研 究 員 | 高 橋 康 男 |
| 理 事        | 宮 崎 芳 雄 (市総務部長)       | 調 査 研 究 員 | 木 對 和 紀 |
| 理 事        | 地 引 希 壹 (市都市部長)       | 調 査 研 究 員 | 忍 澤 成 視 |
| 理 事        | 安 藤 隆 一 (市財務部財政課長)    | 調 査 研 究 員 | 田 中 茂 良 |
| 監 事        | 佐久間 章 (市会計課長)         | 調査研究員(嘱託) | 田 中 新 史 |
| 監 事        | 小 宮 仁 (教育委員会総務課長)     | 調査研究員(嘱託) | 半 田 堅 三 |
| 職 員        |                       | 事 務 員(嘱託) | 高 浦 貞 子 |
| 庶務課        |                       |           |         |
| 課 長        | 田 丸 萬 富               |           |         |
| 主 事        | 補 大 鐘 光 江             |           |         |
| 事 務 員 (嘱託) | 秋 田 晴 美 (9月30日まで)     |           |         |
| 事 務 員 (嘱託) | 石 渡 あゆみ               |           |         |

## 平成 3 年度(整理)

| 役 員   |                       | 調査課       |         |
|-------|-----------------------|-----------|---------|
| 理 事 長 | 星 野 一 郎 (教育委員会教育長)    | 課 長       | 矢 戸 三 男 |
| 副理事長  | 斎 藤 崇 雄 (教育委員会社会教育部長) | 主任調査研究員   | 田 中 清 美 |
| 常務理事  | 淵 本 献 司 (専任)          | 主任調査研究員   | 浅 利 幸 一 |
| 理 事   | 滝 口 宏 (早稲田大学名誉教授)     | 調 査 研 究 員 | 大 村 直   |
| 理 事   | 寺 村 光 晴 (和洋女子大学教授)    | 調 査 研 究 員 | 近 藤 敏   |
| 理 事   | 海 上 信 久 (姉崎神社宮司)      | 調 査 研 究 員 | 高 橋 康 男 |
| 理 事   | 根 本 正 夫 (市企画部長)       | 調 査 研 究 員 | 木 對 和 紀 |
| 理 事   | 露 崎 繁 (市総務部長)         | 調 査 研 究 員 | 忍 澤 成 視 |
| 理 事   | 石 井 作 二 (市財務部長)       | 調 査 研 究 員 | 田 中 茂 良 |
| 理 事   | 佐 野 年 男 (市都市計画部長)     | 調査研究員(嘱託) | 半 田 堅 三 |
| 監 事   | 佐久間 章 (市会計課長)         | 主 事       | 高 浦 貞 子 |
| 監 事   | 小 宮 仁 (教育委員会総務課長)     |           |         |
| 職 員   |                       |           |         |
| 庶務課   |                       |           |         |
| 課 長   | 田 丸 萬 富               |           |         |
| 主 事   | 大 鐘 光 江               |           |         |
| 主 事   | 永 野 健 一               |           |         |

# 本文目次

序 文

例 言

財団法人市原市文化財センター組織表

## I. 序 説

|             |   |
|-------------|---|
| 1. 調査にいたる経緯 | 1 |
| 2. 遺跡の位置と環境 | 1 |
| 3. 調査の概要    | 5 |

## II. A地点の調査

|              |    |
|--------------|----|
| 1. 遺跡の概要     | 8  |
| 2. 基本層序      | 9  |
| 3. 竪穴住居跡     | 12 |
| 4. 土坑・溝      | 20 |
| 5. 遺構外出土の遺物  | 34 |
| 6. 土器接合関係と集落 | 38 |

## III. B地点の調査

|             |    |
|-------------|----|
| 1. 遺跡の概要    | 41 |
| 2. 土 坑      | 41 |
| 3. 遺構外出土の遺物 | 41 |

# 挿 図 目 次

|                                          |    |
|------------------------------------------|----|
| Fig. 1 奈良の大仏                             | 1  |
| Fig. 2 遺跡位置図(1/100,000)                  | 2  |
| Fig. 3 遺跡位置図(1/25,000)                   | 3  |
| Fig. 4 調査対象範囲と本調査区(1/4,000)              | 4  |
| Fig. 5 グリッドの設定(1/400)                    | 5  |
| Fig. 6 発掘調査区(1)(1/1,500)                 | 6  |
| Fig. 7 発掘調査区(2)(1/1,500)                 | 7  |
| Fig. 8 A地点調査範囲と周辺の地形(1/2,500)            | 8  |
| Fig. 9 先土器時代確認グリッド配置と基本層序(1/1,200・1/60)  | 9  |
| Fig. 10 A地点全体図(1/600)                    | 10 |
| Fig. 11 A地点縄文時代の遺構(1/600)                | 11 |
| Fig. 12 SB01出土遺物(1)(1/3)                 | 12 |
| Fig. 13 SB01実測図(1/60)                    | 13 |
| Fig. 14 SB01出土遺物(2)(1/4・1/3)             | 14 |
| Fig. 15 SB02実測図(1/60・1/40)、出土遺物(1/4・1/3) | 15 |
| Fig. 16 SB03実測図(1/60・1/40)               | 17 |
| Fig. 17 SB03出土遺物(1/4・1/3)                | 18 |
| Fig. 18 SB04実測図(1/60・1/40)、出土遺物(1/3)     | 19 |

|         |                          |    |
|---------|--------------------------|----|
| Fig. 19 | 土坑実測図(1)(1/40)           | 21 |
| Fig. 20 | 土坑実測図(2)(1/40)           | 22 |
| Fig. 21 | 土坑出土遺物(1)(1/4・1/3)       | 23 |
| Fig. 22 | 土坑出土遺物(2)(1/3)           | 24 |
| Fig. 23 | A地点北斜面部全景                | 24 |
| Fig. 24 | 土坑実測図(3)(1/40)           | 25 |
| Fig. 25 | 土坑実測図(4)(1/40)           | 26 |
| Fig. 26 | 土坑実測図(5)(1/40)           | 28 |
| Fig. 27 | 土坑実測図(6)(1/40)           | 31 |
| Fig. 28 | 土坑出土遺物(3)(1/3・2/3)       | 32 |
| Fig. 29 | 焼土坑実測図(1/40)             | 33 |
| Fig. 30 | A地点遺構外出土遺物(1)(1/3)       | 35 |
| Fig. 31 | A地点遺構外出土遺物(2)(1/4)       | 36 |
| Fig. 32 | A地点遺構外出土遺物(3)(1/3)       | 37 |
| Fig. 33 | A地点遺構外出土遺物(4)(2/3・1/3)   | 38 |
| Fig. 34 | 遺構間土器接合関係、遺構外土器分布(1/600) | 39 |
| Fig. 35 | SK101実測図(1/40)           | 41 |
| Fig. 36 | B地点全体図(1/300)            | 42 |
| Fig. 37 | 縄文土器分布(1/400)            | 43 |
| Fig. 38 | B地点遺構外出土遺物(1)(1/3)       | 44 |
| Fig. 39 | B地点遺構外出土遺物(2)(1/3)       | 45 |
| Fig. 40 | B地点遺構外出土遺物(3)(1/3)       | 46 |
| Fig. 41 | B地点遺構外出土遺物(4)(1/3)       | 47 |
| Fig. 42 | B地点遺構外出土遺物(5)(1/3・2/3)   | 48 |

## 表 目 次

|              |   |
|--------------|---|
| A地点新旧遺構番号対照表 | 9 |
|--------------|---|

## 図 版 目 次

|        |       |                                |
|--------|-------|--------------------------------|
| PL. 1  | 遺跡    | 空中写真(1961年撮影)                  |
| PL. 2  | 遺跡    | A地点全景                          |
| PL. 3  | 遺構    | A地点SB01・02                     |
| PL. 4  | 遺構    | A地点SB02・03・04                  |
| PL. 5  | 遺構    | A地点SK01・02・03・04・05・06・07・08   |
| PL. 6  | 遺構    | A地点SK09・10・11・12・13            |
| PL. 7  | 遺構    | A地点SK14・15・16・17・18・19         |
| PL. 8  | 遺構    | A地点SK20・21・22・23・24・25         |
| PL. 9  | 遺構    | A地点SK26・27・28・29・30、SX01・02・03 |
| PL. 10 | 遺跡・遺構 | B地点全景、B地点SK101                 |
| PL. 11 | 遺物    | A地点SB01・02・03土器                |
| PL. 12 | 遺物    | A地点SB03・04・01・02、遺構外土器         |
| PL. 13 | 遺物    | A地点SB03・04、SK01・02・03・07・08土器  |
| PL. 14 | 遺物    | A地点SK06・17・29・30、遺構外土器         |
| PL. 15 | 遺物    | A地点遺構外土器                       |
| PL. 16 | 遺物    | B地点遺構外土器                       |
| PL. 17 | 遺物    | B地点遺構外土器                       |
| PL. 18 | 遺物    | B地点遺構外土器、A・B地点石器・石製品           |

# I. 序 説

## 1. 調査にいたる経緯

今回の発掘調査は、千葉縣市原市奈良地先における、市道改良工事に先行して実施されたものである。建設工事の着工に先がけ、市原市長井原恒治より同地区内における埋蔵文化財所在の有無及びその取扱いについての照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛に提出された。これを受け、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課、市原市道路建設課の三者による協議の結果、当地区内における埋蔵文化財について記録保存とする方針が決められた。

発掘調査は、財団法人市原市文化財センターへの委託事業として、調査対象区20,000㎡に対して実施され、確認調査の結果、9,000㎡について本調査をおこなうこととなった。

## 2. 遺跡の位置と環境

奈良大仏台遺跡は、地籍上、千葉縣市原市奈良、屋敷台地先に所在する。

市原市は、房総半島のほぼ中央部から東京湾にいたる、約35kmにおよぶ南北に長い市域をもつ。市域の中央には養老川が貫流し、下流域には広い沖積地を形成している。その下流右岸に市原台地が、また左岸には袖ヶ浦台地が発達し、市原台地は、北を村田川、また袖ヶ浦台地は南を小櫃川河谷にはさまれ、その前面には東京湾に接する海岸平野が形成されている。

今回調査を実施した奈良大仏台遺跡は、村田川左岸上流域に属す。村田川は、長生郡長柄町権現森付近より発し、東京湾にむかって西流する全長20kmの河川であり、本遺跡は、長柄町七里野付近より北流し、市原市瀬又で本流に合流する一支流に面した台地上に立地する。遺跡の標高は60～75mであり、谷底との比高差は20～30mを測る。

本遺跡は、市遺跡分布地図<sup>①</sup>によるならば、「遺跡番号888 奈良大仏台遺跡」として、今回の調査対象範囲を含む台地全体が遺跡範囲として登録されている。遺跡名となる奈良の大仏台は、平将門伝説のある地であり、現在、市指定の石造の等身大釈迦如来像が、本調査区A地点南東側に鎮座している（Fig. 1）。

村田川流域では、その下流域において大規模な開発にともなう調査が実施されており、とくに市原市草刈貝塚<sup>②</sup>、千葉市有吉北貝塚<sup>③</sup>では、貝塚をともなう縄文時代中期の環状集落が検出されている。その主時期は、ともに阿玉台Ⅰb式から加曽利EⅢ式期前後であり、草刈貝塚中心部、草刈遺跡B区では、竪穴住居跡177軒、土坑573基ほかが検出されている。また、有吉北貝塚では竪穴住居跡130軒、小竪穴760基が検出され、遺跡の北側と南西斜面部に大規模な貝層が形成されている。

これに対して、村田川上流域、奈良大仏



Fig. 1 奈良の大仏

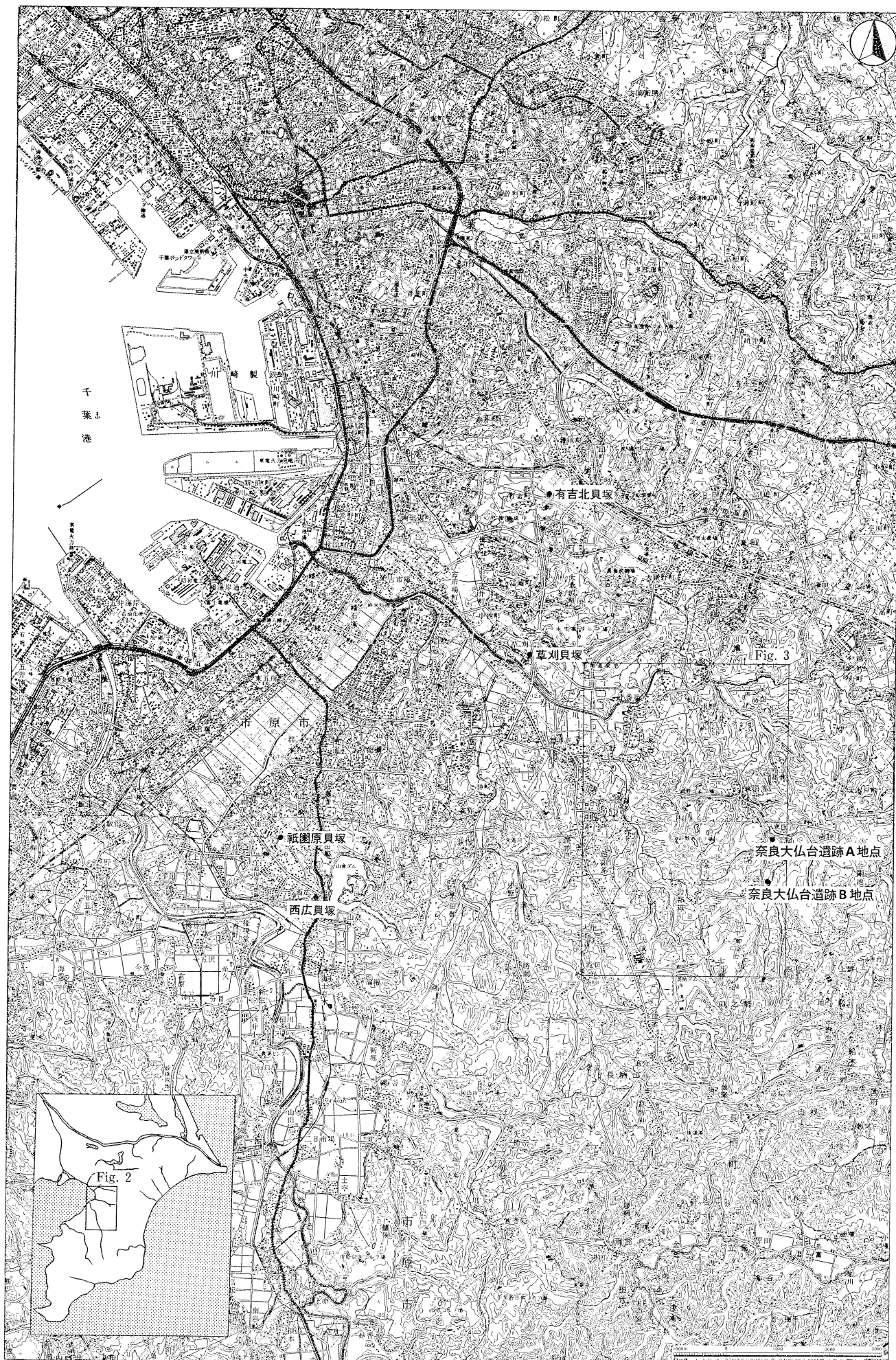


Fig. 2 遺跡位置図(1/100,000)

(国土地理院発行地形図 1:50,000 千葉 姉崎より)



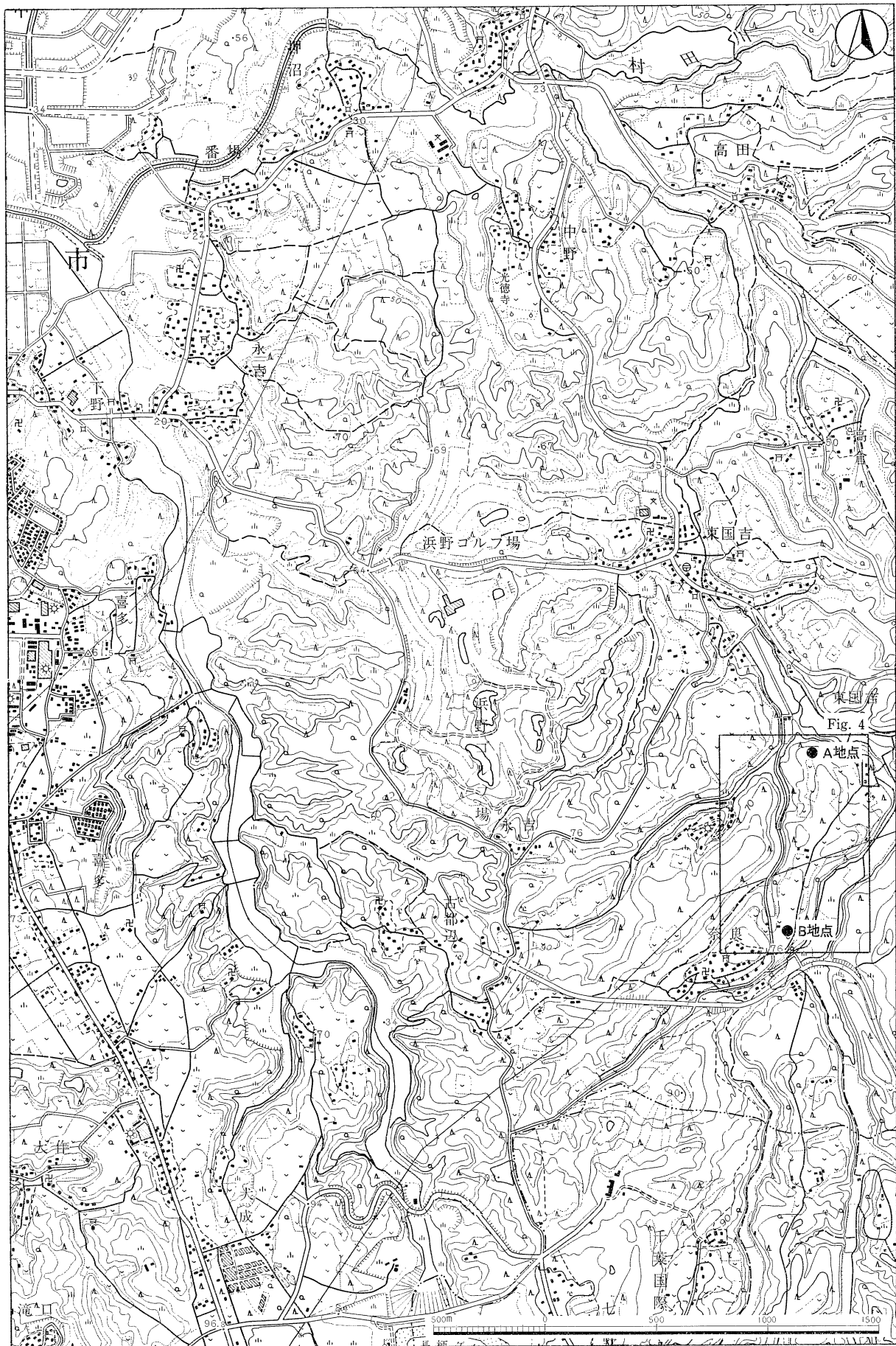


Fig. 3 遺跡位置図(1/25,000) (国土地理院発行地形図 1:25,000 蘇我 海士有木より)

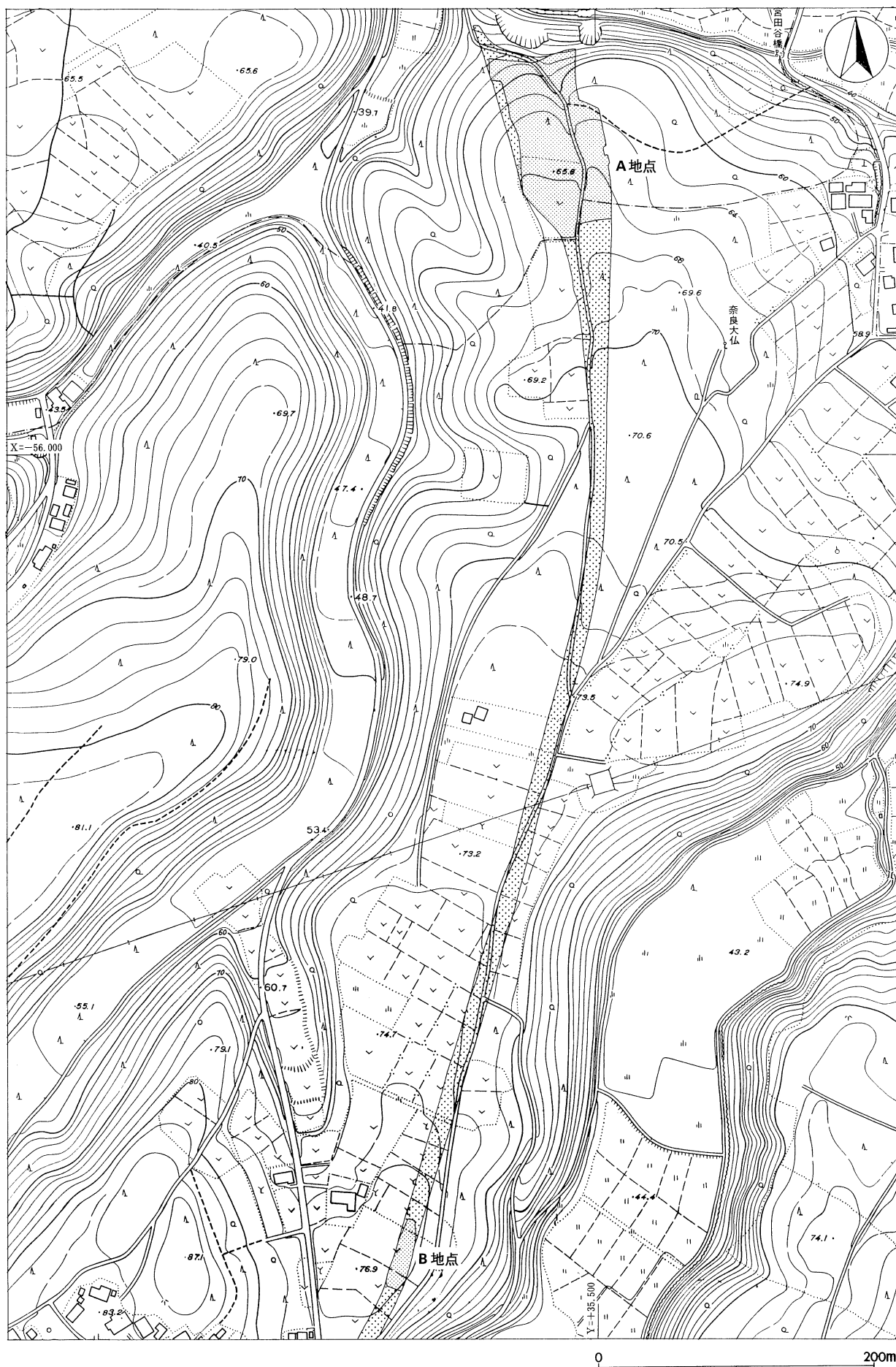


Fig. 4 調査対象範囲と本調査区(1/4,000)

(1980年測図 市原市地形図 1:2,500 D-9より)

台遺跡周辺域では、いまだ調査例が少なく、同一水系上の川中遺跡<sup>4)</sup>において弥生時代終末期の竪穴住居跡、古墳時代前期の方形周溝墓などが検出されていることが知られている程度である。市分布地図によるならば、奈良大仏台遺跡北西側小支谷対岸、猫沢遺跡において、縄文土器の散布が登録されているが、その内容等不明である。この周辺域においても、今後開発が波及する可能性があり、自然環境を含めその実体を早急に把握しておく必要がある。

### 3. 調査の概要

調査は、道路建設にともなうものであるため、全長がおよそ1,000mを測るものの、調査範囲は限定されている。とくに、現道部分と重複する対象区中央部については、調査区を確保することが容易ではなかった。確認調査については、公共座標をもとに、2×4mのグリッドをもうけたが、北側部分については、任意にトレンチを設定して実施した。

確認調査の結果、縄文時代中期の遺構と縄文土器の包蔵が認められた、本報告におけるA地点9,000㎡について本調査を実施することとなった。また、散漫ではあるが、土器の散布が認められたB地点670㎡については、確認調査時に拡張し本調査へ移行した。また、A地点についても、部分的ではあるが確認調査時に遺構調査を実施している。

A地点本調査は、確認調査の結果をうけ、遺物包含層である表土下黒褐色土層について原則手掘りとしたが、層厚により、黒褐色土層上層については表土とともに重機により除去しており、包蔵遺物すべてを救済することはできていない。ただし、遺物の散布は予想より散漫であったこともあり、小破片をのぞき、平面的には原則図化した(Fig. 34)。また、小竪穴、土坑墓、掘立柱建物など竪穴住居以外の遺構の存在も仮定し、明らかに風倒木痕と考えられるものをのぞき、確認面における黒色土の落ち込みはすべてこれを除去した。

先土器時代確認調査については、確認調査においても一部実施しているが、本調査終了後余力の範囲内でおこなった。ただし、面積的には限定されたものであった。

A地点本調査における発掘区は、公共座標を使用して、大グリッドを20m単位とし、これを2m単位に分割した(Fig. 5)。グリッドの呼称は北西隅を基準として各遺構図に記し、その位置関係をしめした。このグリッド配置は、調査時のものをそのまま使用している。

- (1) 市原市教育委員会 1988『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図 北部編』
- (2) 高田 博ほか 1986『千原台ニュータウンⅢ 草刈遺跡(B区)』財団法人千葉県文化財センター
- (3) 財団法人千葉県文化財センター 1986「有吉北貝塚」『千葉県文化財センター年報』No. 12
- (4) 田中清美 1987『川中遺跡』財団法人市原市文化財センター 調査報告書第13集

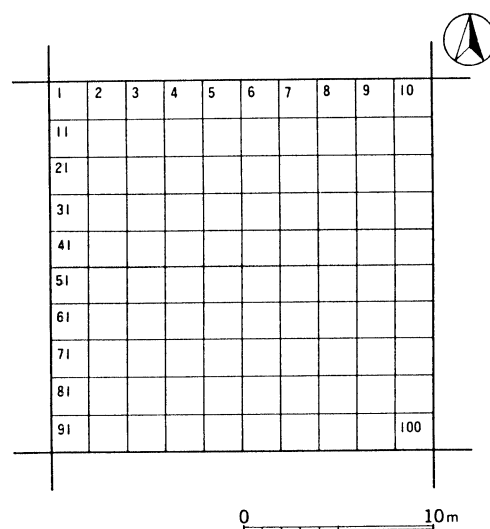


Fig. 5 グリッドの設定(1/400)

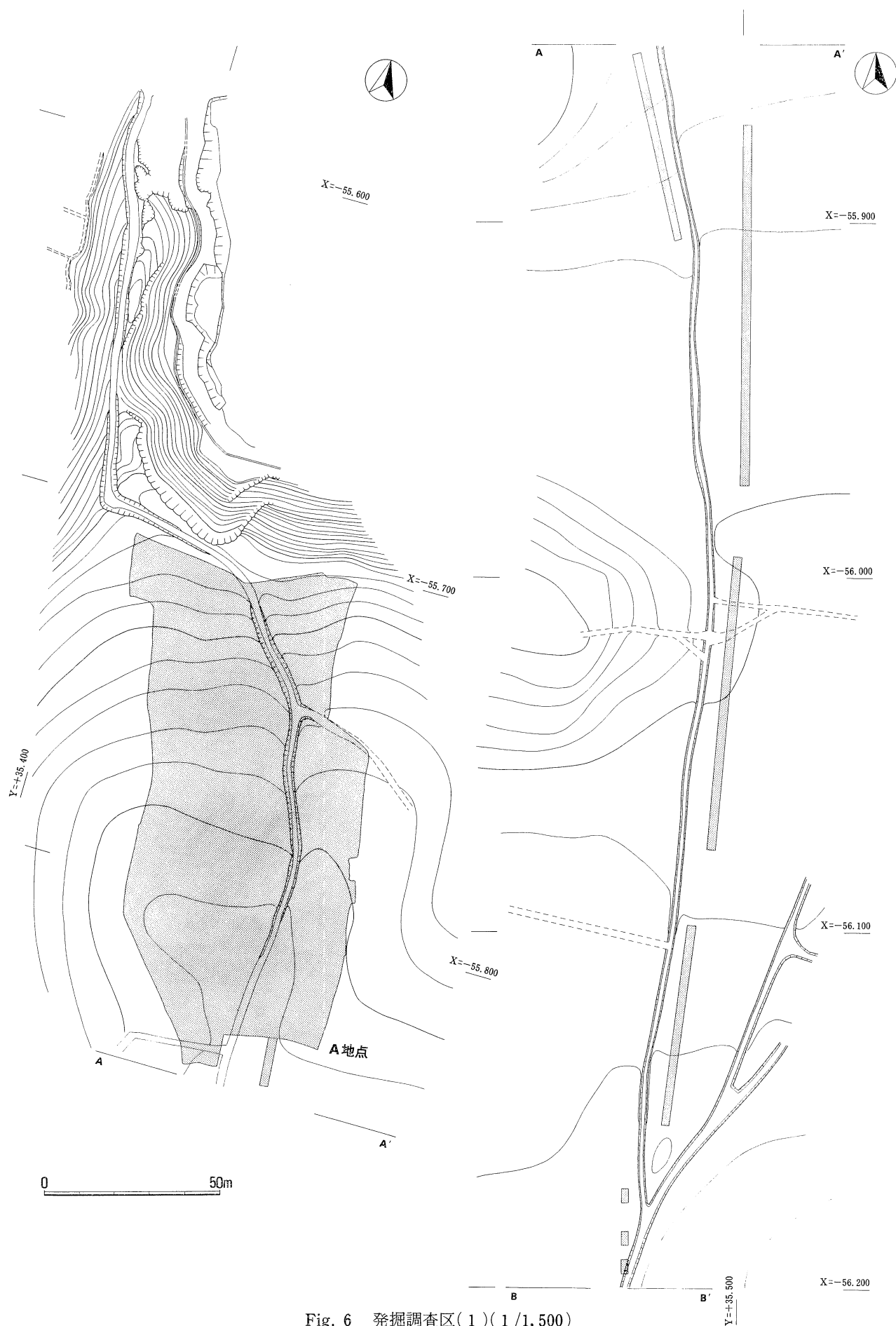


Fig. 6 発掘調査区(1)(1/1,500)



Fig. 7 発掘調査区(2)(1/1,500)

## Ⅱ. A地点の調査

### 1. 遺跡の概要

A地点は、北方向へ突出する台地の北端部にあり、河谷に直接面して立地する。調査原因である道路が切り通しとなる部分であり、まとまった調査範囲が確保された。本調査面積は9,000㎡である。遺跡は、グリッド7列付近を最高部とし、北へ向かって緩斜面となる。それ以北については、現道部分をはさみ崖状となる。また、調査区南端部は、西へ開口する埋没谷へ連続するものと推定される。確認面標高は、65.5mから56.5mを測る。

調査の結果、縄文時代中期加曽利EⅡ式期の竪穴住居跡3軒、平安時代初期の竪穴住居跡1軒、縄文時代の土坑30基、時期不明の炭窯と考えられる焼土坑3基、溝3条が検出された。縄文時代の土坑30基のうち、所謂落とし穴が22基、小竪穴が1基、土坑墓が5基、性格不明土坑3基であり、落とし穴を

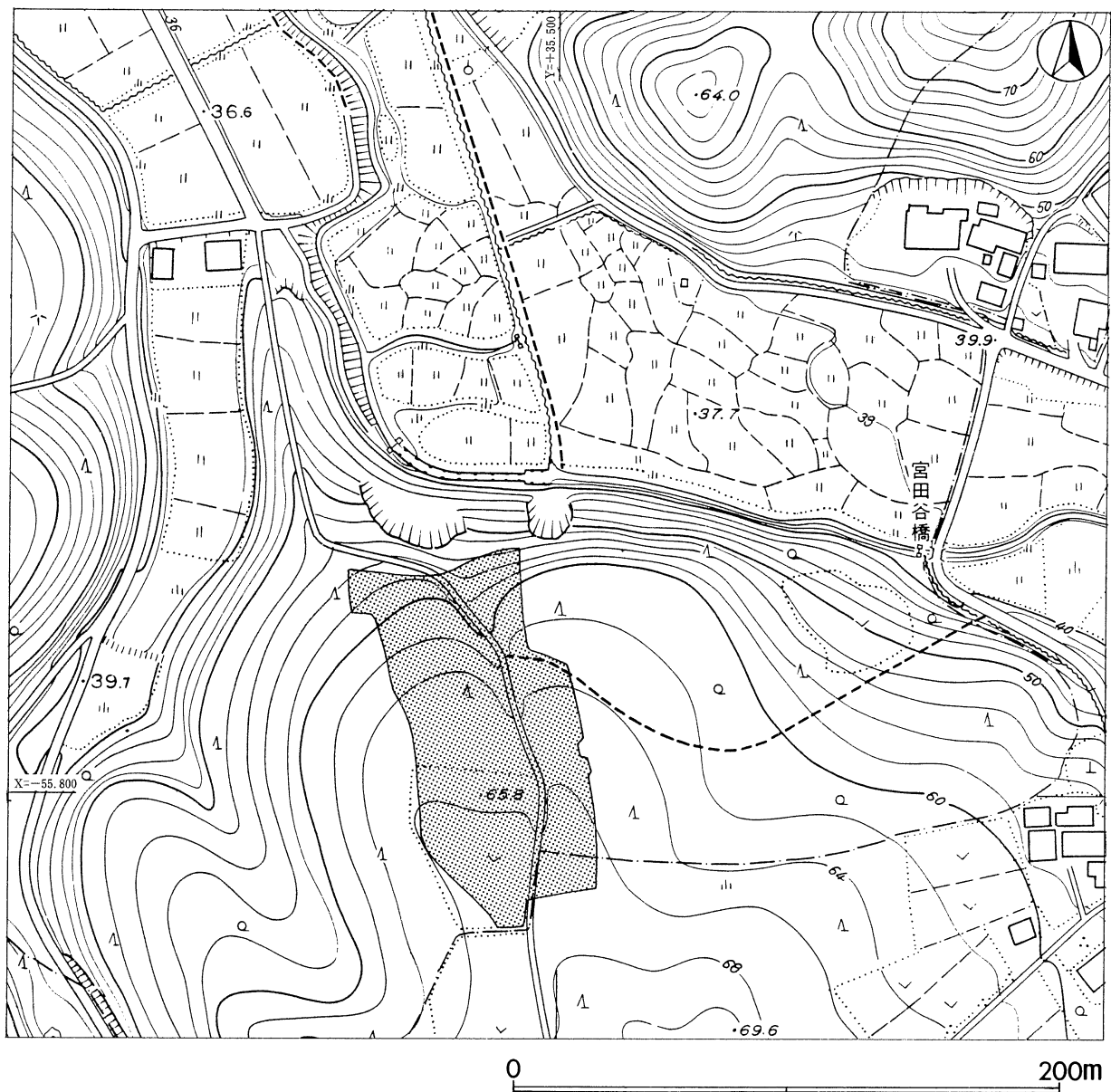


Fig. 8 A地点調査範囲と周辺の地形(1/2,500) (1980年測図 市原市地形図 1:2,500 D-9より)

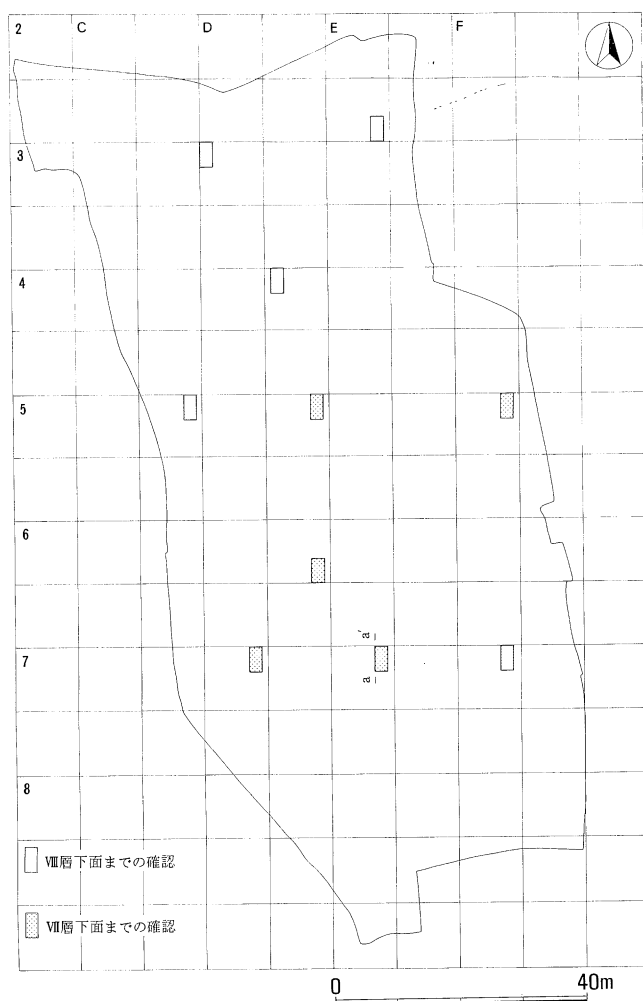


Fig. 9 先土器時代確認グリッド配置と基本層序  
(1/1, 200・1/60)

のぞき、竪穴住居跡と同時期の所産であると想定される。このうち、土坑墓としたものは、今回の調査で明確な確証が得られているわけではない。この他に、調査区を南北に縦断する切り通し状の溝が存在するが、これは現道に対応する。年代的に遡る可能性もあるが、その開設時期を限定することはできなかった。

遺構以外では、縄文時代早期の撚糸文系土器が比較的まとまって出土しているほか、縄文時代後期など各時期若干の土器の散布が認められた。

## 2. 基本層序

奈良大仏台遺跡では、表土下暗褐色土層に遺物の包蔵が認められた。これは、遺跡最高部では層厚10cm程度であるが、北端部では、表土との間に新期テフラ層をはさみ、40cm以上を測る。

ローム層については、II層暗褐色土層からの漸移層であるII'層をはさみ、III層が黄褐色ソフトローム層、IV~V層が明黄褐色土ハードローム層であり、立川ローム第I黒色帯(V層)は識別することができなかった。VI層が明黄褐色ハードローム層、VII層が暗褐色土ハードローム層であり、立川ロー

Tab. 1 A地点新旧遺構番号対照表

| 調査   | 報告    | 性格   | 調査  | 報告    | 性格   | 調査  | 報告    | 性格   | 調査  | 報告    | 性格   |
|------|-------|------|-----|-------|------|-----|-------|------|-----|-------|------|
| 確認調査 |       |      | 106 | S X03 | 焼土坑  | 117 | 欠     |      | 128 | S K14 | 落とし穴 |
| 01   | S B01 | 竪穴住居 | 107 | S K12 | 落とし穴 | 118 | S B03 | 竪穴住居 | 129 | S K18 | 落とし穴 |
| 02   | S B02 | 竪穴住居 | 108 | S X02 | 焼土坑  | 119 | S D03 | 溝    | 130 | S K15 | 落とし穴 |
| 03   | S B03 | 竪穴住居 | 109 | S K09 | 落とし穴 | 120 | S D02 | 溝    | 131 | S K29 | 落とし穴 |
| 04   | S X01 | 焼土坑  | 110 | S K03 | 土坑   | 121 | S K30 | 落とし穴 | 132 | S K26 | 落とし穴 |
| 本調査  |       |      | 111 | S K02 | 土坑   | 122 | S K23 | 落とし穴 | 133 | S K24 | 落とし穴 |
| 101  | S K06 | 土坑墓  | 112 | S K11 | 落とし穴 | 123 | S K17 | 落とし穴 | 134 | S K21 | 落とし穴 |
| 102  | S K07 | 土坑墓  | 113 | S K04 | 土坑墓  | 124 | S K16 | 落とし穴 | 135 | S K22 | 落とし穴 |
| 103  | S K08 | 土坑墓  | 114 | S K10 | 落とし穴 | 125 | S K19 | 落とし穴 | 136 | S K25 | 落とし穴 |
| 104  | S D01 | 溝    | 115 | S K05 | 土坑墓  | 126 | S K20 | 落とし穴 | 137 | S K28 | 落とし穴 |
| 105  | S B04 | 竪穴住居 | 116 | S K01 | 小竪穴  | 127 | S K13 | 落とし穴 | 138 | S K27 | 落とし穴 |

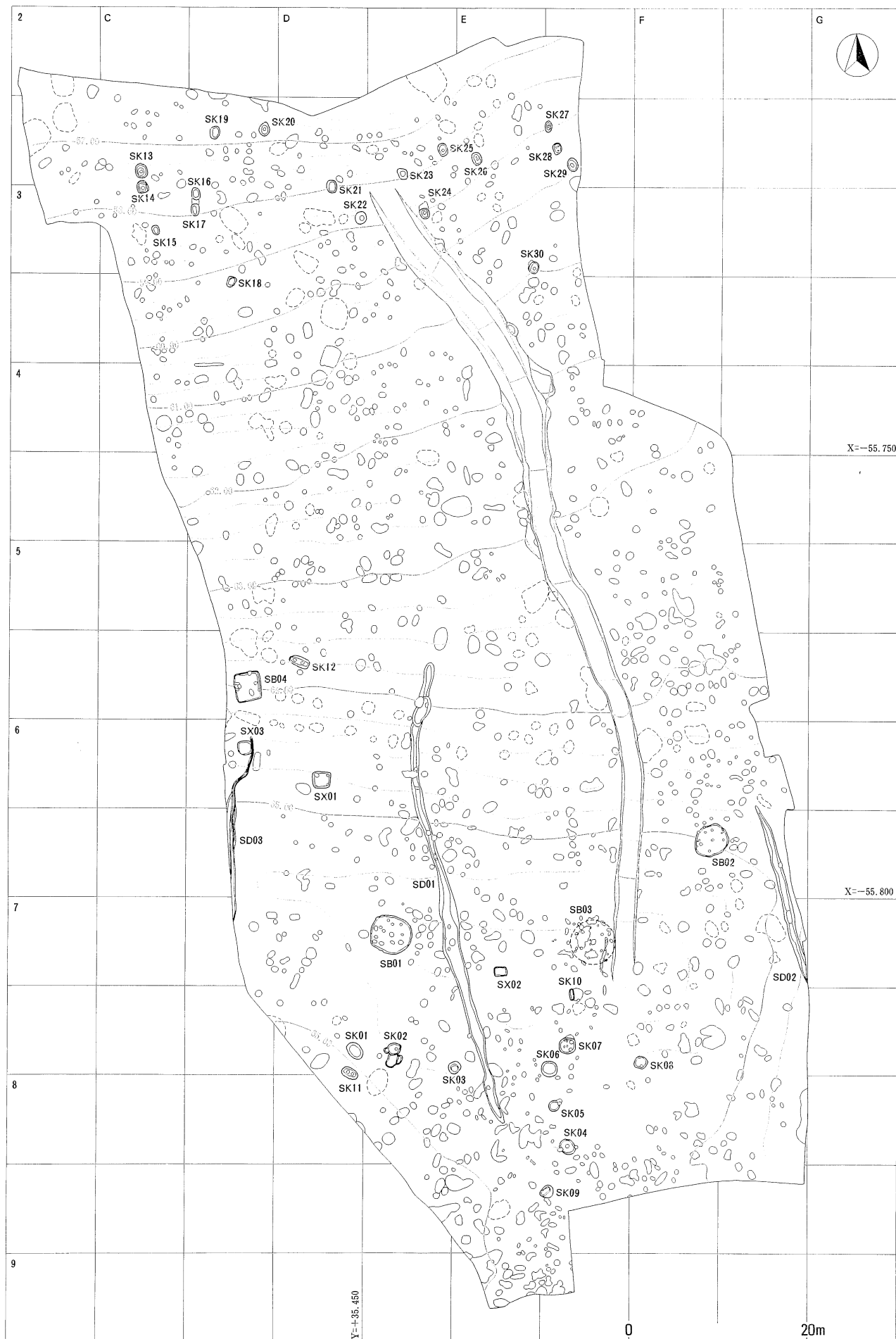


Fig.10 A地点全体図(1/600)

(破線は風倒木痕)



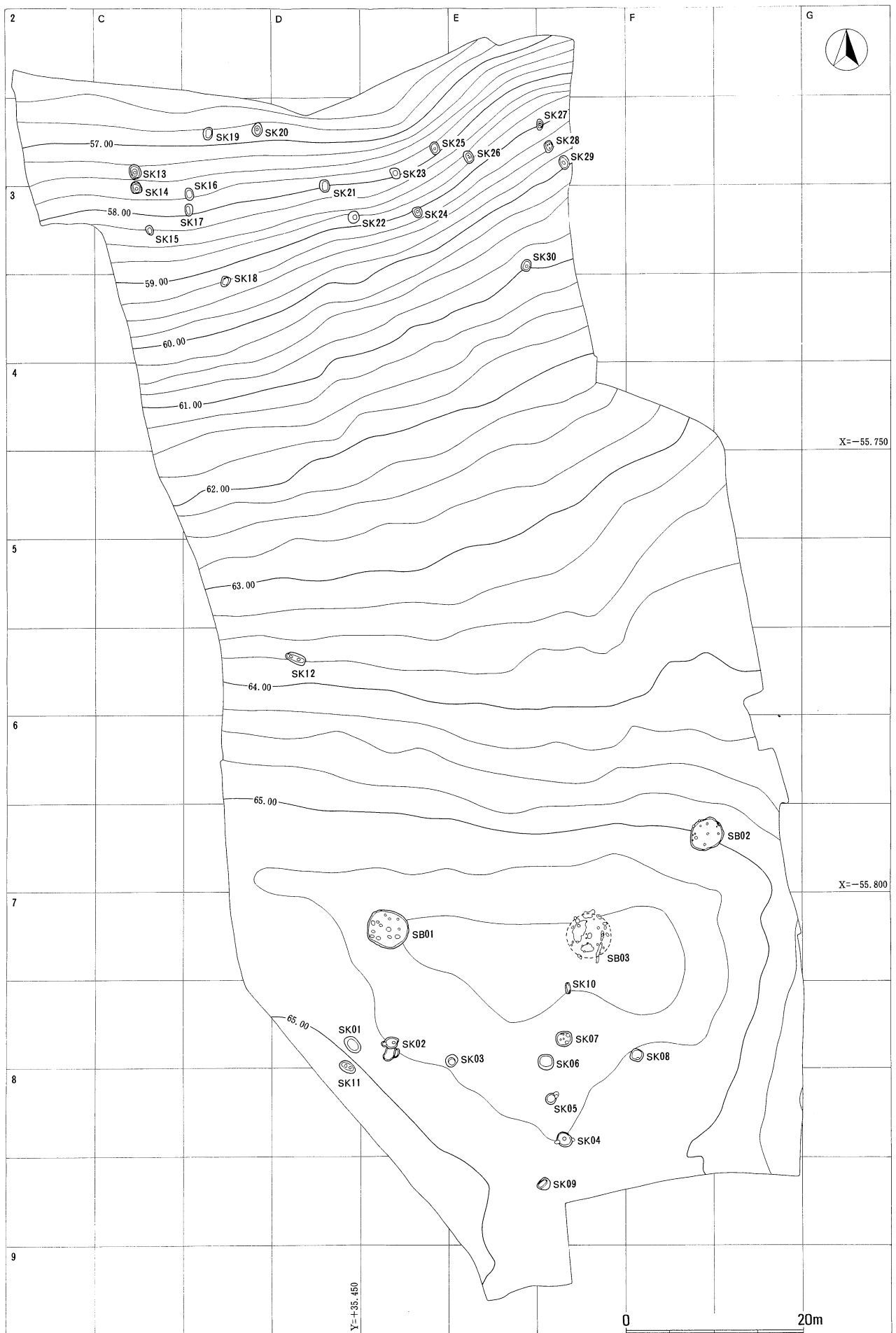


Fig. 11 A地点縄文時代の遺構(1/600)

ム第Ⅱ黒色帯に相当する。Ⅶa層は、b層に比較して色調がやや淡く明るい。Ⅷ層は明黄褐色土ハードローム層であり、立川ローム最下層に相当する。Ⅸ・Ⅹ層は褐色ローム層であり、武蔵野ローム層へ移行する(Fig. 9)。

先土器時代確認調査は、面積的に不十分なものであったが、E7グリッドV～Ⅵ層上面より打瘤痕を残すメノウ製の剥片が1点出土したのみであった。

### 3. 竪穴住居跡

#### 竪穴住居SB01(Fig. 12・13・14)

D7グリッドに位置する。確認調査時に調査。竪穴平面形態はほぼ円形であるが、N-25°-W方向に長軸をとる。規模は、長軸長4.76m、短軸長4.25m、確認面面積16.54㎡、床面積14.12㎡を測る。確認面からの深さは28～12cmである。床は、ほぼハードローム上面にあり、硬質であった。柱穴は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が主柱穴であり、その床面からの深さは、P<sub>1</sub>が89cm、P<sub>2</sub>が54cm、P<sub>3</sub>が46cm、P<sub>4</sub>が63cmを測る。建替えは認められない。その他、P<sub>5</sub>が23cm、P<sub>6</sub>が44cm、P<sub>7</sub>が30cm、P<sub>8</sub>が40cm、P<sub>9</sub>が71cm、P<sub>10</sub>が18cm、P<sub>11</sub>が32cm、P<sub>12</sub>が12cmを測る。このうち、P<sub>8</sub>～P<sub>10</sub>は、出入口部に関するものであろうか。炉は、胴部下半を打ち欠いた土器を、正位に埋置した土器囲い炉である。その掘形は、径69～47cmを測る。1層が焼土粒を多量に含む暗褐色土層、2層・3層が明黒褐色土層、4層がローム粒を多量に含む明黒褐色土層である。炉部分、5層は焼土粒を若干含む灰混じりの黒褐色土層、6層は焼土を多量に含む褐色土層である。

遺物は、炉体土器の2、およびその直上より出土した5をのぞき、基本的に投棄によると推定され、焼土を含む覆土1層と対応する。1は、口縁部が4単位の波状となり、その波頂部に貫通孔をもつ把手がつくられる。把手両脇には沈線による円形文、口唇部、口縁部下には各1条の沈線がめぐる。胴部は、2～3本の懸垂文により分割され、クシによる条線により充填される。2・4・12は、連弧文系である。2は、口縁部下に交互押捺の円形刺突文が施され、3条の連弧文がめぐる。その胴部破片がSK01覆土、D7・E7グリッドより出土している。4は、連弧文最下条が単位文化しているものである。3・6・7は、鉢形ないしは浅鉢形土器である。3は、上下が未接合であり、その径により復原した。6は、撚糸文施文後に、屈曲点に2条の沈線をめぐらす。14も同一個体であろうか。5・8・9・10は、渦巻文と楕円文の組合せをもつものである。他に、SK01-1の小片が覆土より出土している(Fig. 21・34)。石器は、磨石と考えられる15が出土しているのみである。長さ7.80cm、幅8.78cm、厚さ3.71cm、重さ420gをはかる。

#### 竪穴住居SB02(Fig. 15)

F6グリッドに位置する。確認調査時に調査。竪穴平面形態はやや楕円形であり、N-40°-E方向に長軸をとる。規模は、長軸長4.06m、短軸長3.40m、確認面面積11.00㎡、床面積9.69㎡を測る。確認面からの深さは25～10cmである。ただし、床は軟質であったため、セクションベルト部分をのぞき、ハードロームまで掘り下げてしまった。平面図破線はハードローム

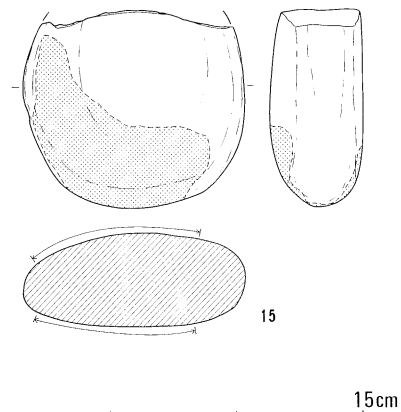


Fig. 12 SB01出土遺物(1)(1/3)

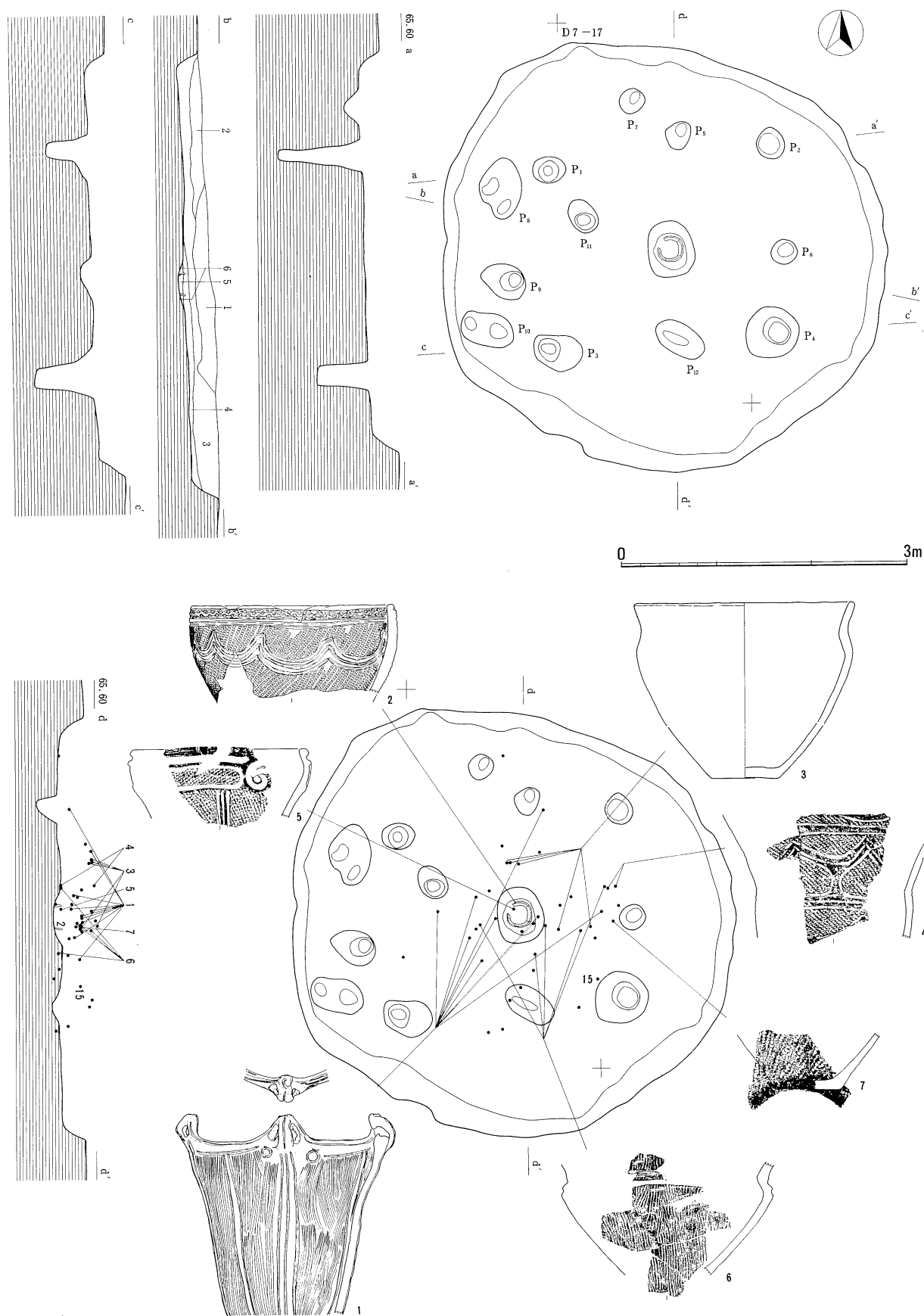


Fig. 13 SB01実測図( 1 / 60 )

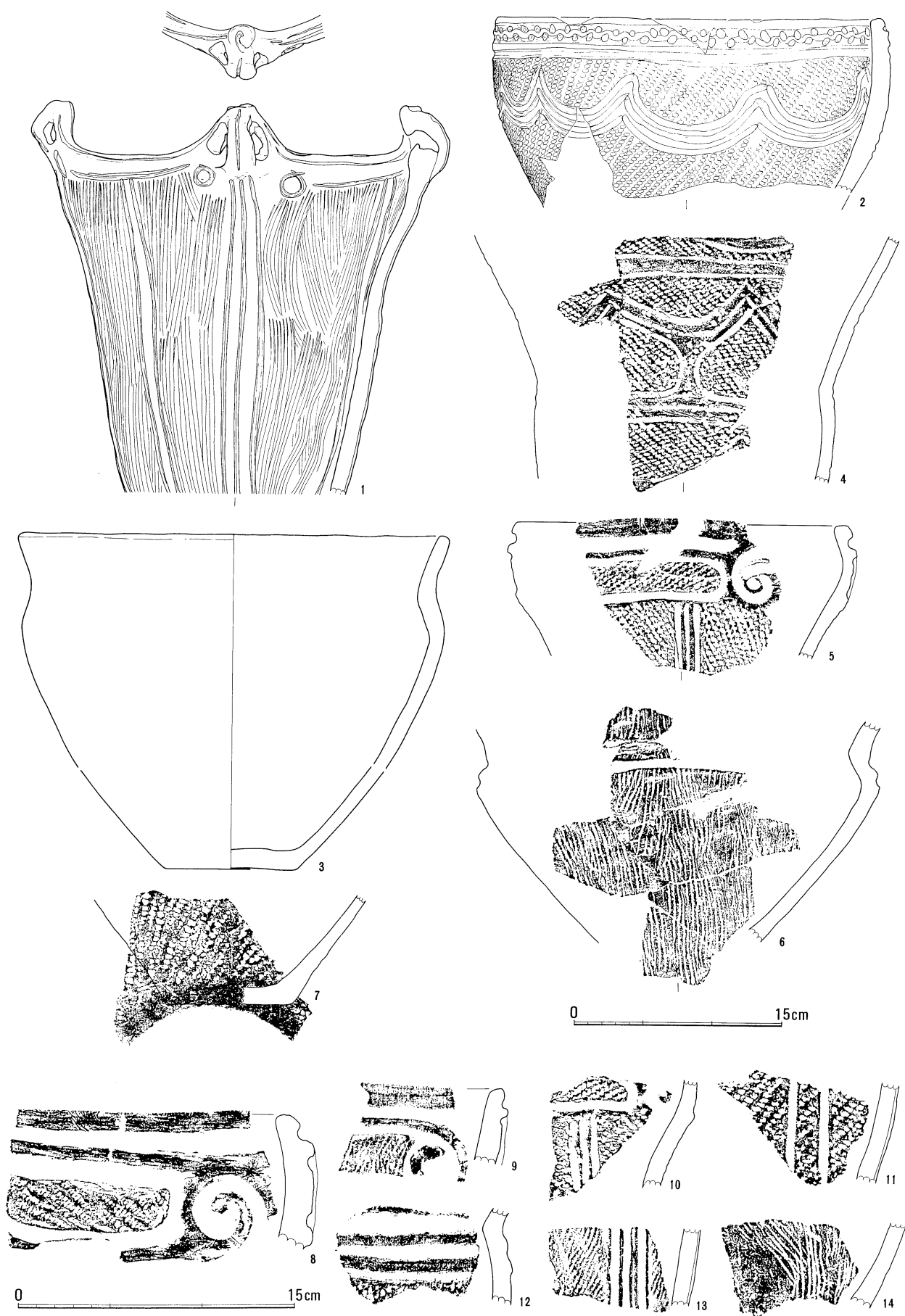


Fig. 14 SB01出土遺物(2)(1/4・1/3)

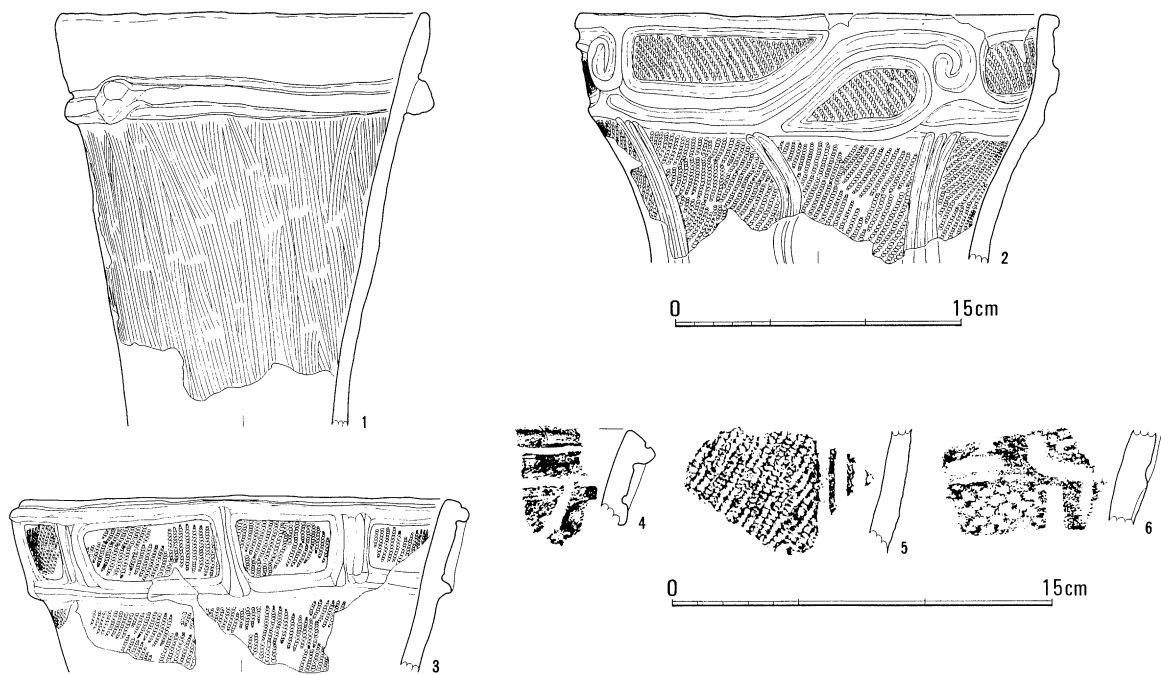
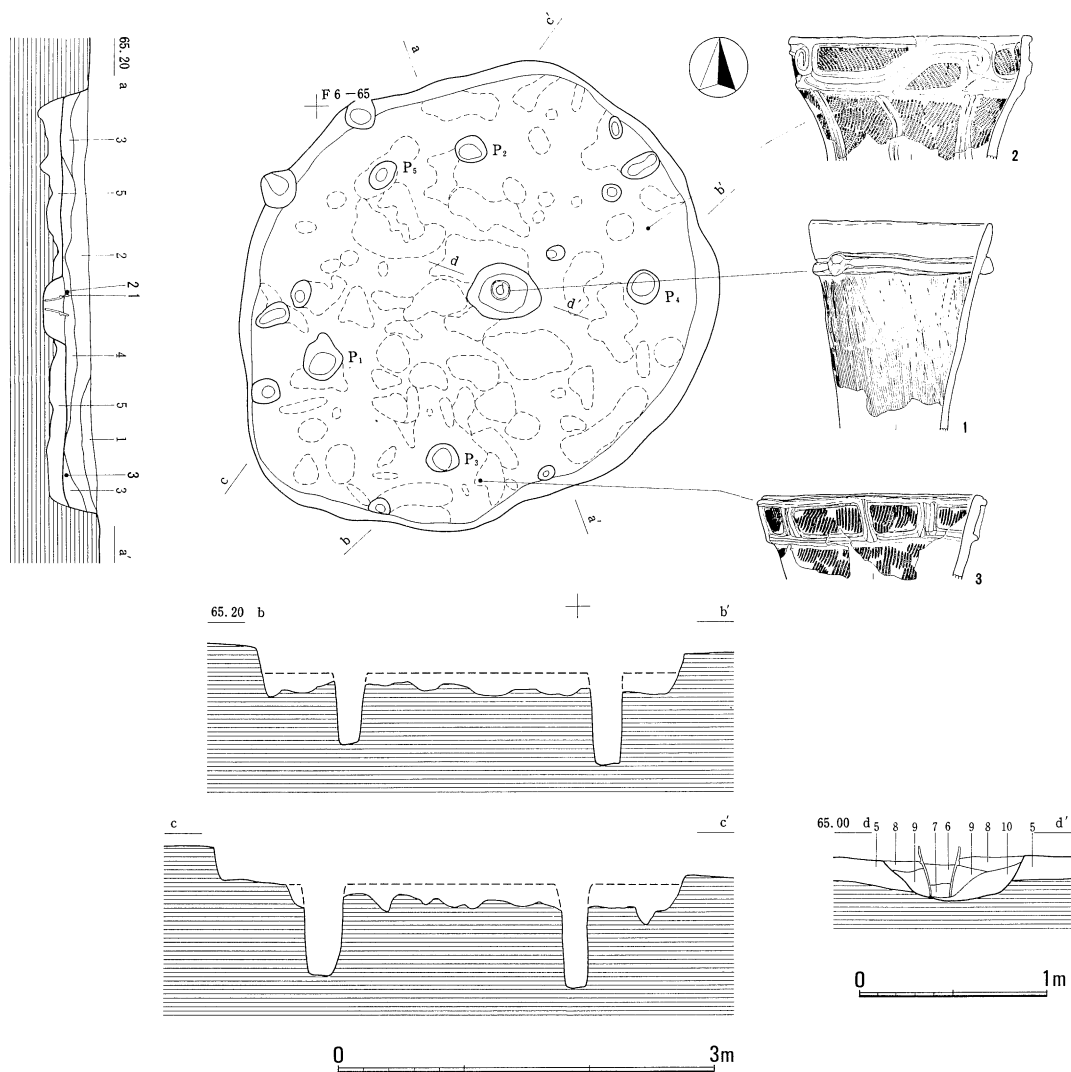


Fig.15 SB02実測図(1/60・1/40)、出土遺物(1/4・1/3)

上面の凹凸と考えられるものである。柱穴は、 $P_1 \sim P_4$ が主柱穴であり、床面レベルからの深さは、 $P_1$ が74cm、 $P_2$ が80cm、 $P_3$ が52cm、 $P_4$ が70cmを測る。建替えは認められない。他では、 $P_5$ が57cmを測ることをのぞき、30cm前後未満である。炉は、胴部下半を打ち欠いた土器を、正位に埋置した土器囲い炉である。その掘形は、径54～44cmを測る。1層がローム粒、ロームブロックを含む暗褐色土層、2層が明黒褐色土層、3層・4層がローム粒を多量に含む明黒褐色土層であり、5層はソフトローム層である。炉部分、6層・8層は焼土粒を若干含む暗褐色土層、7層は焼土を多量に含む層である。9層はロームブロックを多量に含む明黒褐色土層である。

出土土器は、1が炉体土器であり、2・3は、竪穴壁際近く床面レベルより逆位に出土している。これ以外では、小破片が若干出土しているのみである。1は、無文の口縁部下に貼り付けによる隆帯をめぐらす。隆帯には、隆帯成形時の粘土紐の末端を丸めた、3単位の瘤が付加される。胴部は、ハケによる条線が上下方向に施される。2は、4単位の渦巻文と、これにより表出された8単位の楕円ないしは台形の区画文が配される。胴部は、3本組の懸垂文と2本組の波状沈線文が交互に垂下する。3は、上下2本の隆帯間を、1本と2本を交互に配す縦隆帯の貼り付けにより、9ないしは10単位に分割する。胴部懸垂文は認められない。4も同一個体と考えられる。

#### 竪穴住居SB03(Fig. 16・17)

調査区最高部、E7グリッドに位置する。この周辺部分は、確認面までの層厚が薄く、確認調査段階で、表土直下より比較的まとまって土器が出土した。本調査の結果、その下部より土器囲い炉と主柱穴と考えられるPitが検出されたことから竪穴住居跡と認定した。したがって、竪穴範囲、床レベルは明確ではない。主柱穴の配置から想定すると、住居規模は他の2軒に対して同規模ないしはやや大形であり、長軸方位は $N-10^\circ - W$ 前後と推定される。柱穴は、 $P_1 \sim P_4$ が主柱穴であり、その確認面からの深さは、 $P_1$ が49cm、 $P_2$ が49cm、 $P_3$ が52cm、 $P_4$ が47cmを測る。建替えは認められない。その他、25cmより深いPitをあげるならば、 $P_5$ が40cm、 $P_6$ が29cm、 $P_7$ が29cm、 $P_8$ が25cmを測る。炉は、胴部下半を打ち欠いた土器を中央正位に埋置し、その外側に同一個体の土器破片を配した土器囲い炉である。その掘形は、径60cm前後であり、中央炉体土器に対応した掘り込みが認められた。その土層は、1層・3層・4層が若干の焼土粒を含む明黒褐色土層、2層が灰混じりの暗褐色土層であるが、焼土の堆積はかならずしも濃くはない。5層・7層はローム粒を含む明黒褐色土層、6層は黒褐色土層である。

土器の出土状態は、炉体土器1・3をのぞくと、他は確認調査時にまとまって出土したものである。おそらく、覆土に投棄されたものと考えられる。1は、7単位の渦巻文と、これにより表出された楕円ないしは三角形の区画文が配される。渦巻文の本来の割り付けは、3単位の連結によるものと想定される。胴部は、3本組の懸垂文が垂下する。なお、土器内面には、帯状の黒化部分が認められた。2は、連弧文系の土器であり、3本組の直線、連弧、波状沈線がめぐる。3は、隆帯による円形文と渦巻文によって4単位に分割される。胴部は、3本組の懸垂文と2本組の波状沈線文が交互に垂下する。4は、波状口縁頂部から垂下する懸垂文が認められる。7・8は連弧文系であり、7は、口縁部下に交互刺突文をもつ。10・11・12・14は条線を地文とする。20・21は、鉢ないしは浅鉢形土器である。他に、SK01-1・2の小片が出土している(Fig. 21・34)。

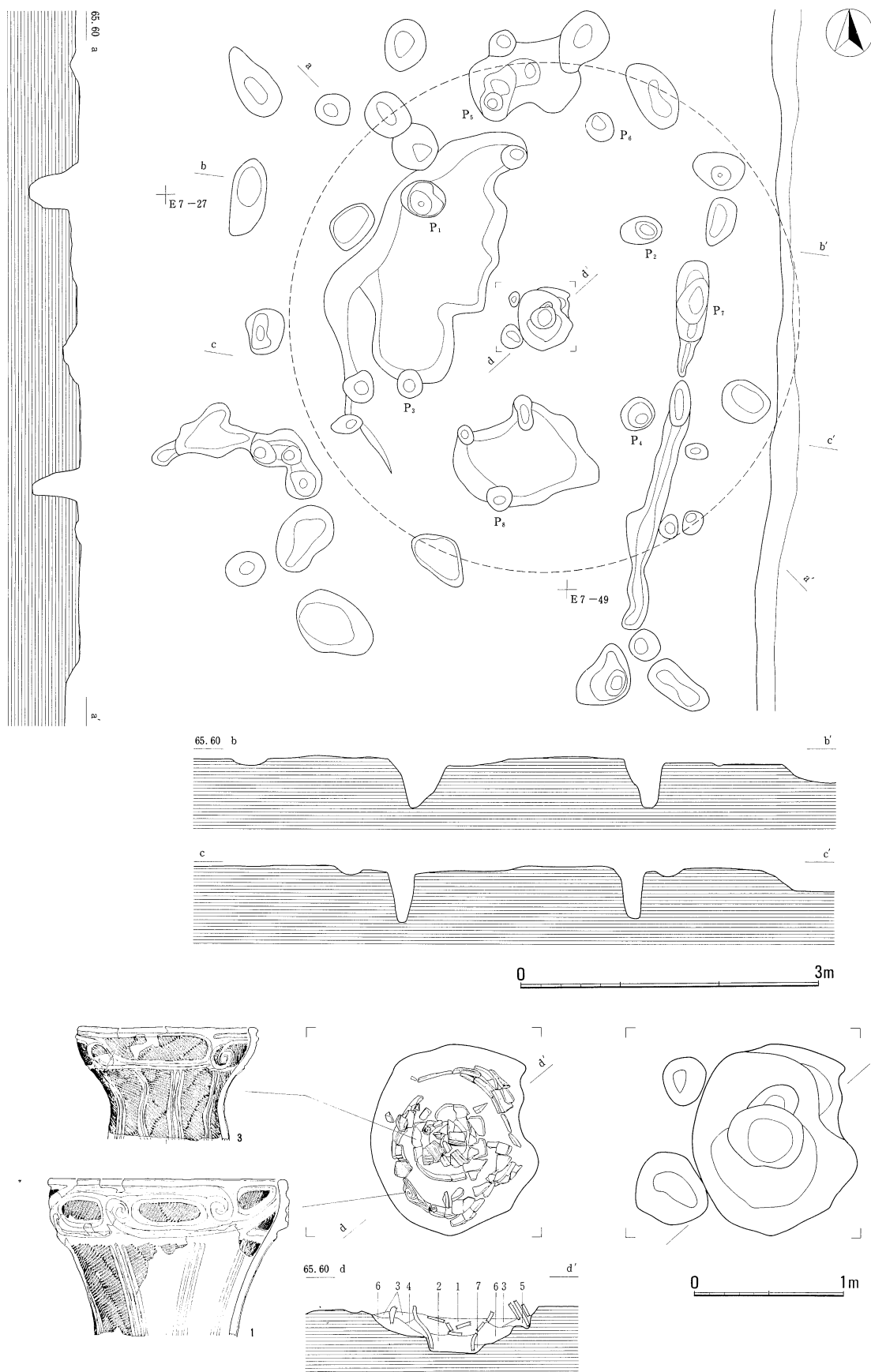


Fig.16 SB03実測図(1/60・1/40)

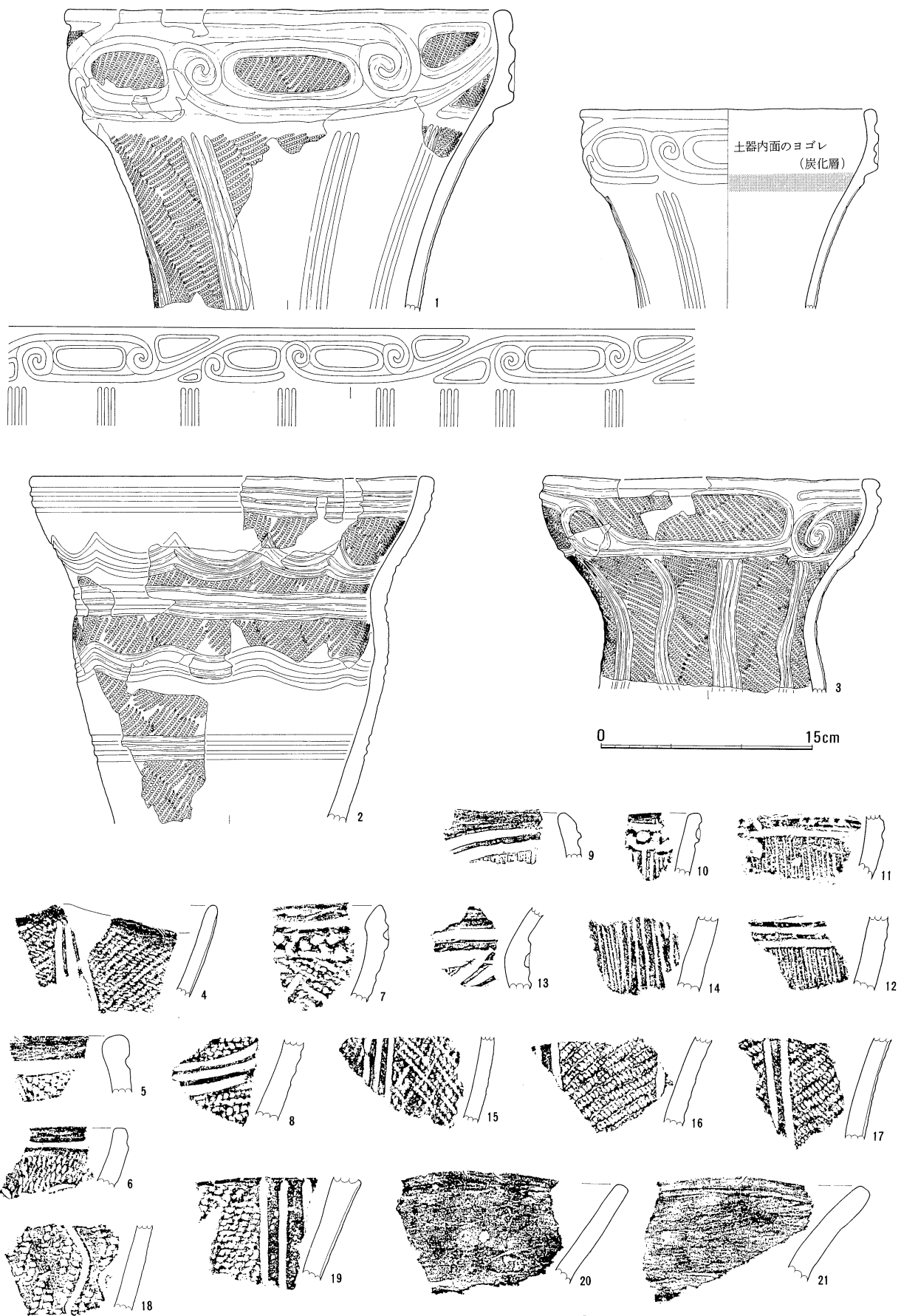


Fig.17 SB03出土遺物(1/4・1/3)



竪穴住居SB04(Fig. 18)

C5グリッドに位置する。竪穴平面形態は長方形であり、カマドを基準とした場合、N-98°-W方向に主軸をとる。規模は、主軸長2.94m、副軸長3.22m、確認面面積9.10㎡、床面積7.75㎡を測る。確認面からの深さは28~8cmである。床は、貼り床構造をとり、掘形は竪穴周辺部が深くなる。床面は、中央部に若干の硬質面が認められた程度である(平面図破線部分)。カマドは、西壁中央にあり、袖基部と火床面が認められた。支柱穴は検出されなかった。Pitの床面からの深さは、P<sub>1</sub>が37cm、P<sub>2</sub>が16cm、P<sub>3</sub>が25cm、P<sub>4</sub>が68cmであるが、本遺構に帰属するものかどうかは不明である。ただし、P<sub>2</sub>は、焼土粒、焼土ブロックの堆積が認められ、当初のカマドの掘形である可能性が高い。土層は、1層が褐色土をブロック状に含む明黒褐色土層、2層が焼土粒を若干含む明黒褐色土層、3層がロームブロックと若干の焼土を含む明黒褐色土層、4層が黒褐色土層、5層・6層が焼土層、竪穴掘形部分7層は、しみ状にロームを混合する明黒褐色土層である。カマド部分、8層は焼土を含まない明黒褐色土層、9層はカマド天井部分の崩落土と考えられ、山砂、焼土、焼土ブロックからなる層、10層は明黒褐色土を地層とし、焼土、山砂粒を多量に混合する層、11層・13層は焼土面、12層は袖基部であり、山砂とローム、黒色土をブロック状に混合する。

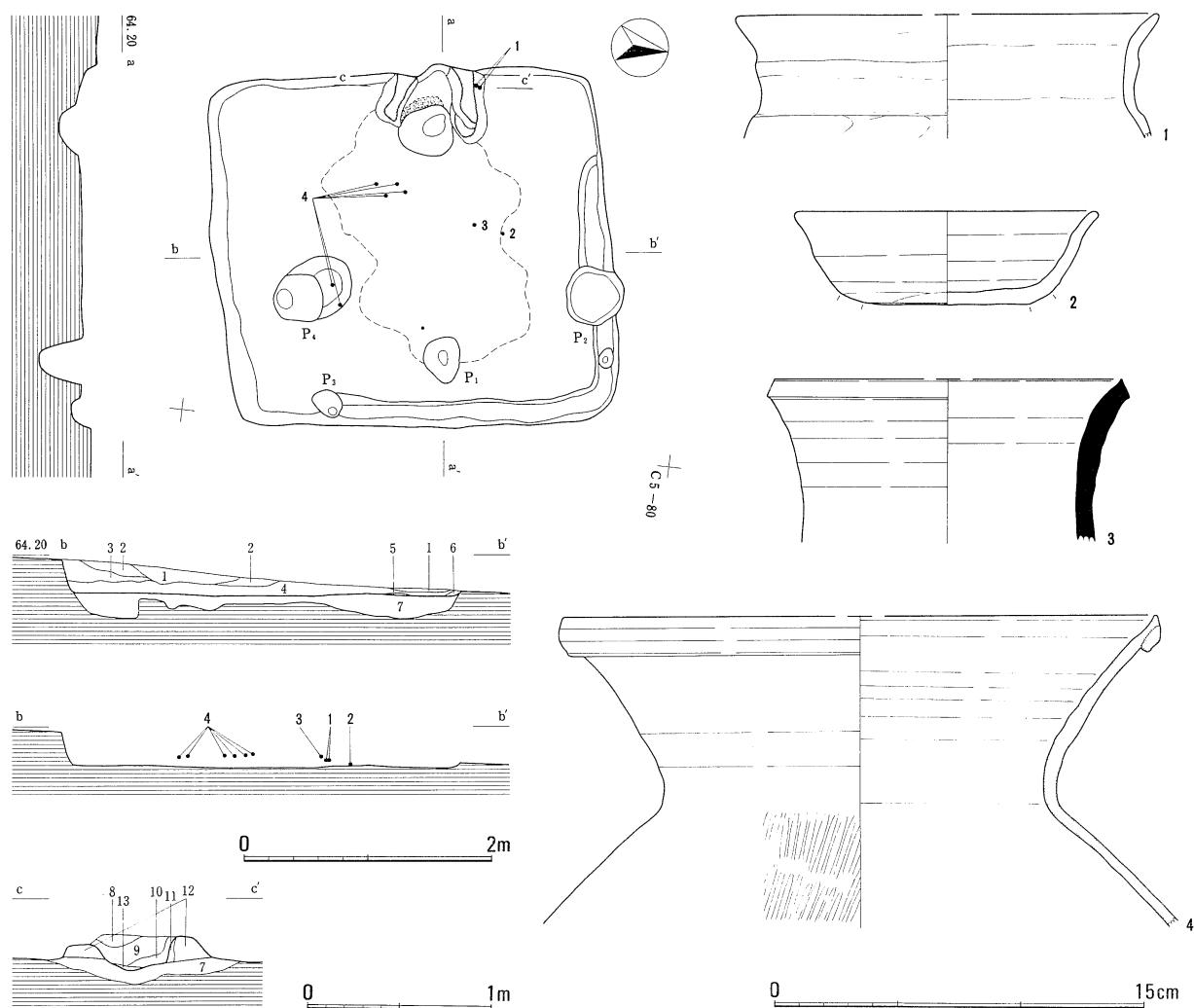


Fig. 18 SB04実測図(1/60・1/40)、出土遺物(1/3)

出土土器は、1がカマド袖脇、2が床面直上、3・4が覆土より出土した。1は、甕形土器であり、復原口径17.2cmをはかる。2は、ロクロ土師器杯であり完存する。口径は12.3cm、器高3.8cm、底部径6.8cmをはかる。体部下半は反時計方向の回転ヘラケズリ、底部は一方向の手持ちヘラケズリである。器面は全体に黒化し、部分的に光沢がみられる。3は、須恵器瓶であり、口縁部1/5周を遺存する。口径は14.2cmである。4は、千葉市域産の須恵器甕と推定される。器面、断面部分の色調は淡黄色～灰黄色であり、土師質に近い。復原口径は24.2cm、胴部外面はタタキ、内面は横方向のナデが認められる。

#### 4. 土坑・溝

##### 小竪穴SK01(Fig. 19・21)

D7グリッドに位置する。袋状の土坑である。確認面長軸長2.13m、短軸長1.51m、底面長軸長1.84m、短軸長1.72mを測る。確認面からの深さは2.21m、底面標高は63.10mである。長軸方位はN-48°-Wである。覆土中位に硬化面をもち(断面破線)、焼土の堆積が認められた。硬化面より上は、黒褐色土とローム粒、ロームブロックを主体とする層が互層となり、硬化面より下は、ぼそぼそのローム混じりの明黒褐色土層を覆土とする。

硬化面よりやや上より、土器が比較的まとまって出土した。1は、口縁部文様帯が渦巻文と長方形区画文からなるものであり、未接合ではあるが、口縁部分で約1/2周程度出土している。胴部の懸垂文は認められない。これは、SB01・03覆土出土土器と接合関係をもつ(Fig. 34)。2・3は、連弧文系土器であり、口縁部下と胴部屈曲部に円形の交互刺突文をもつ。連弧文は省略される。3は、SB01-4になる文様構成をもつが、胎土等若干異にする。4は条線を地文とするものであり、5は懸垂文が認められる。他に、SB01-2の胴部破片と考えられるものが出土しているが、直接接合しない。その出土位置は、他と同じで、硬化面上である。

##### 土坑SK02(Fig. 19・21)

D7グリッドに位置する。不定形の土坑であり、範囲、性格等不明確である。仮に、2基の土坑の重複としてとらえるならば、SK02Aは、確認面最大径1.54m、確認面からの深さは19cm、底面標高は65.05mである。中央Pitは底面から深さ41cmを測る。SK02Bは、長軸長1.76m、長軸方位はN-43°-Eである。確認面からの深さは、15～11cmを測る。

遺物は、いずれもSK02Bより出土したものであり、1は浅鉢形土器である。2は楕円区画文を構成すると考えられ、3は交互刺突文が認められる。4は撚糸文、5は条線を地文として残す。6は土器片錘であり、長さ6.15cm、幅3.85cm、厚さ1.4cm、重さ23.4gを測る。

##### 土坑SK03(Fig. 19・22)

E7グリッドに位置する。確認面径1.49m～1.34m、確認面からの深さは71cm、底面標高は64.70mである。覆土は、1・3層が黒褐色土層、2層がしみ状のロームを混合する明黒褐色土層、4層が焼土層、5層が暗褐色均質土、6層がローム粒、若干の焼土粒を含む明黒褐色土層である。

遺物は、加曽利E式と考えられる小片が出土している。1は、口縁部から懸垂文が垂下するものであり、2は、横走する沈線と垂下する沈線の組合せからなる。3は磨消し懸垂文である。4は、条線を地文とする。他に、SK06-1と接合する小破片が出土している(Fig. 34)。

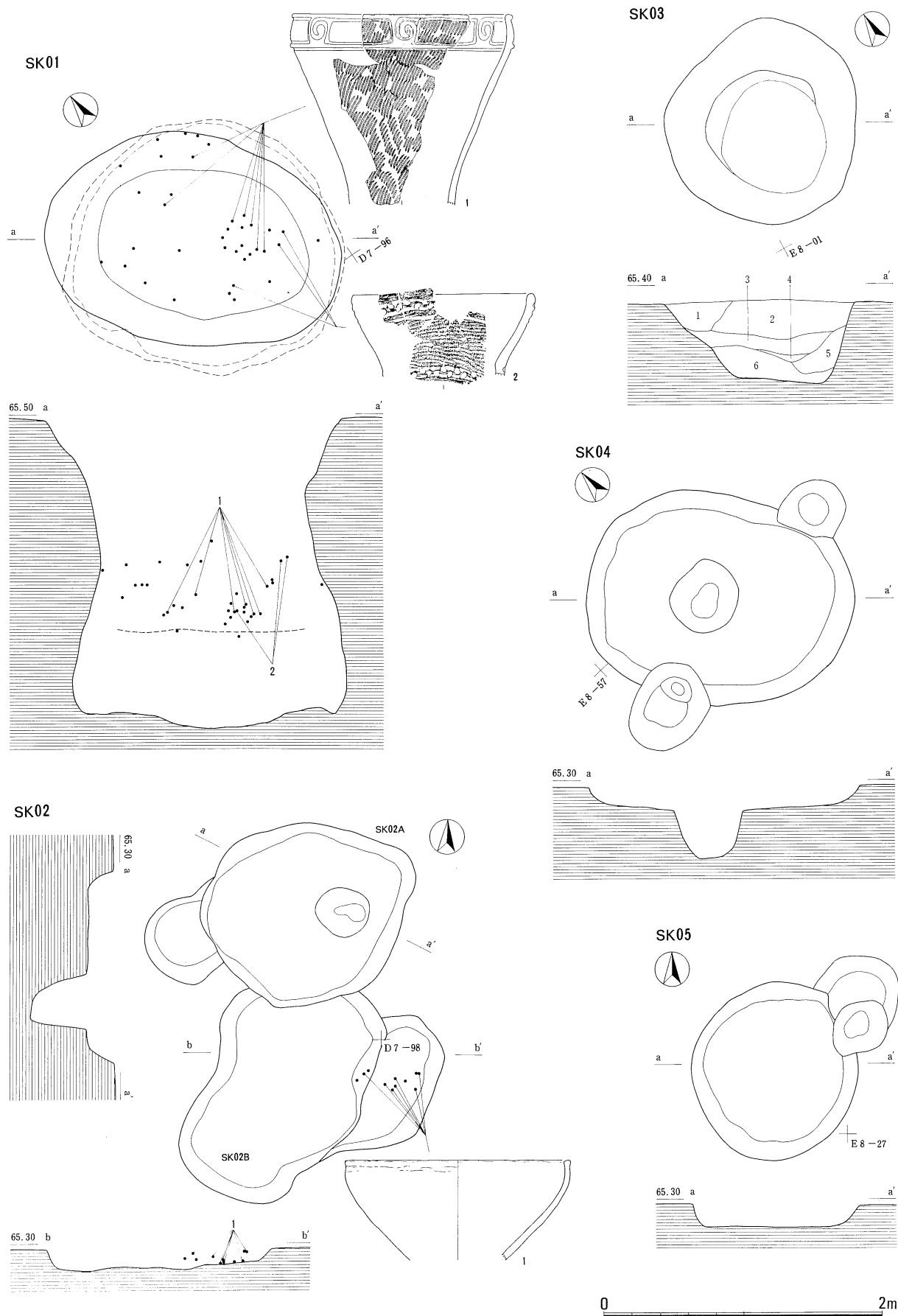


Fig. 19 土坑实测图(1)(1/40)

# 土坑墓SK04(Fig. 19)

E 8 グリッドに位置する。平面形態は楕円形の皿状の土坑であり、土坑墓の可能性を想定しておきたい。確認面長軸長1.91m、短軸長1.51m、確認面からの深さは17cm、底面標高は65.10mである。長軸方位はN-39° -W前後と考えられる。中央Pitは底面より深さ30cmを測る。覆土は、ローム粒を含む明黒褐色土層であり、分層できない。

遺物は出土していない。

# 土坑墓SK05(Fig. 19)

E 7 グリッドに位置する。平面形態は円形の皿状の土坑であり、土坑墓とした。確認面径1.29～1.19m、確認面からの深さは15cm、底面標高は65.10mである。覆土は、ローム粒を含む明黒褐色土層であり、分層できない。

遺物は出土していない。

# 土坑墓SK06(Fig. 20・21)

E 7 グリッドに位置する。平面形態は円形の皿状の土坑であり、土坑墓とした。確認面径1.96m～1.78m、確認面からの深さは69cm、底面標高は64.63mである。覆土は、1層がしまりの強いしみ状

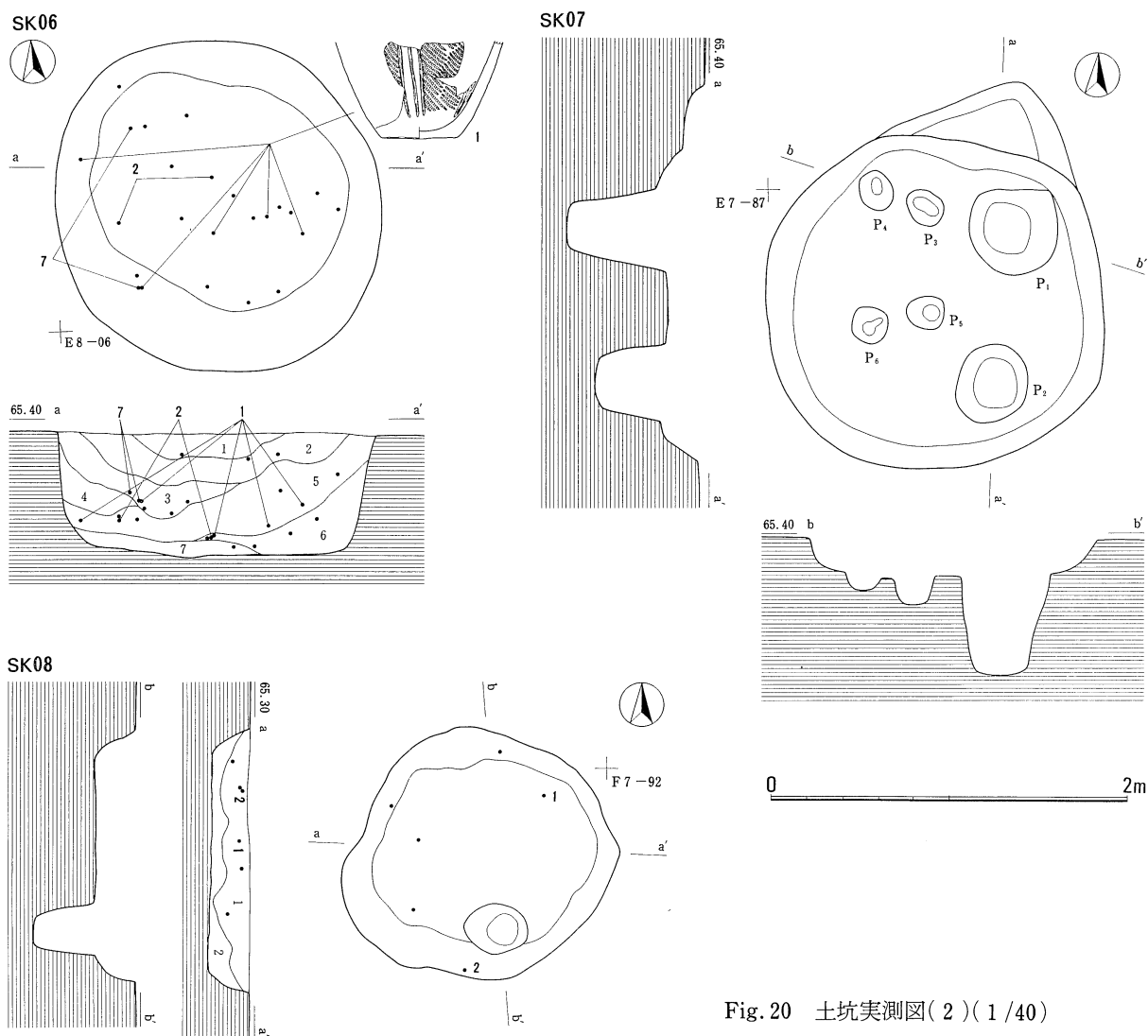
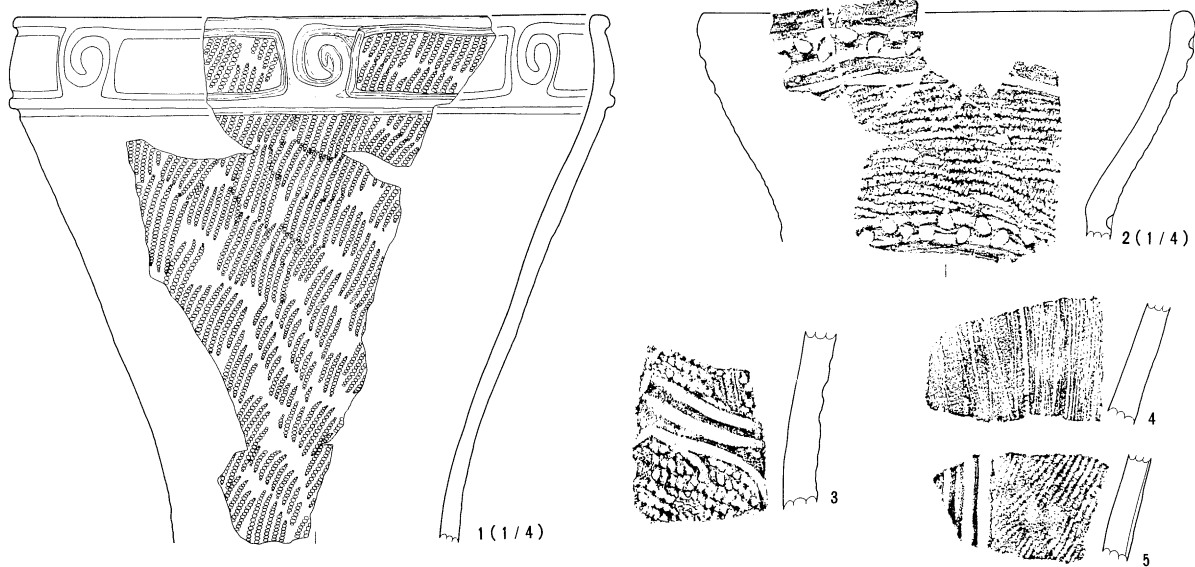
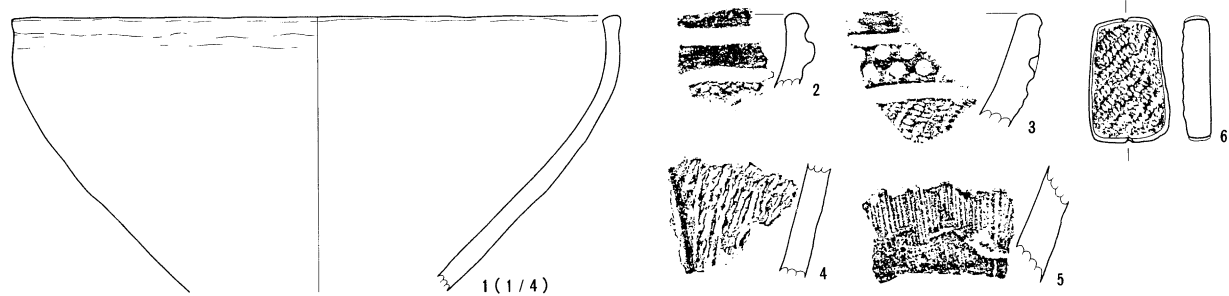


Fig. 20 土坑実測図(2)(1/40)

SK01



SK02



SK06

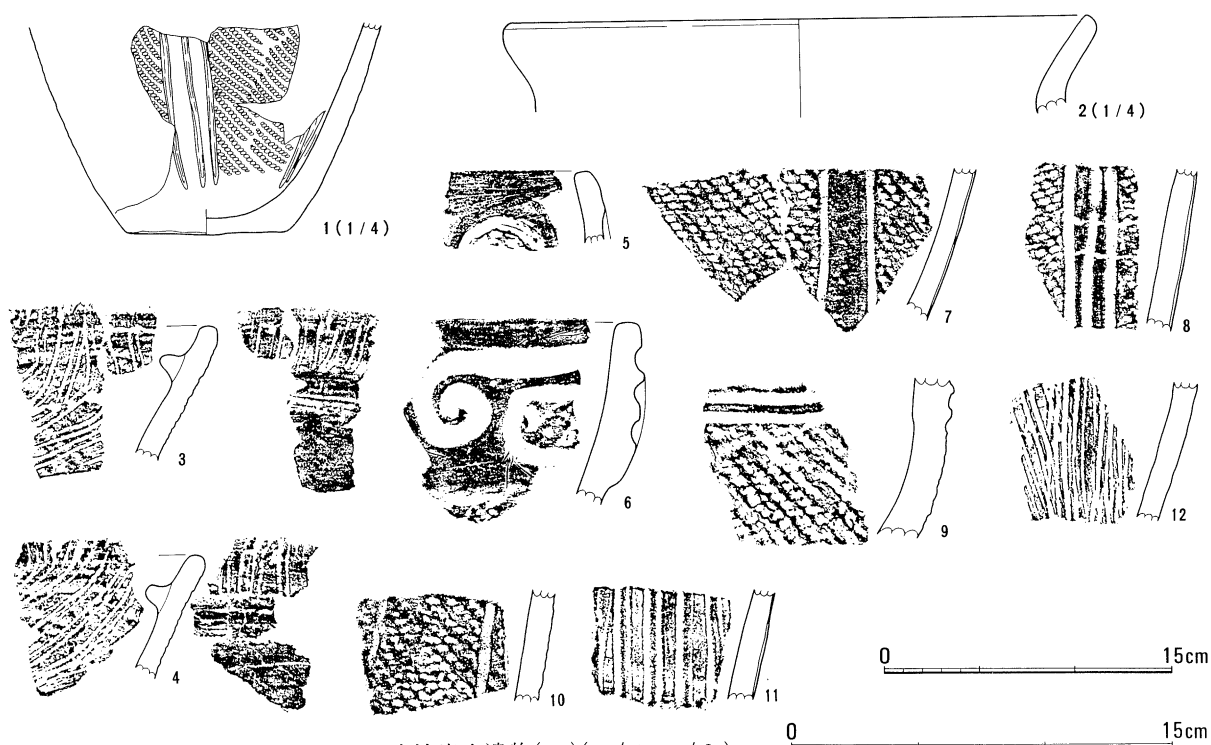
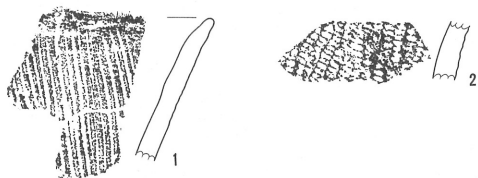


Fig. 21 土坑出土遺物(1)(1/4・1/3)

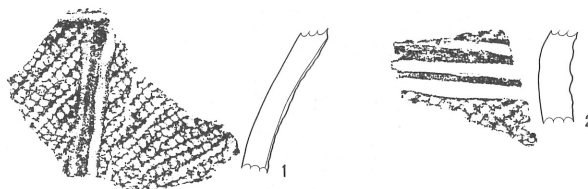
SK03



SK07



SK08



0 15cm

Fig. 22 土坑出土遺物(2)(1/3)

のロームを含む明黒褐色土層、2層がしみ状のロームを混合する黒褐色土層、3層がしみ状のロームからなる暗褐色土層、4・5層がブロック状のロームを主体とする暗褐色土層、6層がローム粒、ロームを含む暗褐色土層、7層がロームブロックを若干混合する明黒褐色土層である。

土器は、各層より小破片が出土している。1は、磨消し懸垂文をもつ深鉢形土器胴部下半であり、SK03から出土した2片と接合する。2は無文の浅鉢形土器、3・4は曽利式系と考えられ、口縁部内面に突帯がめぐる。5・6は渦巻文と楕円区画文の組合せからなるものであり、7・8・10は、胴部磨消し懸垂文である。11・12は、条線を地文とする。

土坑墓SK07(Fig. 20・22)

E7グリッドに位置する。平面形態は円形の皿状の土坑であり、土坑墓とした。北側は掘りすぎ部分である。確認面径1.99m～1.85m、確認面からの深さは20cm、底面標高は65.16mである。Pitの深さは、P<sub>1</sub>が56cm、P<sub>2</sub>が40cm、P<sub>3</sub>が16cm、P<sub>4</sub>が9cm、P<sub>5</sub>が37cm、P<sub>6</sub>が6cmを測る。土坑内覆土は、ロームをしみ状に混合する黒褐色土層であり、分層することはできなかった。

土器は、条線と単節縄文を地文とする小片2片のみである。

土坑墓SK08(Fig. 20・22)

F7グリッドに位置する。平面形態は円形の皿状の土坑であり、土坑墓とした。確認面径1.57m～1.43m、確認面からの深さは22cm、底面標高は65.07mである。土坑内覆土は、1層がロームをしみ状に混合する黒褐色土層、2層がブロック状のロームを局部的に混合する黒褐色土層である。

土器は、1が口縁部下胴部上半部分であり、2本の磨消し懸垂文が認められる。2は、胴屈曲部の横走沈線である。

落とし穴SK09(Fig. 24)

E8グリッドに位置する。確認面長軸長1.24m、短軸長0.53m、確認面からの深さは92cm、底面標高は64.20mを測る。長軸



Fig. 23 A地点北斜面部全景

方位はN-54° -Eである。底面小Pitは検出されなかった。

遺物は出土していない。

落とし穴SK10(Fig. 24)

E 7 グリッドに位置する。確認面長軸長1.35m、短軸長0.54m、確認面からの深さは60cm、底面標高は64.83mを測る。長軸方位はN-8° -Wである。底面小Pitは検出されなかった。

遺物は出土していない。

落とし穴SK11(Fig. 24)

D 7 グリッドに位置する。確認面長軸長1.89m、短軸長1.16m、確認面からの深さは92cm、底面標高は63.95mを測る。長軸方位はN-68° -Wである。底面より2基のPitが検出された。その深さは、西側のものが底面より47cm、東側のものが51cmを測る。このPitを掘形とする棒状痕は、9・15層において平面的な観察をおこなったが(PL. 6)、認められなかった。土層は、1層がしみ状にロームを混合する黒褐色土層、2層が黒褐色均質土層、3層が明黒褐色土層、4層がしみ状にロームを混合する明黒褐色土層、5層が暗黄褐色土層、6層が黒色土をしみ状に混合する暗褐色土層、7層がロームブロック、ローム粒を多量に含む明黒褐色土層、8・14層がブロック状のロームを主体とする層、9・

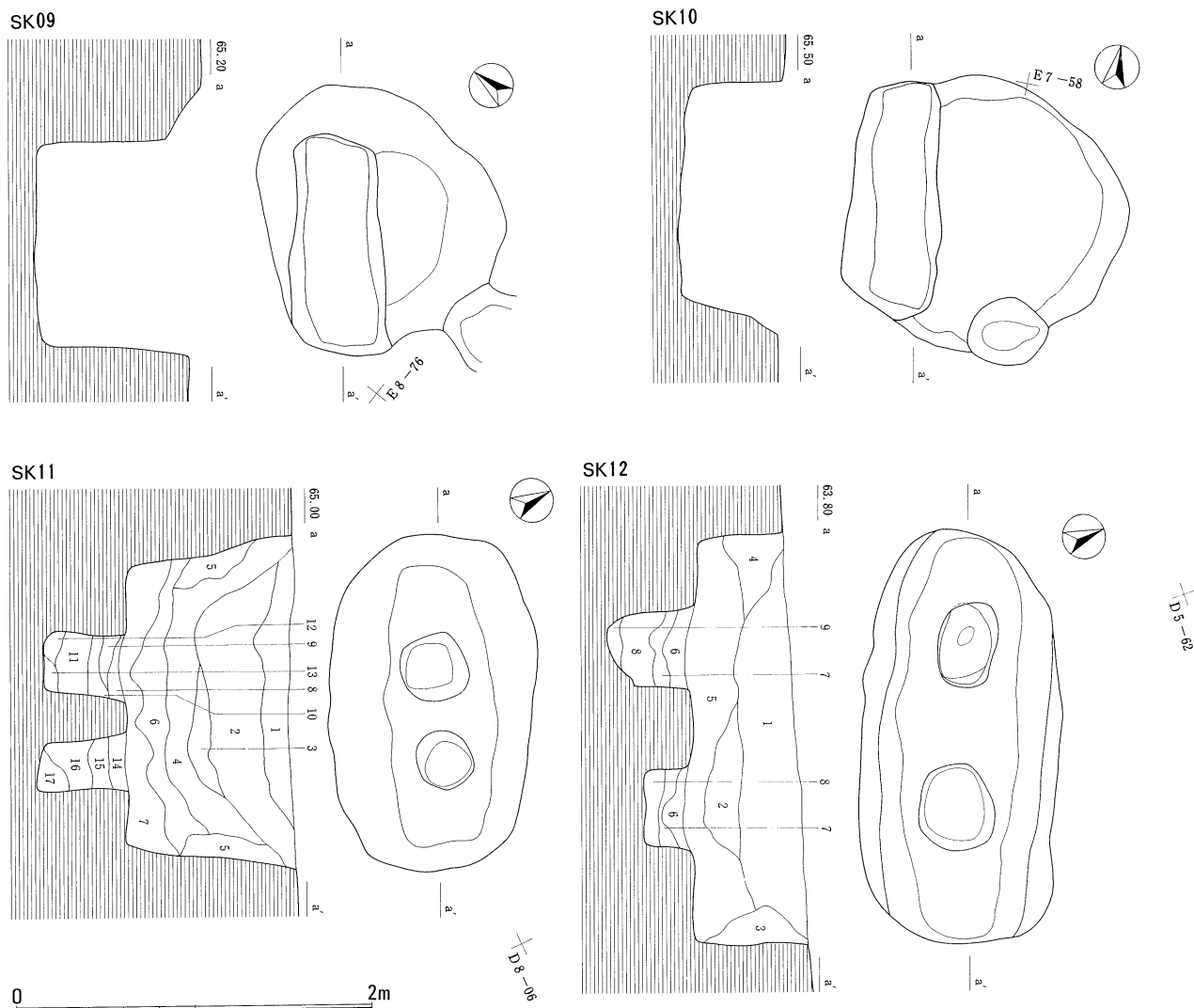


Fig. 24 土坑実測図(3)(1/40)

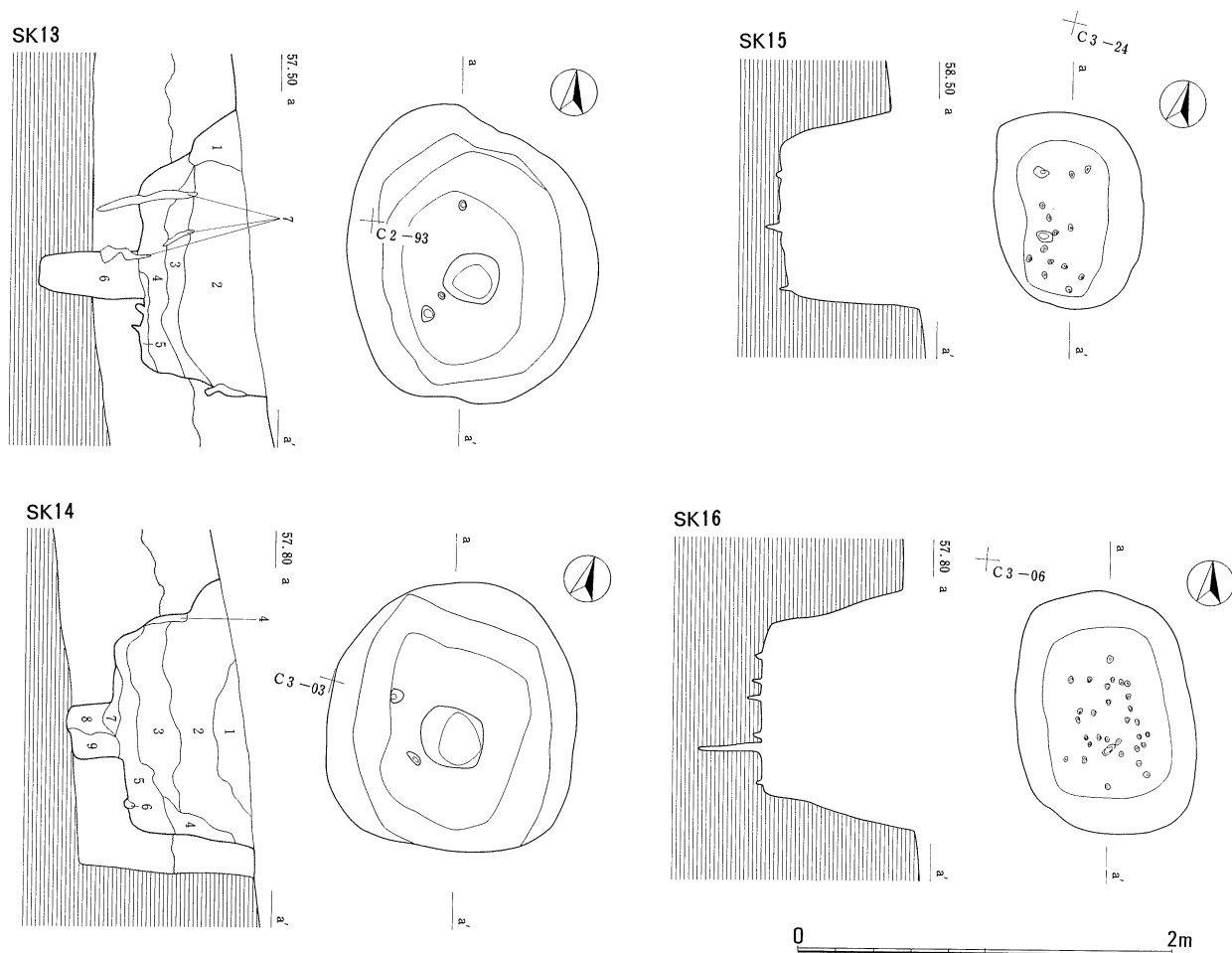


Fig. 25 土坑実測図(4)(1/40)

15層がロームからなる均質な黄褐色土層、10層が明黒褐色土層、11・16層が粒状のロームを主体とする暗褐色土層、12層がブロック状のロームを主体とする層、13・17層が粒状の明黒褐色土層である。

遺物は出土していない。

落とし穴SK12(Fig. 24)

D5グリッドに位置する。確認面長軸長2.31m、短軸長1.11m、確認面からの深さは64～49cm、底面標高は63.06mを測る。長軸方位はN-65°-Wである。底面より2基のPitが検出された。その深さは、西側のものが底面より47cm、東側のものが24cmを測る。このPitを掘形とする棒状痕は、7層において平面的な観察をおこなったが(PL. 6)、認められなかった。土層は、1層が黒褐色均質土層、2層がローム粒を多量に含む黒褐色土層、3・4層がしみ状のロームからなる黄褐色土層、5層がしみ状にロームを混合する明黒褐色土層、6層が黒褐色均質土層、7層がロームブロック、ローム粒を多量に含む暗黄褐色土層、8層が粒状の明黒褐色土層、9層がロームブロックを主体とする層である。

遺物は出土していない。

落とし穴SK13(Fig. 25)

C2グリッドに位置する。覆土を半截して半截部分の平面図を作成したのち、断面にそって全体を掘り下げた。確認面長軸長1.60m、短軸長1.32m、確認面からの深さは65cm、底面標高は56.77mを測る。長軸方位はN-5°-Wである。底面中央より1基のPitと小Pitが検出された。中央Pitについて



ては、これを掘形とする棒状痕は認められなかった。底面からの深さ55cmを測る。小Pitは、北側のものは根によると判断される。土層は、1層が暗黄褐色土層、2層が斑状褐色ブロックを含む黒褐色土層、3層が明黒褐色土層、4層がしみ状のロームを含む暗黄褐色土層、5層が粒状の明黒褐色土層、6層がブロック状のロームを主体とする暗黄褐色土層、7層がしまりのない粒状のロームと黒色土からなる層である。

遺物は出土していない。

#### 落とし穴SK14(Fig. 25)

C3グリッドに位置する。覆土を半截して半截部分の平面図を作成したのち、断面にそって全体を掘り下げた。確認面長軸長1.43m、短軸長1.32m、確認面からの深さは68cm、底面標高は56.95mを測る。長軸方位はN-4°-Wである。底面中央より1基のPitと小Pitが検出された。中央Pitは、底面からの深さ55cmを測る。土層は、1層が粒状の暗褐色土層、2層がしみ状にロームを混合する黒褐色土層、3層がしみ状にロームを混合する明黒褐色土層、4層が暗黄褐色土層、5層が大小ロームブロックを含む黒褐色土層、6層がしまりのない粒状の暗黄褐色土層、7層がロームを主体とする暗黄褐色土層、8層がしまりのない粒状のロームと黒色土からなる層、9層が硬質のロームブロックを主体とする黄褐色土層である。8層を柱痕跡とみることも可能ではあるが不明確である。

遺物は出土していない。

#### 落とし穴SK15(Fig. 25)

C3グリッドに位置する。確認面長軸長1.05m、短軸長0.79m、確認面からの深さは71cm、底面標高は57.55mを測る。長軸方位はN-15°-Wである。底面に小Pitが認められたが、断ち割りは実施していないため、根等との区別は明確ではない。底面からの深さは、21～4cm程度である。

遺物は出土していない。

#### 落とし穴SK16(Fig. 25)

C3グリッドに位置する。確認面長軸長1.30m、短軸長0.94m、確認面からの深さは82cm、底面標高は56.89mを測る。長軸方位はN-10°-Wである。底面に小Pitが認められたが、断ち割りは実施していないため、根等との区別は明確ではない。底面からの深さは、35～4cm程度である。

遺物は出土していない。

#### 落とし穴SK17(Fig. 26・28)

C3グリッドに位置する。確認面長軸長1.35m、短軸長0.88m、確認面からの深さは64cm、底面標高は57.40mを測る。長軸方位はN-8°-Wである。底面東端に外側へ斜行する小Pitが認められた。深さは5cm程度である。

遺物は、撚糸文系土器と考えられる小片が出土している。

#### 落とし穴SK18(Fig. 26)

C3グリッドに位置する。確認面長軸長1.25m、短軸長0.85m、確認面からの深さは42cm、底面標高は59.00mを測る。長軸方位はN-29°-Eである。底面に小Pitが認められたが、断ち割りは実施していないため、根等との区別は明確ではない。底面からの深さは、8～4cm程度である。

遺物は出土していない。

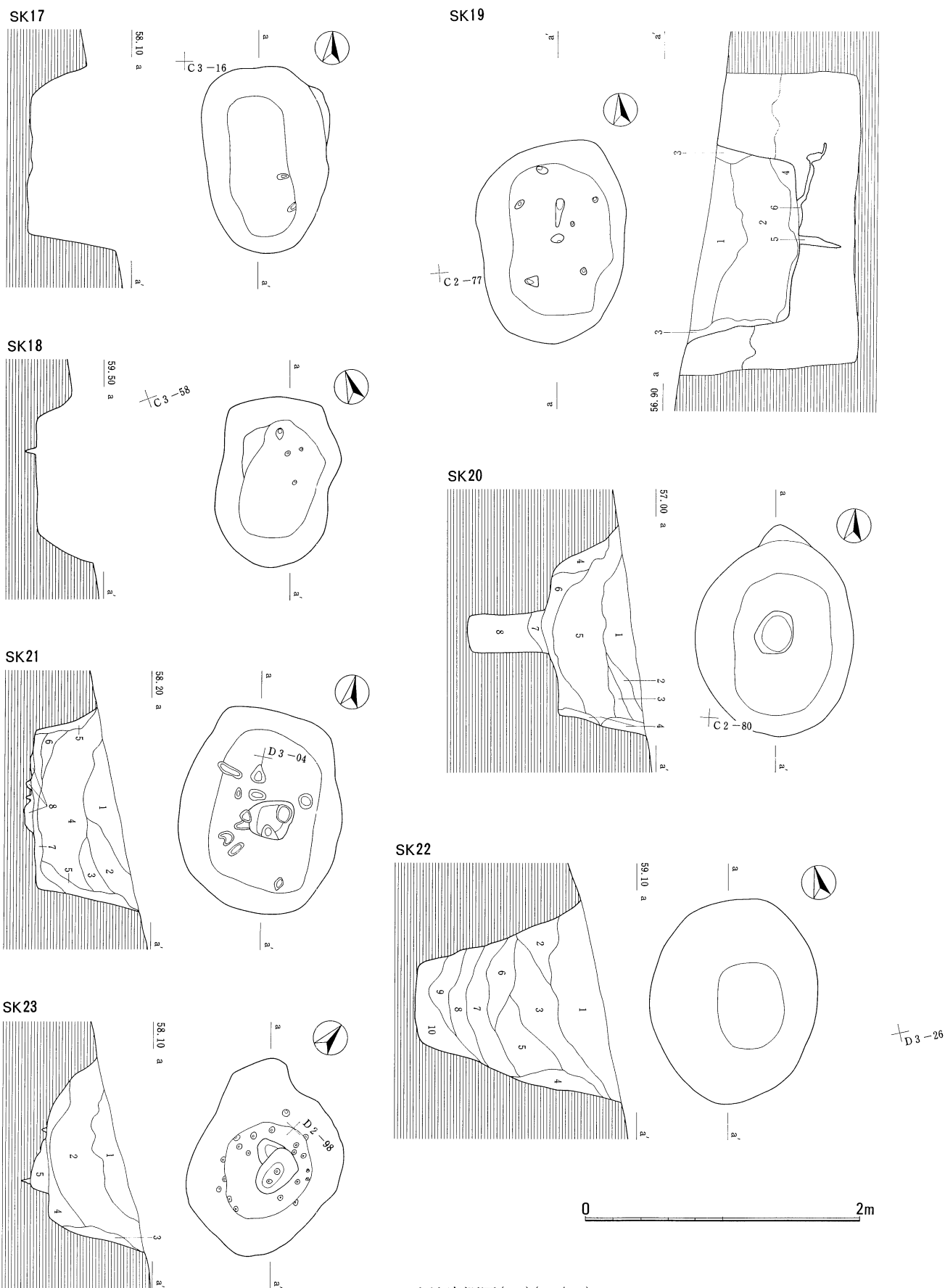


Fig. 26 土坑実測図(5)(1/40)

#### 落とし穴SK19(Fig. 26)

C2グリッドに位置する。覆土を半截して半截部分の平面図を作成したのち、断面にそって全体を掘り下げた。確認面長軸長1.47m、短軸長1.09m、確認面からの深さは76cm、底面標高は56.03mを測る。長軸方位はN-3°-Eである。底面より小Pitが検出された。断面の観察によるならば中央Pitは杭状であり、底面からの深さ31cmを測る。その北側は明らかに根状である。土層は、1層がしみ状にロームを混合する明黒褐色土層、2層が黒褐色土層、3層がしみ状にロームを混合する暗黄褐色土層、4層がロームブロック、ローム粒を多量に含む暗黄褐色土層、5層がローム、黒褐色土を粒状に混合する層、6層がしまりのない粒状の暗黄褐色土層である。

遺物は出土していない。

#### 落とし穴SK20(Fig. 26)

C2グリッドに位置する。確認面長軸長1.54m、短軸長1.15m、確認面からの深さは63cm、底面標高は56.25mを測る。長軸方位はN-3°-Wである。中央Pitは、底面からの深さ58cmを測る。土層は、1層が明黒褐色土層、2・5層が黒褐色土層、3層がしみ状にロームを混合する黒褐色土層、4層がしみ状のロームを混合する暗黄褐色土層、6層がしみ状のロームを混合する明黒褐色土層、7層がベタ状のローム、8層がしまりのない粒状のロームと黒色土からなる層である。7層において平面的に棒状痕跡を観察したが、認められなかった。

遺物は出土していない。

#### 落とし穴SK21(Fig. 26)

D3グリッドに位置する。確認面長軸長1.49m、短軸長1.17m、確認面からの深さは75cm、底面標高は57.33mを測る。長軸方位はN-2°-Wである。底面中央より1基のPitと小Pitが検出された。中央Pitは、底面からの深さ8cmであり、他の小Pitも12~6cm程度を測るにすぎない。土層は、1層が粒状ロームを混合する明黒褐色土層、2層が黒褐色土層、3層がしみ状にロームを混合する明黒褐色土層、4層が局部的にロームブロックを含む黒褐色土層、5層が暗黄褐色土層、6層がローム粒、ロームブロックを混合する明黒褐色土層、7層がロームブロックを多量に含む明黒褐色土層、8層が粒状のロームと黒色土からなる層である。

遺物は出土していない。

#### 落とし穴SK22(Fig. 26)

D3グリッドに位置する。確認面長軸長1.51m、短軸長1.23m、確認面からの深さは1.51m、底面標高は57.40mを測る。長軸方位はN-13°-Eである。小Pitは検出されなかった。土層は、1層がしみ状のロームを混合する明黒褐色土層、2層がブロック状のロームを局部的に含む黒褐色土層、3層が最も暗い硬質の黒褐色土層、4層がしみ状のロームからなる層、5層が黒褐色均質土層、6層がローム粒、ロームブロックを混合する明黒褐色土層、7層がしまりのないロームブロックを主体とする層、8層が局部的にロームブロックを含む黒褐色土層、9層が粒状、ブロック状のロームと黒色土からなる層、10層がロームブロックを主体とする黄褐色土層である。

遺物は出土していない。

#### 落とし穴SK23(Fig. 26)

D2グリッドに位置する。確認面長軸長1.21m、短軸長1.01m、最大で1.44m、確認面からの深さ

は69cm、底面標高は57.30mを測る。長軸方位はN-4°-Wである。底面中央より1基のPitと小Pitが検出された。中央Pitは、底面からの深さ13cm、小Pitも13~4cm程度である。断ち割りは実施していないため、根等との区別は明確ではない。土層は、1層がしみ状のロームを含む明黒褐色土層、2層が黒褐色均質土層、3層が粒状の暗黄褐色土層、4層がブロック状のロームを含む明黒褐色土層、5層がベタ状の黒褐色土層である。

遺物は出土していない。

落とし穴SK24(Fig. 27)

D3グリッドに位置する。覆土を半截して半截部分の平面図を作成したのち、断面にそって全体を掘り下げた。確認面長軸長1.20m、短軸長1.13m、確認面からの深さは92cm、底面標高は58.47mを測る。北側はカクラン坑と考えられる。長軸方位はN-21°-Wである。底面中央より1基のPitと小Pitが検出された。中央Pitは、底面からの深さ45cmを測る。9層を杭痕跡と考えることも可能ではあるが、平面的には明確ではなかった。小Pitは、断面の観察によるならば根によると判断される。土層は、1層がボソボソの暗灰褐色土層、2・4・5・6層がしみ状のロームを含む明黒褐色土層、3層が黒褐色土層であり、この間は漸移的に変化する。7層が粒状のロームを多量に含む明黒褐色土層、8層が黒褐色土層、9層が粒状の明黒褐色土層、10層がブロック状の暗黄褐色土層、11層がボソボソの暗黄褐色土層である。

遺物は出土していない。

落とし穴SK25(Fig. 27)

D2グリッドに位置する。確認面長軸長1.37m、短軸長1.07m、確認面からの深さは60cm、底面標高は57.30mを測る。長軸方位はN-26°-Wである。中央Pitは、底面からの深さ43cmを測る。土層は、1層が明黒褐色土層、2層がやや粒状の明黒褐色土層、3層がしみ状のロームからなる暗黄褐色土層、4層が最も暗色であり、しみ状、ブロック状のロームを混合する黒褐色土層、5層がしみ状、ブロック状のロームを混合する明黒褐色土層、6層が粒状、ブロック状のロームからなる黄褐色土層、7・8層が粒状、ブロック状のローム、9層がしまりのない粒状のロームと黒色土からなる層である。

遺物は出土していない。

落とし穴SK26(Fig. 27)

E2グリッドに位置する。確認面長軸長1.41m、短軸長1.17m、確認面からの深さは72cm、底面標高は57.95mを測る。長軸方位はN-30°-Wである。中央Pitは、底面からの深さ29cm、その北側の小Pitは12cmを測る。土層は、1層が明黒褐色土層、2層が局部的にロームブロックを混合する黒褐色土層、3層がしみ状のロームからなる暗黄褐色土層、4層が最も暗色の黒褐色土層、5・6層がしみ状、ブロック状のロームを混合する暗黄褐色土層、7層が粒状、ブロック状のロームからなる黄褐色土層、8層が粒状、ブロック状のロームと黒褐色土を全体に混合する層である。

遺物は出土していない。

落とし穴SK27(Fig. 27)

E2グリッドに位置する。確認面長軸長1.17m、短軸長0.77m、確認面からの深さは60cm、底面標高は58.35mを測る。長軸方位はN-1°-Wである。底面中央より1基のPitと小Pitが検出された。中央Pitは、底面からの深さ14cmであり、他の小Pitも10~4cm程度を測るにすぎない。土層は、1

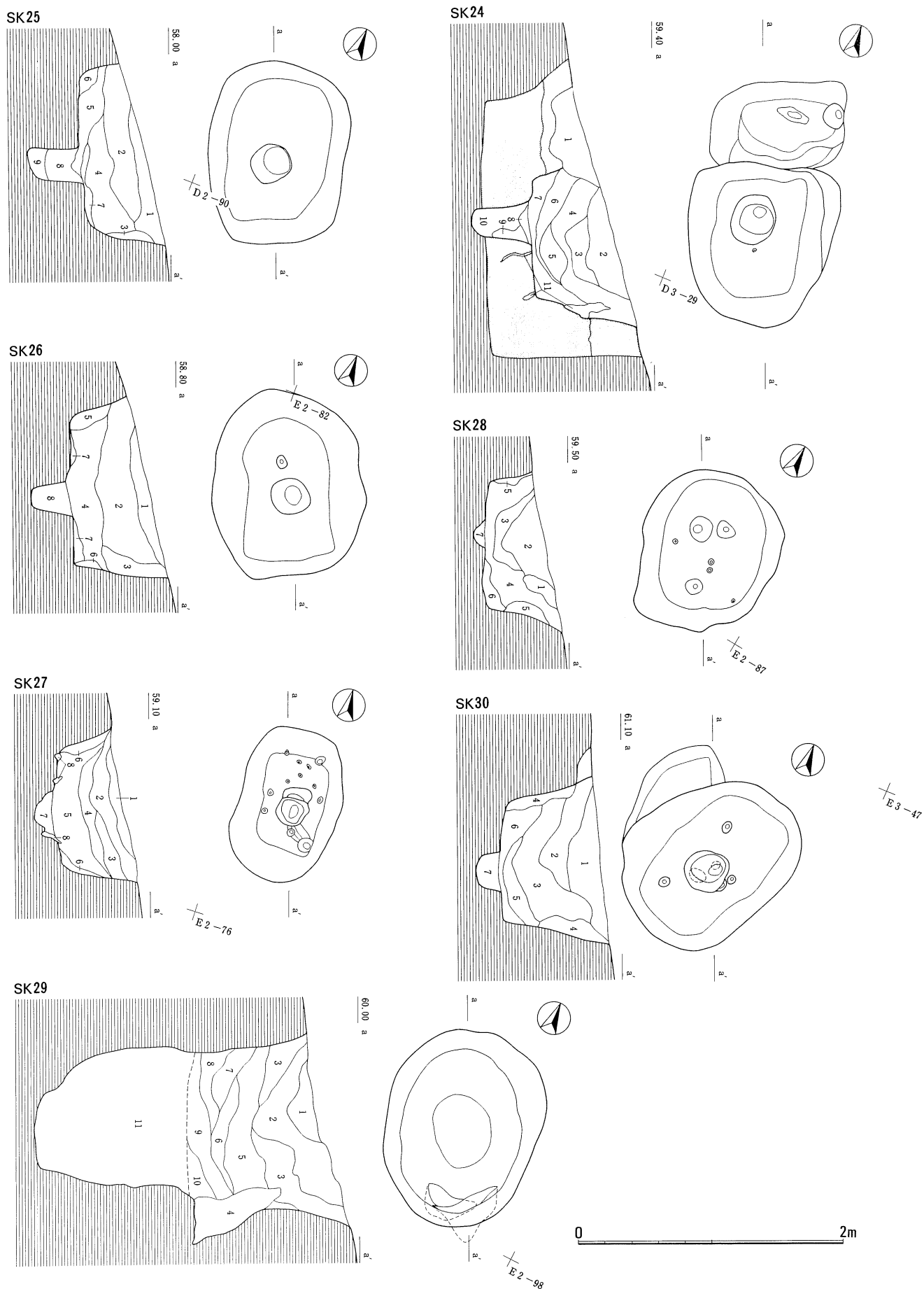


Fig. 27 土坑実測図(6)(1/40)

層が粒状の暗褐色土層、2層がローム粒を若干含み、硬質の黒褐色土層、3・4・5層がしみ状にロームを混合する明黒褐色土層であり、その変化は漸移的である。6層が黄褐色均質土層、7層がロームブロックを多量に含む暗黄褐色土層、8層が粒状のロームと黒色土からなる層である。8層は根によると考えられる。

遺物は出土していない。

#### 落とし穴SK28(Fig. 27)

E2グリッドに位置する。確認面長軸長1.21m、短軸長1.06m、確認面からの深さは59cm、底面標高は58.76mを測る。長軸方位はN-19°-Wである。底面に小Pitが認められたが、断ち割りは実施していないため、根等との区別は明確ではない。底面からの深さは、いずれも11~8cm程度である。土層は、1層がボソボソの明黒褐色土層、2層が局部的にロームブロックを混合する黒褐色土層、3層が明黒褐色土層、4層が粒状のロームを多量に含む明黒褐色土層、5層がしみ状、ブロック状のロームを混合する暗黄褐色土層、6層が大小ロームブロックを含む黒褐色土層、7層が粒状、ブロック状のロームからなる黄褐色土層である。

遺物は出土していない。

#### 落とし穴SK29(Fig. 27・28)

E2グリッドに位置する。確認面長軸長1.49m、短軸長1.19m、確認面からの深さは2.35m、底面標高は57.54mを測る。長軸方位はN-22°-Wである。小Pitは検出されなかった。土層は、1層が粒状のロームを混合するしまりのない明黒褐色土層、2層がしみ状のロームを局部的に含む明黒褐色土層、3層が粒状のロームを主体とする暗黄褐色土層、4層がしまりのない粒状のロームと黒色土からなる層であり、根によるものであろうか。5層がしみ状のロームを含む明黒褐色土層、6層が最も暗い硬質の黒褐色土層、7層がしまりのないロームブロックを主体とする層、8層が局部的にロームブロックを含む明黒褐色土層、9層が粒状、ブロック状のロームと黒色土からなる層、10層がローム粒、ロームブロックを混合する明黒褐色土層である。10層以下については断面図を作成することができなかったが、全体にしまりがなく、ロームを主体とする層と黒褐色土層が互層に堆積する。

遺物は、撚糸文系土器と石鏃が1点出土している。石鏃は黒曜石を石材とし、長さ1.68cm、幅1.34cm、厚さ0.37cm、重さ0.8gを測る。

#### 落とし穴SK30(Fig. 27・28)

E3グリッドに位置する。確認面長軸長1.38m、短軸長1.08m、確認面からの深さは79cm、底面標

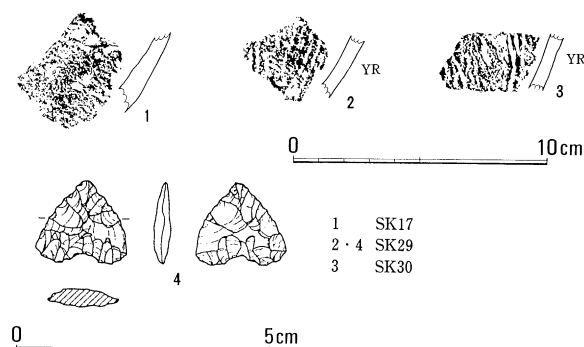


Fig. 28 土坑出土遺物(3)(1/3・2/3)

高は60.20mを測る。長軸方位はN-24°-Eである。中央Pitは、底面からの深さ19cm、他は7~4cm程度である。中央Pitは、平面的な観察において、杭状の痕跡(破線部分)が認められたが、断面では明確でなかった。土層は、1層が最も暗色の黒褐色土層、2層が明黒褐色均質土層、3層がロームブロックを含む明黒褐色土層、4層がしみ状の暗黄褐色土層、5層がしみ状、ブロック状のロームを混合する明黒褐色土

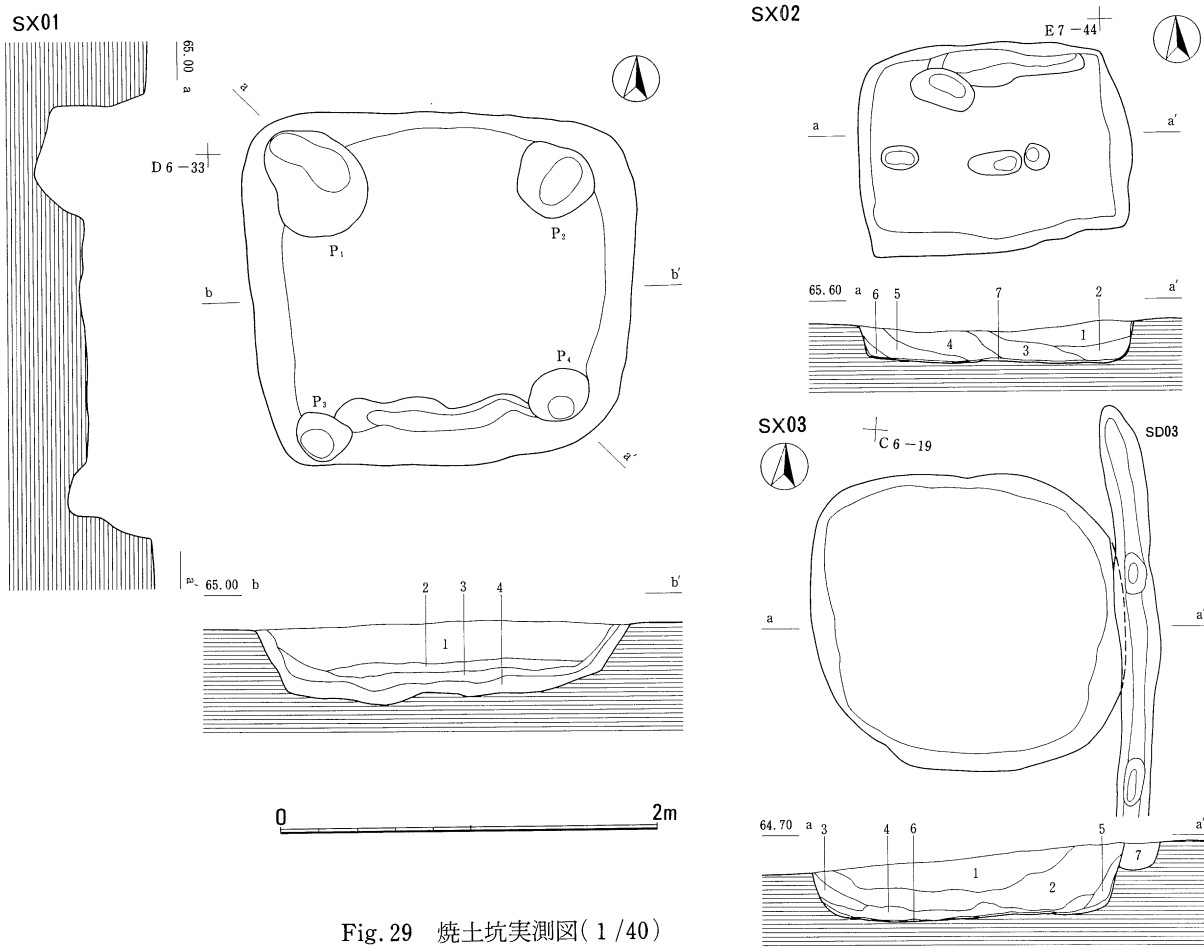


Fig. 29 焼土坑実測図(1/40)

層、6層がベタ状の黄褐色土層、7層が粒状、ブロック状のロームと黒褐色土を全体に混合する層である。

遺物は、撚糸文系土器が1点出土している。

焼土坑SX01(Fig. 29)

D6グリッドに位置する。確認調査時に調査。平面隅丸方形であり、確認面長軸長2.04m、短軸長1.92m、確認面からの深さは24cmを測る。長軸方位はN-87°-Wである。四隅には柱穴状のPitがあり、それぞれ底面からの深さ27~18cm程度を測る。土層は、1層が若干の炭化物を含む黒褐色土層、2層が純炭化物層、3層がローム粒、炭化物、焼土からなる層、4層が赤化部分である。

近現代の炭窯と考えられるが、遺物は出土していない。

焼土坑SX02(Fig. 29)

E7グリッドに位置する。平面長方形であり、確認面長軸長1.44m、短軸長1.11m、確認面からの深さは22cmを測る。長軸方位はN-89°-Wである。周溝、Pit状の凹凸が認められるが、いずれも底面からの深さ10cm以下である。土層は、1層がベタ状の黒褐色土層、2層が純炭化物層、3層がローム粒を含む明黒褐色土層、4層がローム粒と若干の炭化物を含む明黒褐色土層、5層がローム粒、焼土、炭化物を全体に混合する層、6層が焼土層、7層が赤化部分である。

近現代の炭窯と考えられるが、遺物は出土していない。

焼土坑SX03(Fig. 29)

C6グリッドに位置する。平面隅丸方形であり、確認面長軸長1.67m、短軸長1.55m、確認面から

の深さは37～24cmを測る。長軸方位はN-86°-Eである。溝SD03と重複し、本遺構が新しいと判断したが不確実である。土層は、1層がローム粒と若干の炭化物を含む黒褐色土層、2層が若干の炭化物を含むベタ状の黒褐色土層、3層が若干の炭化物、焼土を含むローム粒、ロームブロックを主体とする層、4層が2cm以下の炭化物を多量に含むベタ状の黒褐色土層、5層がローム粒、焼土、炭化物を全体に混合する層、6層が赤化部分、溝SD03覆土7層は黒褐色土層である。

近現代の炭窯と考えられるが、遺物は出土していない。

#### 溝SD01(Fig. 10)

調査区中央を南北に縦走する。確認面で、全長51.4m、最大幅1.54m、深さ32～8cm程度を測るが、表土下よりその痕跡は認められた。底面には硬化面が認められ、道路跡と推定される。ただし、現状の地籍とは一致せず、年代的にはやや遡る可能性もある。

縄文土器片をのぞくならば、本遺構との帰属が問題となる遺物は検出されなかった。

#### 溝SD02(Fig. 10)

調査区東端を南北に縦走する。確認面で、全長19.3m、最大幅1.1m、深さ22～13cm程度を測るが、表土下よりその痕跡は認められた。底面には硬化面が認められ、道路跡と推定される。ただし、現状の地籍とは一致せず、年代的にはやや遡る可能性もある。

縄文土器片をのぞくならば、本遺構との帰属が問題となる遺物は検出されなかった。

#### 溝SD03(Fig. 10・29)

調査区西端を南北に縦走する。確認面で、全長21.4m、幅0.3m、深さ31～22cm程度を測る。断面はU字形を呈し、南半部では2段掘りとなり、幅は1.2cm程度に拡大する。当初、SX02に付属する可能性も考慮されたが、性格等不明確である。

縄文土器片をのぞくならば、本遺構との帰属が問題となる遺物は検出されなかった。

## 5. 遺構外出土の遺物

確認調査の結果、縄文時代早期の土器包含層が予測され、本調査では手掘り作業を実施した。しかし、土器の分布は、縄文時代早期撚糸文系土器と、集落にともなう中期加曽利E式土器が、調査区ほぼ全体に認められたが(Fig. 34)、遺物量としてはかならずしも多くはない。

1～31は、縄文時代早期撚糸文系土器である。1～3は縄文施文のJ型であり、1・2は、若干肥厚する口唇部に文様帯をもつ。1・2は井草Ⅱ式と考えられる。4～31は撚糸文施文のY型であり、4～12はその口縁部である。口唇部形態は、若干肥厚して外反するものが多く、8は上面が面取りされる。5は、円頭状を呈す。4は、口唇部上面に縄文原体による押圧文、9は撚糸文による口唇部文様帯をもつ。胴部撚糸文の施文位置は、11が無文帯をもつ他は、口唇直下から認められる。13～31のY型胴部破片を含め、施文方向の規則性の弛緩、施文原体の粗大化傾向が認められる。稲荷台式を主体とすると考えられる。11は、補修孔と推定される焼成後の穿孔をもつ。なお、32は、整形痕を残す口縁円頭状の無文土器である。その器形から撚糸文系土器に伴出するものと考えられる。撚糸文系土器の分布は、とくにC2、F5グリッド付近に比較的まとまっている。しかし、その両者に型式的な傾向を指摘することはできない。

34は、前期黒浜式、33は、前期末のいわゆる栗島台式<sup>11)</sup>と称されるものと考えられ、口頸部に3条



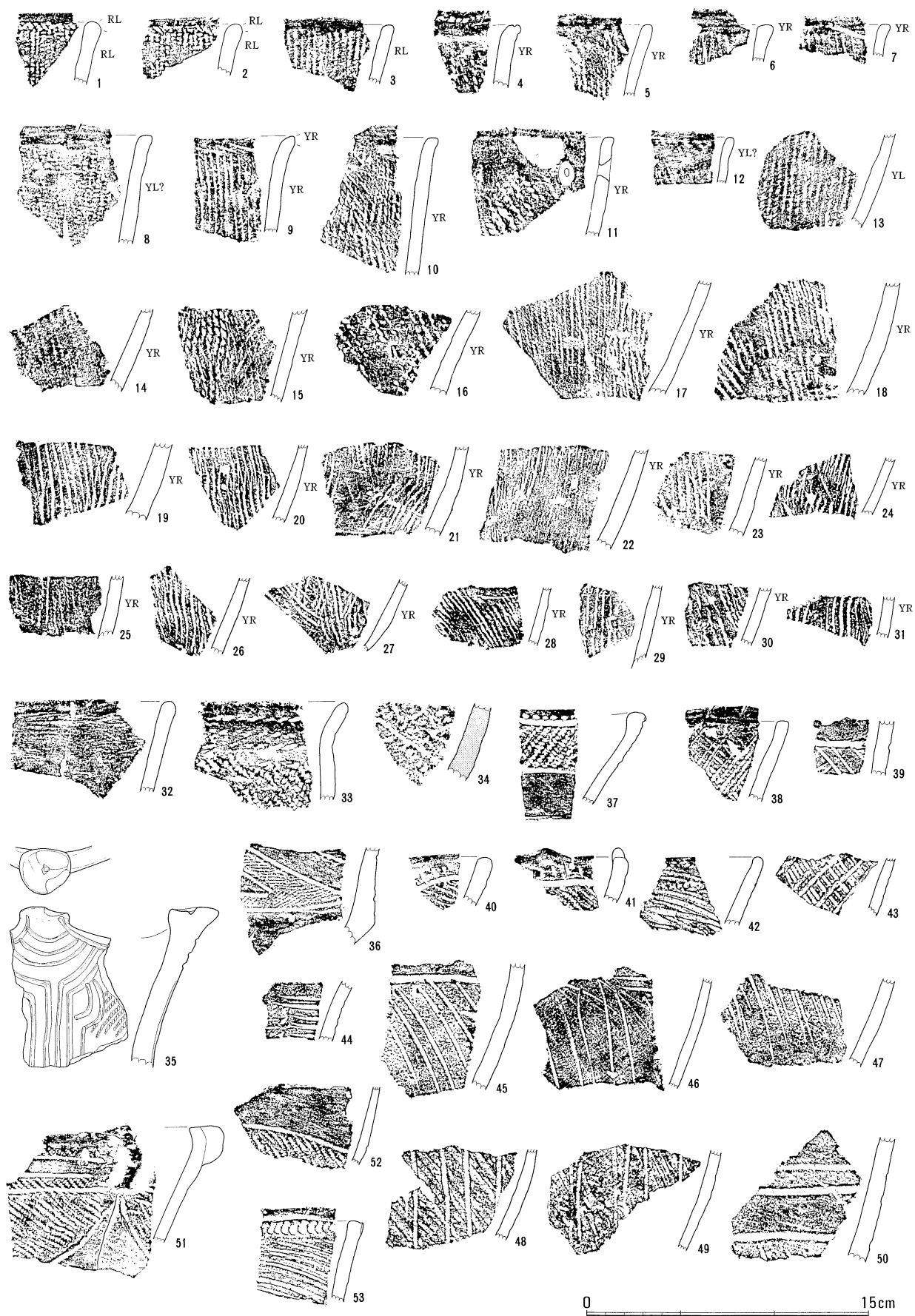


Fig. 30 A地点遺構外出土遺物(1)(1/3)

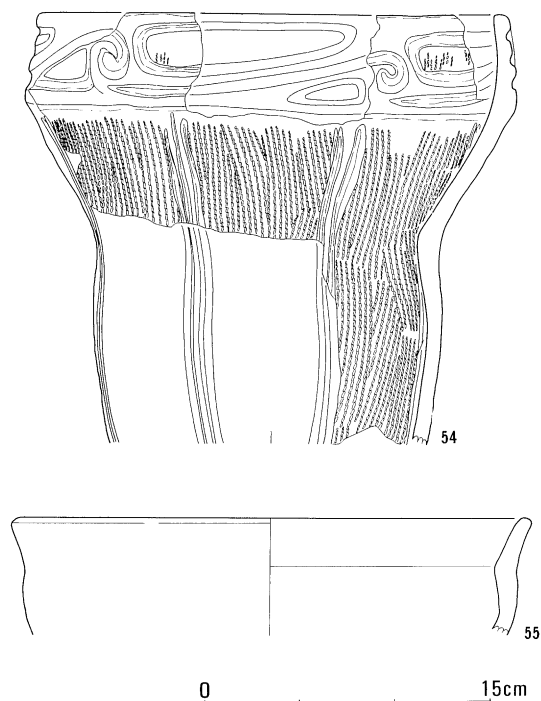


Fig. 31 A地点遺構外出土遺物(2)(1/4)

42には、口縁部下に押捺文が認められる。

51～53は、安行Ⅰ式である。51は、耳状の突起と弧状の磨消し縄文帯からなる。52も、沈線区画による縄文帯をもつ。53は、条線と紐線文からなる粗製土器である。

54～86は、縄文時代中期加曽利E式であり、集落と対応する時期の土器である。54は、渦巻文と楕円区画文からなる口縁部文様帯をもつ。区画文内および胴部地文は撚糸文であり、胴部には3本組の懸垂文が垂下する。55は、屈曲する口縁部をもつ浅鉢形土器である。56～61は、渦巻文と区画文の組合せからなる口縁部分である。56・57は、蕨手状の沈線渦巻文と区画文が連結する。62は、渦巻文にかわり隆帯円形文をもつものである。63は、口縁部下に弧状の沈線が描かれる。65は口縁部下から懸垂文が垂下する。66は、区画文内が条線により充填される。67～76は、胴部懸垂文である。67・70は、3本組により、その間は地文を残す。68は、懸垂文が渦巻状になるものである。69は、2本組の懸垂文が連結し、その間縄文は磨消される。72～75も、磨消し懸垂文である。75の地文は撚糸文である。77は、弧状の沈線区画による縄文帯をもつものである。78は連弧文である。79は、胴部に沈線による渦巻文が描かれる。80は、屈曲する口縁をもつ浅鉢形土器である。81・82は、条線を地文とする内湾口縁であり、曽利系と考えられる。83・84は、交互刺突文をもつものであり、84は、連弧文ないしは波状沈線が認められる。85、86は、横走る沈線と隆帯をもつものであり、85は撚糸文、86は条線を地文とする。

これらは、遺構出土土器と時期的に対応するものであり、加曽利EⅡ式に分類される。

87は、土器片錘であり、長さ5.42cm、幅4.52cm、厚さ1.27cm、重さ44.6gをはかる。加曽利E式によると考えられる。

石器については、調査段階で、自然礫を含めすべてを取り上げてきたにもかかわらず、きわめてわずかである。1・2は石鏃である。1は、基部から側縁部分の破片である。石質は黒曜石であり、現

の縄文原体押圧文が認められる。前期と考えられる土器はこの2点のみである。

35～53は、縄文時代後期に比定されるものである。出土量は、ほぼ提示したものだけであり、各期散在的で、出土位置についても傾向は認められない。35は堀之内Ⅰ式であり、波状口縁頂部に円盤状の突起をもち、沈線による重弧文から垂下する懸垂文が描かれる。36は、屈曲部をもち外反する器形をとる鉢形土器であり、沈線により区画された帯縄文が認められる。堀之内Ⅱ式と考えられる。

37～50は、加曽利B式と考えられる。37は、ゆるやかな波状口縁をもつ鉢形土器であり、口縁部下には沈線および刺突文を区画文とする帯縄文が施文される。40・41は、縄文を地文とし、沈線文、ヘラ先による刺突文からなる。41は、口縁部に小突起をもつ。38・39・42～50は、交差する条線により構成されるものである。

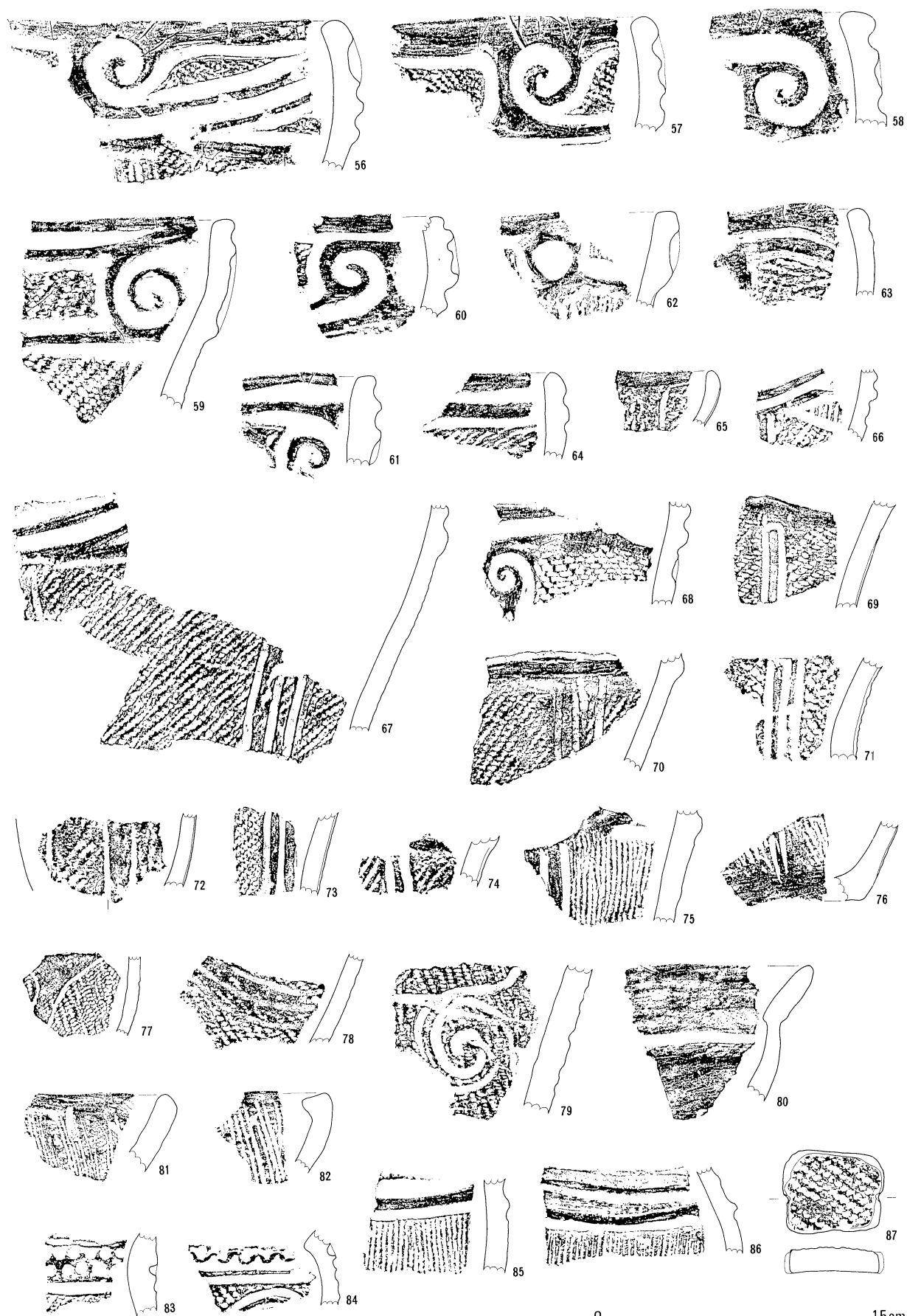


Fig. 32 A地点遺構外出土遺物(3)(1/3)

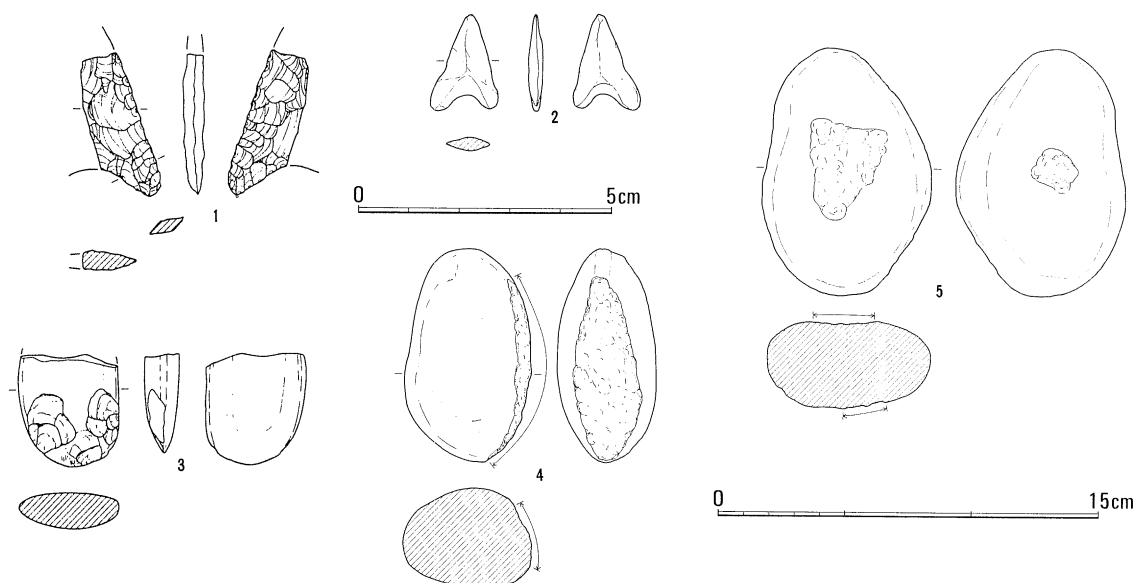


Fig. 33 A地点遺構外出土遺物(4)(2/3・1/3)

存長2.90cm、現存幅1.61cm、厚さ0.42cm、重さ1.4gである。2は、軟質の砂岩系と考えられ、全体に摩滅している。長さ1.90cm、幅1.38cm、厚さ0.31cm、重さ0.3gをはかる。3は、小形の石斧であり、片面側縁のみを調整し刃部をつくる。現存長4.37cm、幅4.0cm、厚さ1.4cm、重さ33.2gをはかる。4は、側縁に敲打痕をもつものである。長さ8.46cm、幅5.13cm、長さ3.89cm、重さ218.4gである。5は、両面に敲打痕をもつ凹石である。長さ9.75cm、幅6.56cm、厚さ3.52cm、重さ320.0gをはかる。

## 6. 土器接合関係と集落

奈良大仏台遺跡A地点の縄文時代中期の集落は、加曽利EⅡ式に限定され、時期的な累積が認められない。おそらくは一過性の小規模なムラではあるが、この段階の集落の基礎単位を問題とする上でわかりやすいものといえよう。この段階の遺構は、竪穴住居跡3軒、小竪穴1基、土坑墓とした皿状の土坑5基、他土坑2ないしは3基(SK02を2基とした場合)である。遺構としての判断をしなかった黒色土の落ち込みは調査範囲全体にみられたが掘立柱建物等Pit群と考えられるものは存在しない。

竪穴住居跡は、遺跡最高部に位置し、半円形に配置され、小竪穴と土坑墓は、その背後から検出されている。土器の分布は、確認調査時に拡張した部分が不明確であるが、おおよそ遺構の配置に対応して半円帯状に認められ、その前面北側は空白域となる。F5グリッド付近にも土器の集中が認められたため精査したが、竪穴住居跡は検出することができなかった。ただし、半環状の、日常的な生活域の一端を構成することを想定することは可能であろう。

奈良大仏台遺跡では、土器の出土量が比較的少なかったこともあり、遺構間および遺構と遺構外との接合関係を検討することができた(Fig. 34)。接合関係が認められた個体は5点であり、いずれも一方を主体とし、これに1～2点の小片が接合する。ただし、炉体土器SB01-2については、直接的な接合ではなく不確実である。これをのぞくと、他はいずれも覆土間ないしは覆土と遺構外との接合であり、これらの対象遺構が廃棄の場として同時期に機能していたことをしめす。このことは、すべての遺構が一時期の所産ではないことをもしめしている。覆土中に土器の堆積が認められる、竪穴



Fig. 34 遺構間土器接合関係、遺構外土器分布(1/600)

住居SB01・03、小竪穴SK01などに対して、SB02は、他との接合関係もなく、覆土における遺物の廃棄も認められない。このことは、3軒の竪穴住居がさらに少なくとも2時期に区分されることをしめている。一つ土器の廃棄がなぜ距離をおいておこなわれたのか、土坑墓SK06の接合関係をふくめ、それが意図的な「遺棄」としておこなわれたのかどうかは明確ではない<sup>(2)</sup>。しかし、時間的な経過をふくめた集落の構造を比較的明瞭にとらえることが可能であろう。

この、おそらくは2時期において形成された土器分布を含む住居帯は、半径で25m程度にすぎない。同時期を含む千葉縣市原市草刈貝塚、千葉県船橋市高根木戸遺跡、千葉県松戸市子和清水貝塚などと比較して限定されたものといえよう。これら大規模な集落も、一時期をとれば数軒の竪穴住居から構成される。しかし、草刈貝塚では、古い時期の竪穴住居ほど環状外縁部に位置し、中央部にむかって求心的な竪穴住居の累積が認められる<sup>(3)</sup>。したがって、仮に、集落開始段階に明確な集落の企画性を想定するならば、奈良大仏台遺跡は、継続性ないしは反復居住による累積を前提としたものではないと考えることの根拠ともなろう。

ただし、小竪穴など、竪穴住居以外の付属施設にあり方は、かならずしも通有のものではない。小竪穴は1基のみであり、かつ住居群の背後より検出され、住居帯に対応する帯空間を形成していない。また、皿状の土坑については、千葉縣市川市株木東遺跡<sup>(4)</sup>例などから、土坑墓と判断した。しかし、当該地域におけるこの段階の埋葬形態は、住居覆土葬を主体とし、住居帯と対応する散在的な傾向が認められる。埋葬人骨の出土によるならば、住居跡、小竪穴に関連しない土坑墓は全体の6%にすぎない<sup>(5)</sup>。この段階には、埋葬区の存在は認められず、塊状の土坑墓群の形成は、加曽利EⅢ式以降における千葉縣市川市曾谷貝塚第7地点例を上限とするようである。これが、一過性集落における偶発的なあり方なのか、あるいは、累積の結果としての集落配置の規則性そのものが「傾向」にすぎないのか、意見が別れるところであろう<sup>(6)</sup>。

ただし、このうち土坑墓としたものについては、若干の疑問が残るところではある。土坑形態からみるならば、屈葬が想定されるものの、規模は長径が1.9～1.3m前後あり、株木東遺跡、東京都八王子市神谷原遺跡などと比較してもやや大形である。5基、不明土坑を含めた場合の7～8基という数が一過性の集落として多いかどうかは判断できないとしても、別に、小児埋葬に対応する土坑墓の存在を考慮するならば、さらに土坑墓の総数は増える可能性もある。また、無遺物のものについては、この段階の所産であるとする蓋然性を主張する根拠が乏しいことも事実ではある。住居帯背後にまとまって分布することを根拠とすることも、当該地域における状況とは矛盾すると考えることもできる。この点については、類例の増加によって判断せざるをえない。

- (1) 安藤文一 1977「栗島台式土器の設定 東関東における縄文前期終末の一様相」『房総文化』第14号 房総文化研究所
- (2) 藤野修二 1982「遺物の遺存状態の検討」『神谷原Ⅱ 東京都八王子市櫛田遺跡群の調査』八王子資料刊行会
- (3) 高田 博ほか 1986『千原台ニュータウンⅢ 草刈遺跡(B区)』財団法人千葉県文化財センター
- (4) 堀越正行 1985「市川市株木東遺跡環状土坑墓群」『史館』第18号 史館同人
- (5) 堀越正行 1986「京葉における縄文中期埋葬の検討」『史館』第19号 史館同人
- (6) 土井義夫 1988「セトルメントパターンの再検討」『史館』第20号 史館同人

### Ⅲ. B地点の調査

#### 1. 遺跡の概要

B地点は、調査対象地区南端部、奈良大仏台遺跡の立地する台地基部に位置し、東側小支谷に面している。遺跡の標高は75m程度であり、支谷谷底との比高は約30mを測る。

B地点は、確認調査時に拡張し遺構調査を実施した。拡張面積は670㎡である。遺構は、縄文時代の土坑1基のみであるが、表土下暗褐色土層を包含層とした縄文土器の散布が認められた。包蔵土器の時期は、縄文時代各期におよぶが、とくに早期を中心とする。

#### 2. 土 坑

落とし穴SK101(Fig. 35・39)

縄文時代の落とし穴と考えられる。確認面長軸長1.81m、短軸長1.44m、確認面からの深さは2.97m、底面標高は72.38mを測る。長軸方位はN-1°-Eである。底面小Pitは検出されなかったが、側壁は、根および崩落によると考えられる凹凸が認められた。土層は、1層がロームブロックを主体とする暗黄褐色土層、2層が粒状のロームと黒褐色土を全体に混合する層、3層が明黒褐色土層、4層がブロック状、粒状のロームからなる層、5層がロームブロックを局部的に含む黒褐色土層、6層が有機性の強いベタ状の黒褐色土層、7層が大小ロームブロックを主体とする層、8層がロームブロック、ローム粒を含む粒状の黒褐色土層、9層が粒状の黒褐色土層、10層がロームブロックを主体とする黄褐色土層、11層がボソボソのロームと黒色土からなる層、12層が黒褐色土層である。

遺物は、Fig. 39-72が覆土より出土している。田戸下層式に比定される。

#### 3. 遺構外出土の遺物

遺物は、散在的であるが、調査区全体に認められた。各期の土器の分布には、若干の傾向を認めることはできるが、調査区が限定されていることもあり、遺跡そのものの実体は明確ではない。なお、Fig. 37は、比較的大形の破片のみ図化したものであるが、およその傾向をみることは可能である

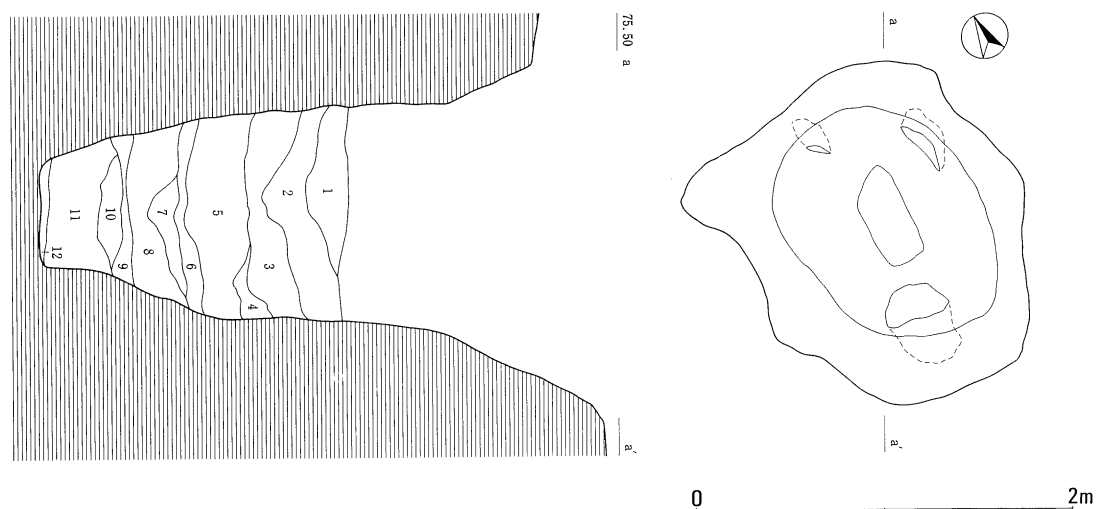


Fig. 35 SK101実測図(1/40)

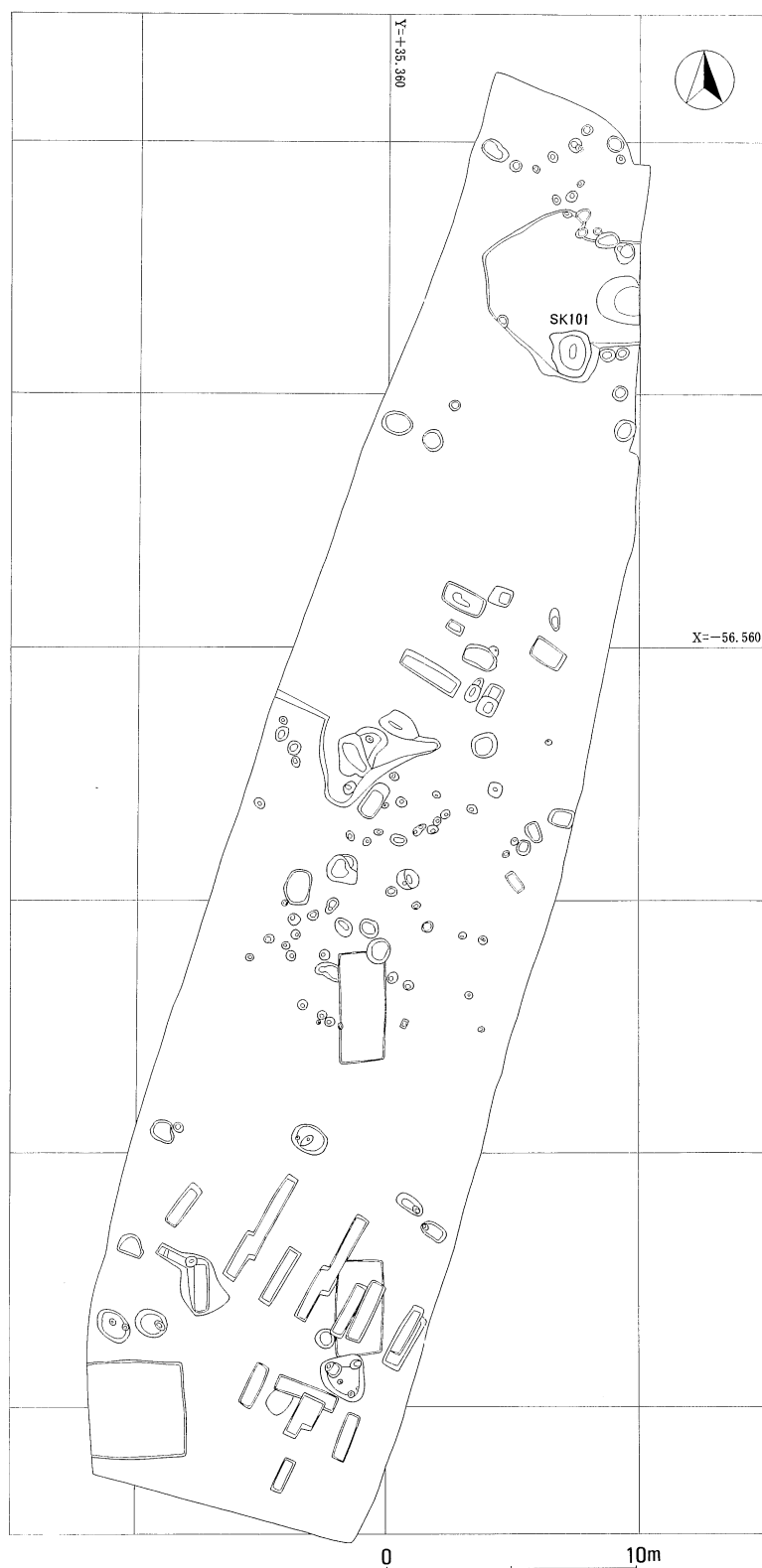


Fig. 36 B地点全体図(1/300)

部文様帯と体部文様帯を区画する横平行沈線文がみられる。26は、文様帯が横平行太沈線文により多段化し、外削ぎ状の口唇部には縦と斜方向による細沈線文、その下は縦位の短沈線帯となる。27・28は、口縁部下に平行沈線文をもち、27は、細沈線による格子目文が充填される。29～31は、口縁部文様帯が太沈線による格子目文となるものである。32は、口唇部が小突起状の波状となり、半截竹管に

と思われる。

1～17は、捺糸文系土器である。いずれもY型であり、原体Rを主体とする。1～8は口縁部であり、形状は若干肥厚するものの、円頭状を主体とする。1は、口唇部文様帯をもつと思われるが、不明確である。2は、口縁部直下より施文されるが、他は、若干の無文帯をおく。全体的には、施文方向も一定せず、条間隔も広い点から、稻荷台式を主体すると判断される。捺糸文系土器は、計52点出土している。個体数については不明である。調査範囲内における分布は、南半部に集中する傾向がみられる。

18～20は、押型文系土器である。いずれも押圧の浅い楕円文であり、胎土は金雲母が特徴的にみられる。出土は計4点であり、いずれも同一個体によると想定される。田戸下層式に伴出する可能性が考えられる。

21～92は、沈線文系土器である。21～39は口縁部であり、方頭状のものと、26など外削ぎ状の口縁が認められる。21～25は、縦方向の太沈線による口縁部文様帯であり、沈線文は21・23が連続的に施文されるのに対して、22・24・25は断続的である。23・24・25は、口唇部が刻目状に施文される。21は、口縁



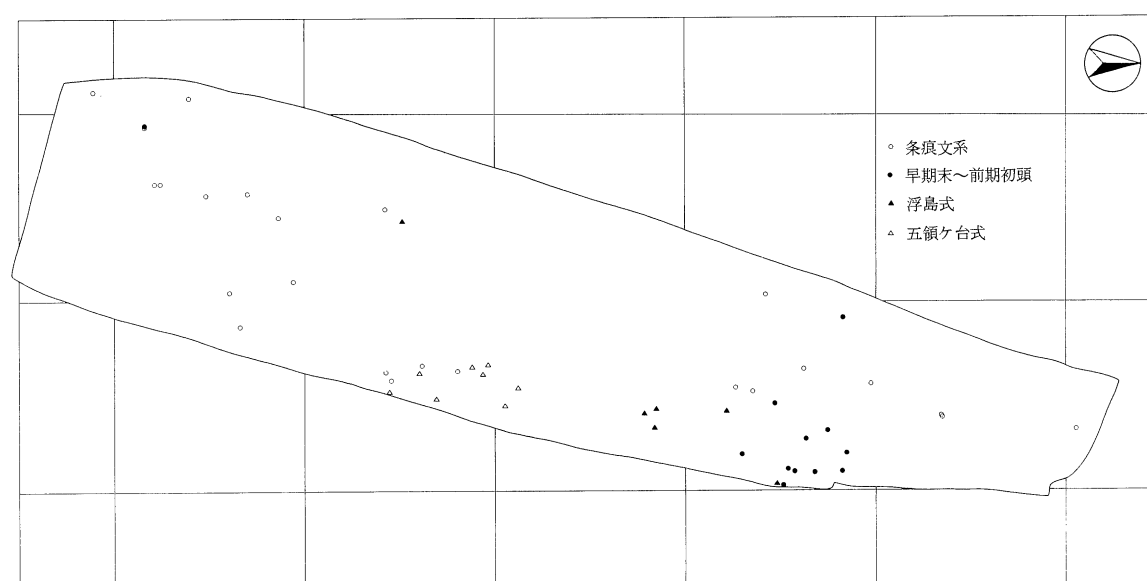
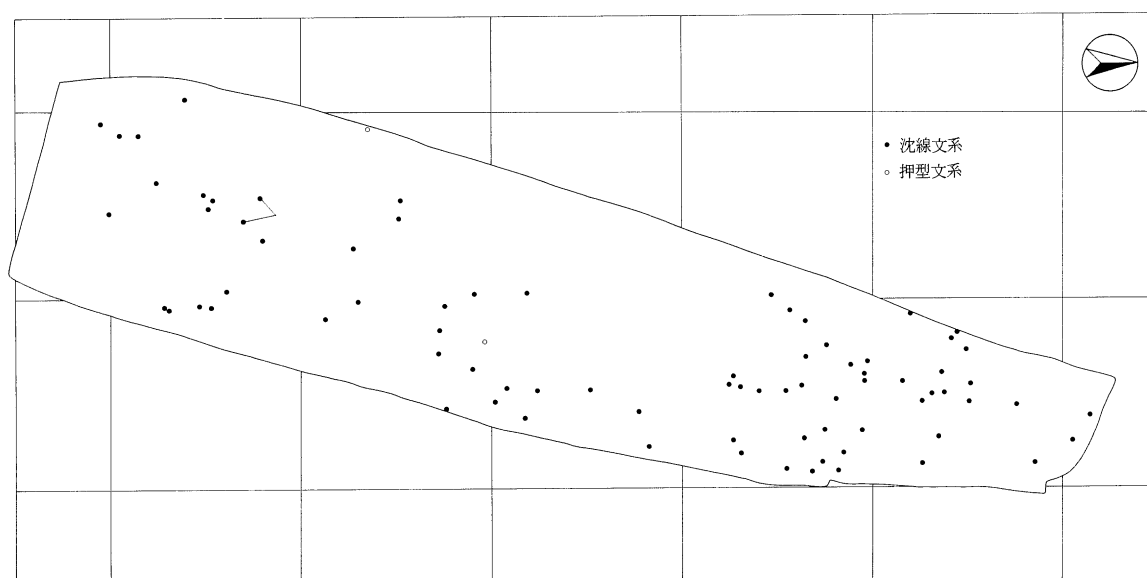
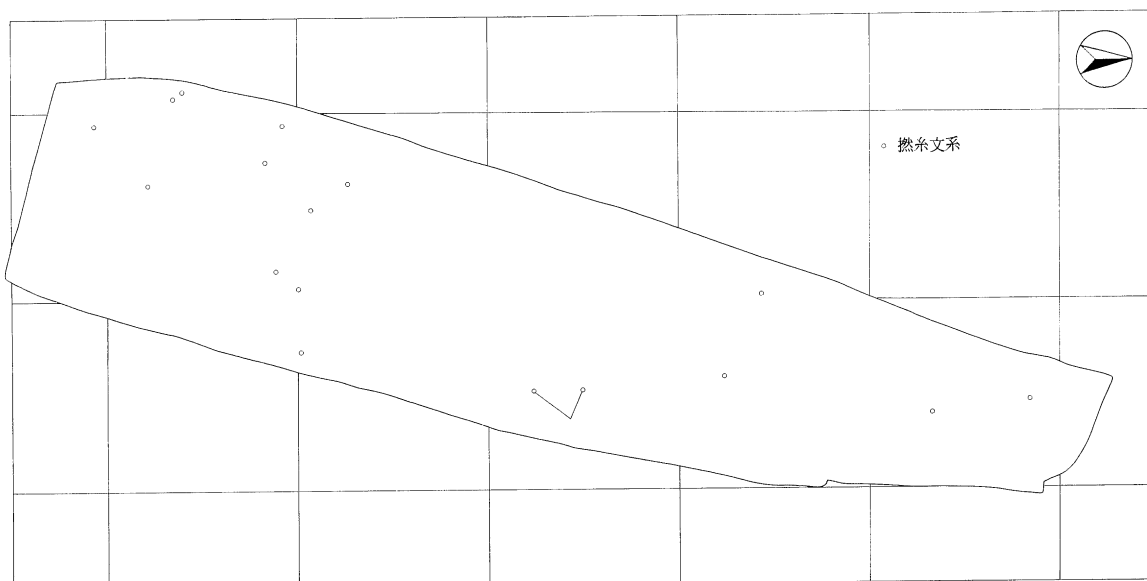


Fig. 37 縄文土器分布(1/400)

0 20m

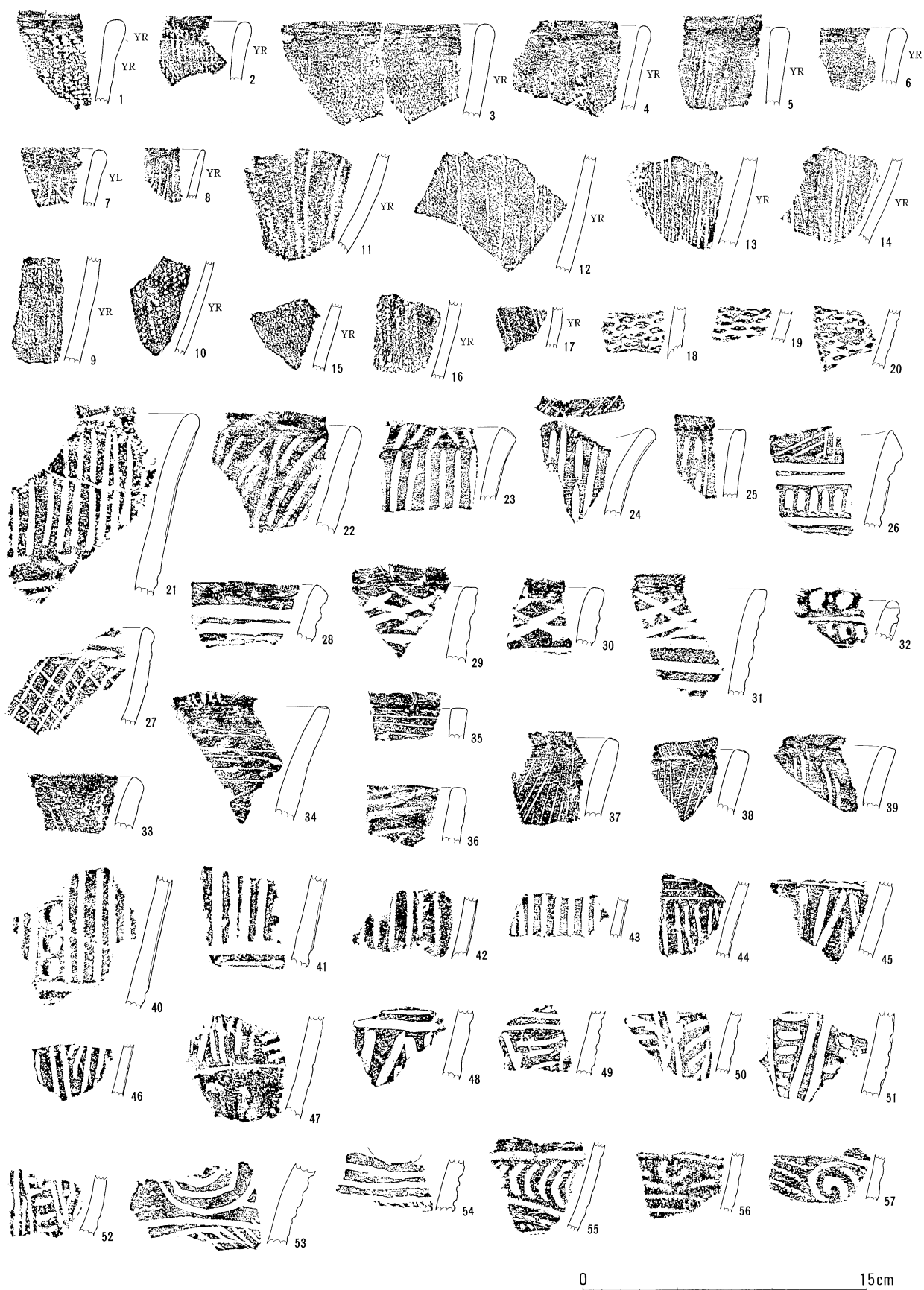


Fig. 38 B地点遺構外出土遺物(1)(1/3)

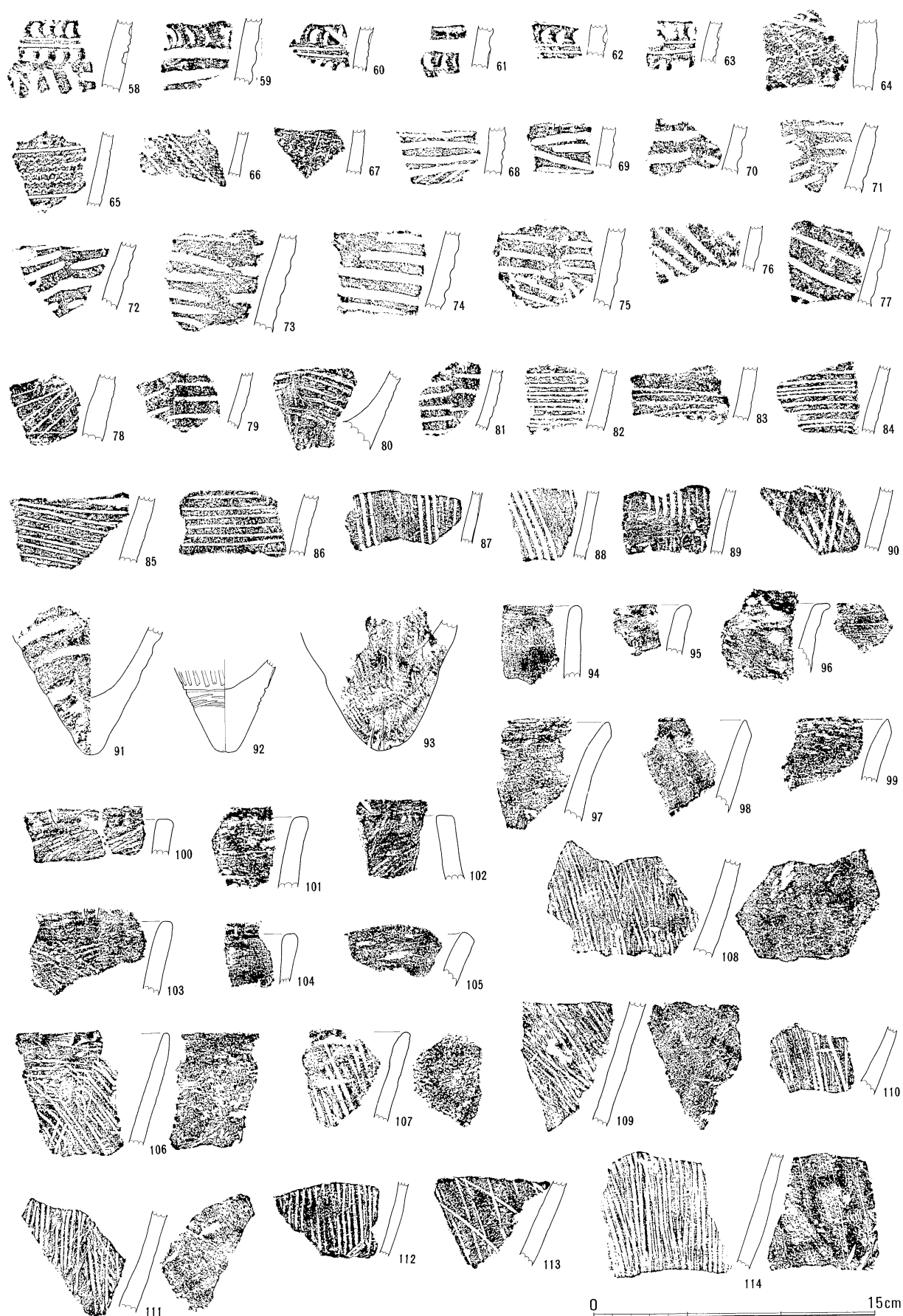


Fig. 39 B地点遺構外出土遺物(2)(1/3)

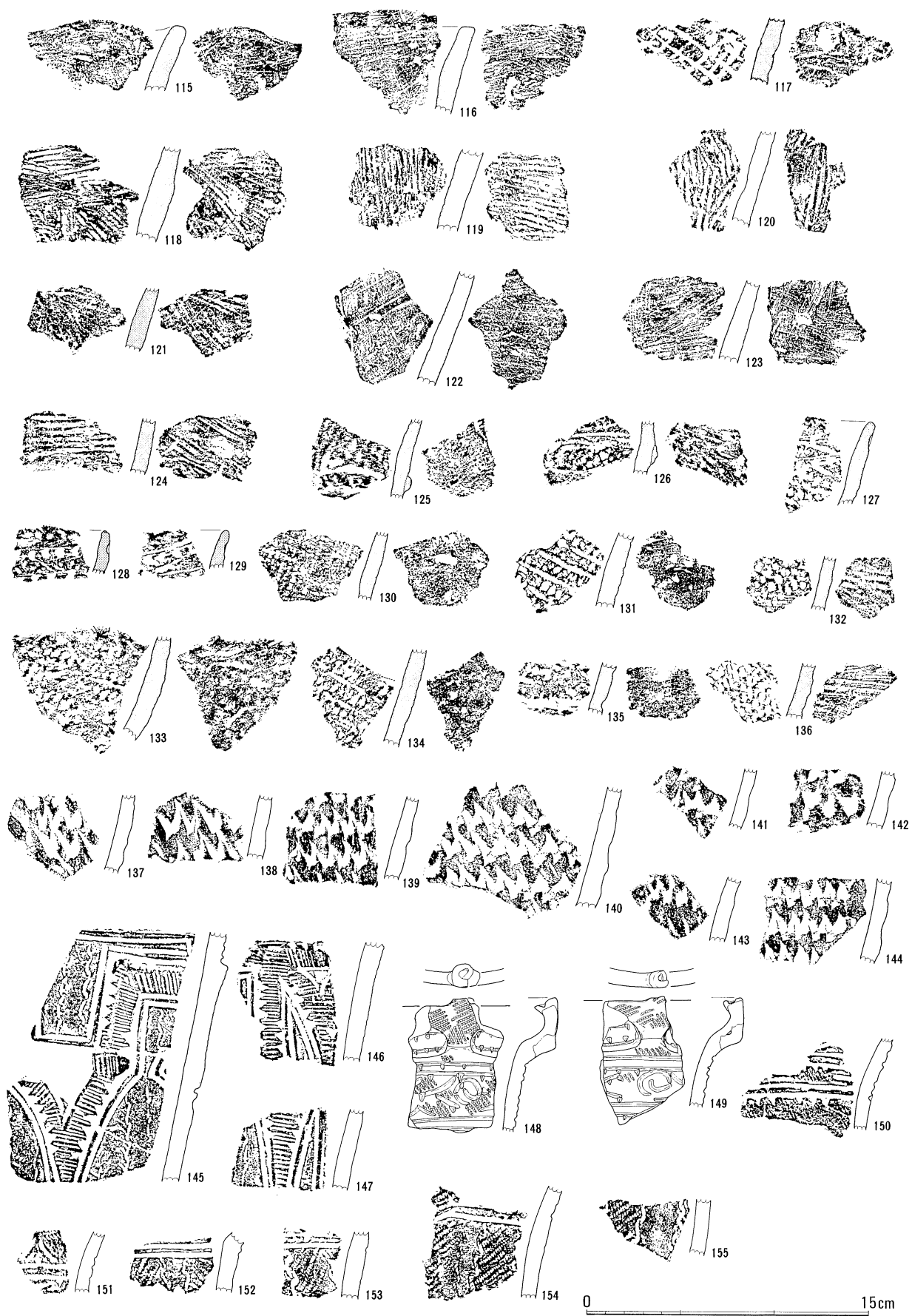


Fig.40 B地点遺構外出土遺物(3)(1/3)

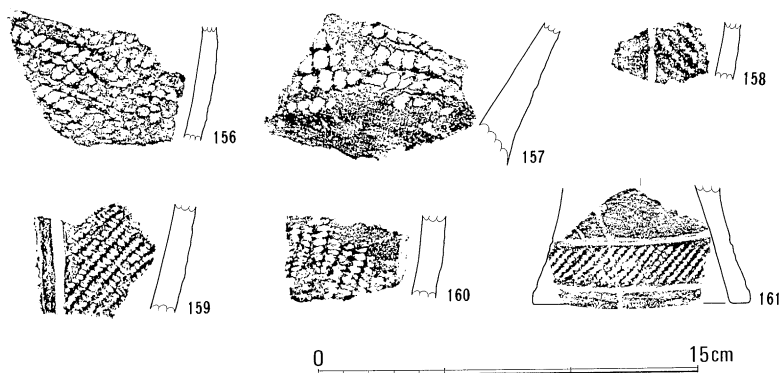


Fig. 41 B地点遺構外出土遺物(4)(1/3)

よる押圧文が施される。33～39は、細沈線文による口縁部文様帯であり、33～36が横位に、37～39は縦位に施文される。34・37・38は、口唇部が刻目状に施文される。これらは、太沈線文の併用がみられない。40～48は、縦位太沈線文からなる文様帯であり、区画文である横平行線文との組合せをもつ。40

は押圧文をはさむ。44は区画文を細沈線とする。45～48は、縦沈線が若干鋸歯状となるものである。50～52は、横位の短沈線帯をもつものである。53・54・56・57は、渦巻文ないしは蕨手文が表出されるものであり、55の重弧線文も、渦巻文をはさむものであろうか。57は、貝殻腹縁文が充填される。58～63は、連続する半截竹管文が施文されるものである。64～67は、貝殻腹縁文を充填した文様帯をもつものである。68～86は、断続する横位沈線文であり、68～77は太沈線文、78～86は細沈線文である。87～90は、条痕状の縦位細沈線文である。91・92は底部破片である。器面が条痕状の92も、天狗鼻状の器形から、この段階の所産と考えられる。これらは、田戸下層式に比定される。個体数は不明であるが、総数251点が出土している。ただし、これには後述する条痕状のものも含んでいる。この段階は、本遺跡で主体となる時期であり、明確な集中は認められないものの、調査範囲全体に分布が認められた。

94～105は、無文土器である。このうち、外削ぎ状の口縁部をもつ97～99、方頭状の口縁部をもつ100～102・105などは、田戸下層式に伴出する可能性が考えられる。94～96は、撚糸文系土器M型であろうか。105は波状口縁となる。

106～124は、条痕文系土器である。これは、繊維の含有の有無において区別される。106～114は繊維の含有がみられないものであり、条痕は外面のみに認められる。器面色調は橙色を基本とし、焼きも繊維を含有するものとは異なり硬質である。田戸下層式に伴出する可能性を考えておきたい。115～124は、表裏に条痕文をもつものである。意匠文としては、117が格子目文をもつ。茅山下層式に比定しておく。表裏条痕文のものは、総数101点出土している。

125・126は、早期末神之木台式系に比定されるものである。貼付線をもち、線上に、125は刻目、126は縄文原体の押圧文が施される。この2点のみが識別できた。

127～136は、前期前半に比定されるものである。このうち127～129は、連続する半截竹管による刺突文がみられる。関山式と考えられる。縄文施文の繊維含有土器は、計48点出土している。

145～144は、浮島式である。波状文が三角文状に施される。浮島Ⅲ式に比定される。出土数は14点であり、同一個体を含むと考えられる。

145～155は、五領ケ台式である。145～147、148～151、152～155が各々同一個体である。145～147は、半截竹管による沈線と三角印刻文によって区画された帯部分に集合沈線が充填される。地文の縄文は、結節文が強調される。148～151は、口唇部に渦巻状の突起をもち、口縁部文様帯は把手状部分とそれによって表出された楕円形区画に三角印刻文が施文される。体部文様帯は、横平行沈線文によ

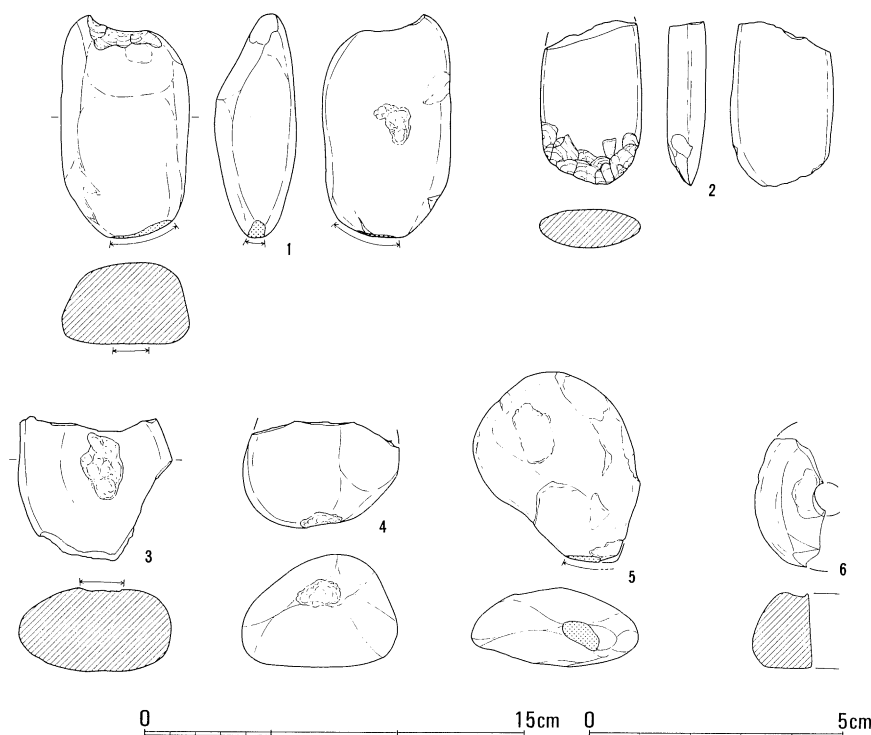


Fig. 42 B地点遺構外出土遺物(5)(1/3・2/3)

は、きわめてわずかであるといえよう。

調査区全体から、割石の礫が出土している。赤化しているものが多いが、集石状の集中は明確ではなかった。礫の総点数は358点であり、総重量は15.0kgをはかる。分布からは、沈線文系土器との対応が想定されるが、調査区も限られており判断できない。おそらくは、一時期の所産ではないと思われる。

礫の出土に対して、石器と考えられるものはわずかであった。実測図を提示したもの以外では、石皿と考えられる小片が出土しているのみである。1は、挟り状の調整が認められるものであり、片面には敲打痕をもつ。長さ8.79cm、幅5.08cm、厚さ3.23cm、重さ225.1gをはかる。2は、河原石状の原石片面に調整を施し刃部をつくるものである。現存長6.52cm、幅4.04cm、厚さ1.51cm、重さ64.2gをはかる。3は、片面に敲打痕をもつ凹石であり、現存長5.67cm、幅6.18cm、厚さ3.35cm、重さ173.1gをはかる。4は、敲石と考えられるものであり、頂部に敲打痕をもつ。現存長4.02cm、幅6.18cm、厚さ4.02cm、重さ164.0gをはかる。5は、頂部が磨り面となるものであるが、石器かどうかは疑わしい。長さ7.57cm、幅6.63cm、厚さ3.16cm、重さ187.2gをはかる。6は、穿孔をともなう紡錘車状の石製品である。石質は凝灰岩質である。現存長2.58cm、幅1.94cm、厚さ1.51cm、重さ6.6gである。縄文時代のものとすれば、垂飾品であろうか。

縄文時代以外の遺物としては、墓石と考えられる相輪部分が出土している(PL. 18)。長さ30.8cmをはかる。

B地点は、確認調査時に調査を実施した部分であるが、おそらくは台地縁辺部を中心としてその周囲に展開する可能性は高い。

って上下を区画され、渦巻文と三叉文ないしはハ字状の単沈線文および三角印刻文が施文される。152~155は、結節文をともなう縄文を地文とし、平行沈線文と三角印刻文がみられる。出土総数は、提示したものがすべてである。

156~160は、中期後半に比定される。158・159は、磨消し懸垂文がみとめられる。加曽利E式に比定される。

161は、加曽利B式の脚台部である。中期後半以降



A地点

B地点







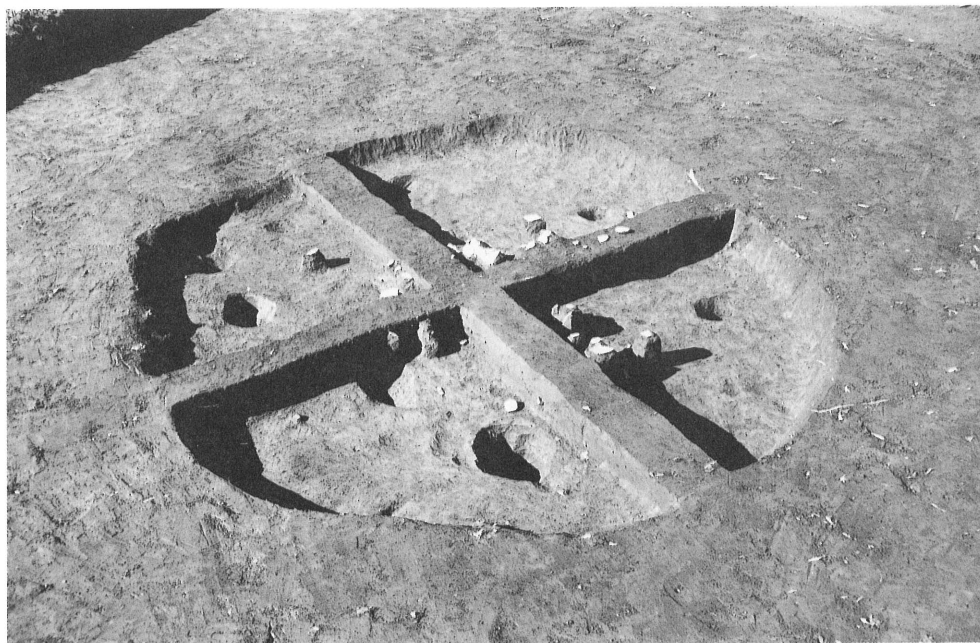


奈良大仏台遺跡A地点全景(南より)



奈良大仏台遺跡A地点全景(南より)

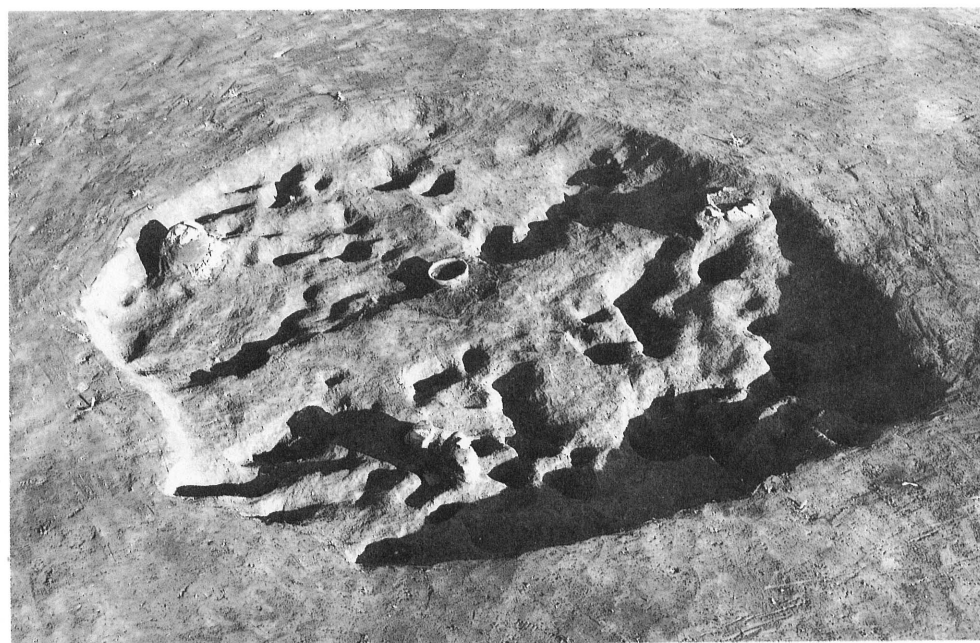




竪穴住居SB01



竪穴住居SB01



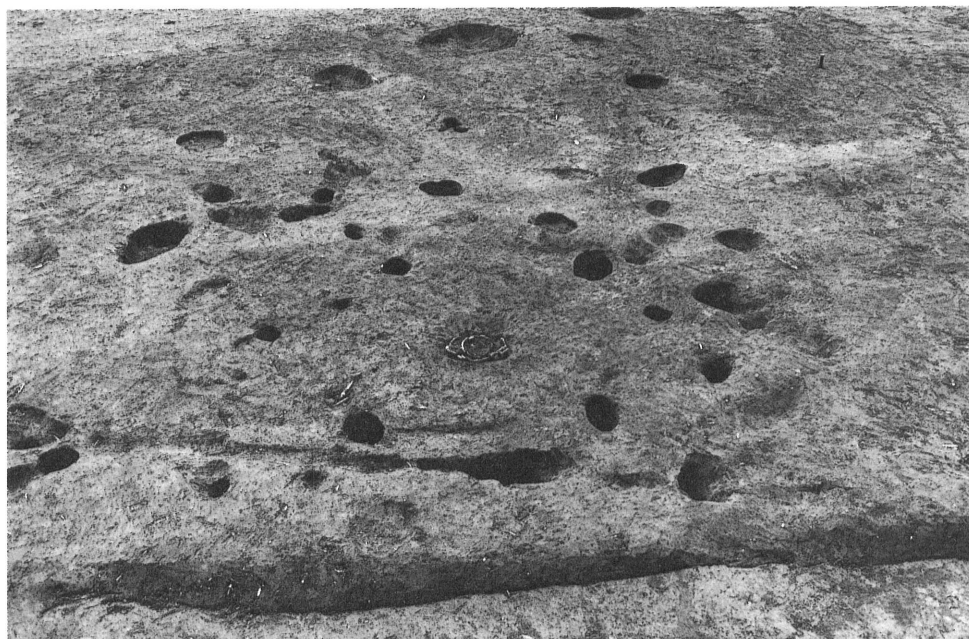
竪穴住居SB02



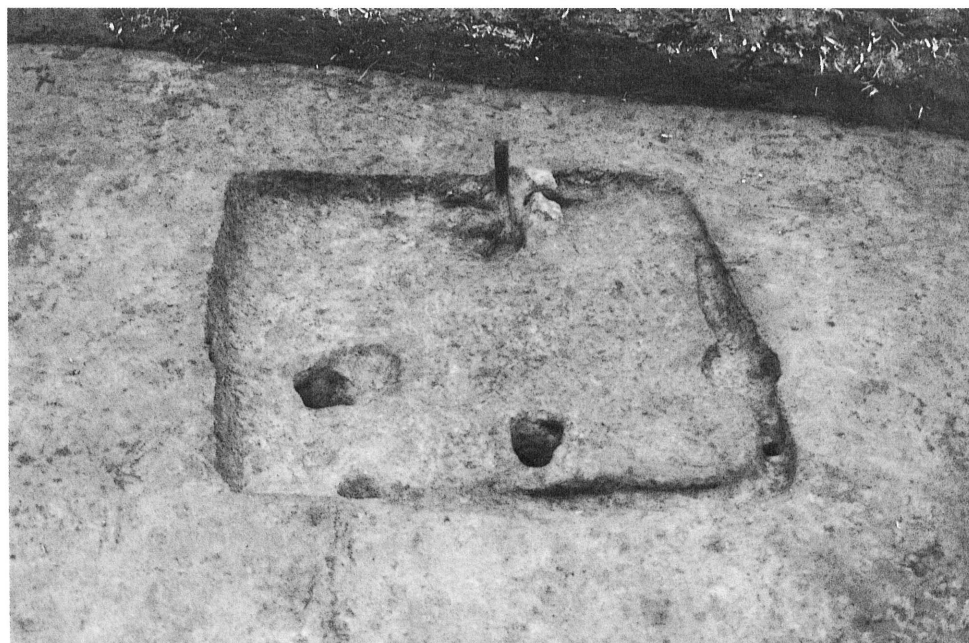




竪穴住居SB02 土器出土状態  
竪穴住居SB03 炉

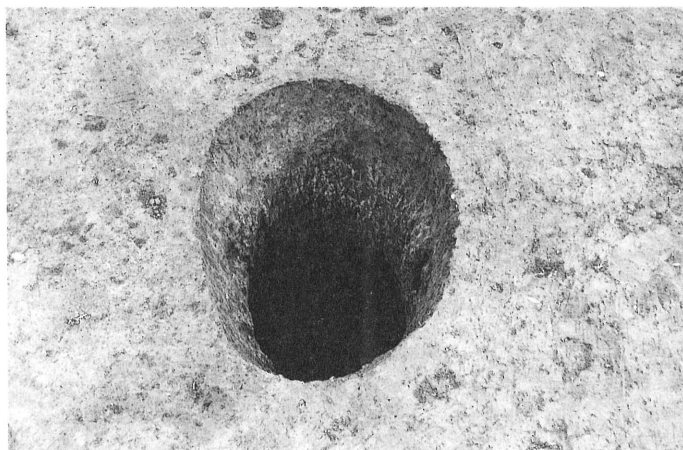


竪穴住居SB03



竪穴住居SB04





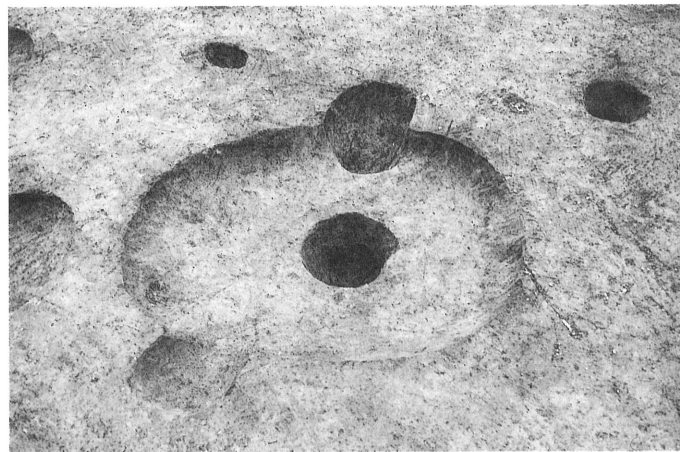
小竪穴SK01



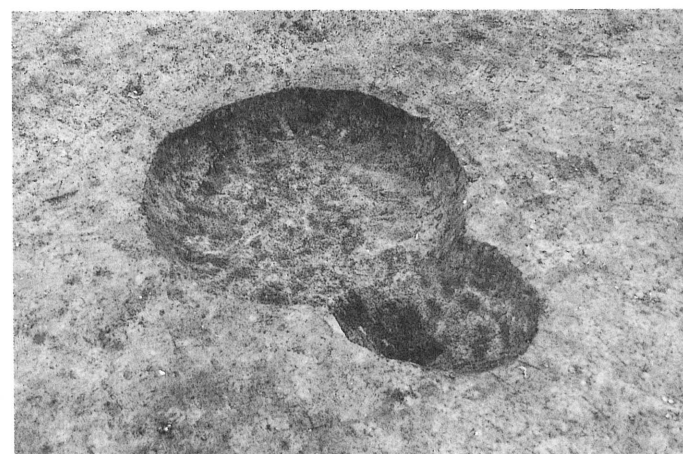
土坑SK02



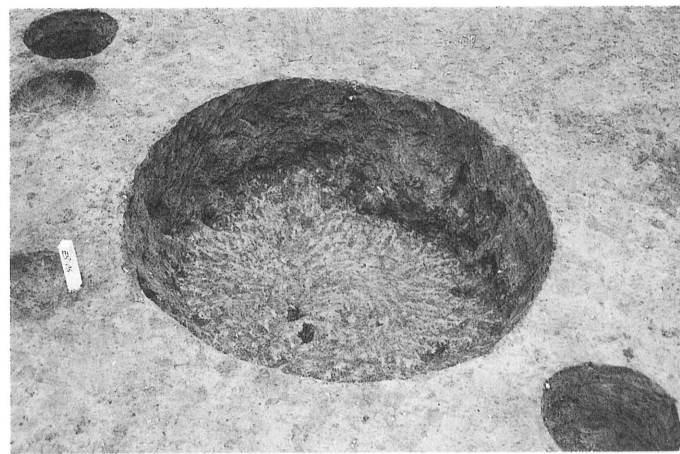
土坑SK03



土坑墓SK04



土坑墓SK05



土坑墓SK06



土坑墓SK07



土坑墓SK08



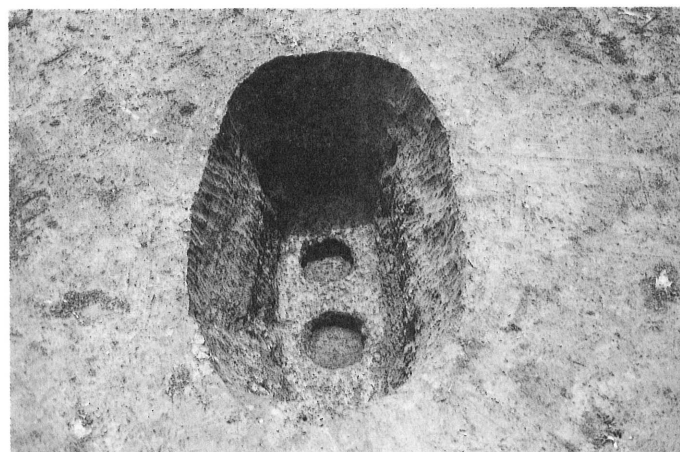




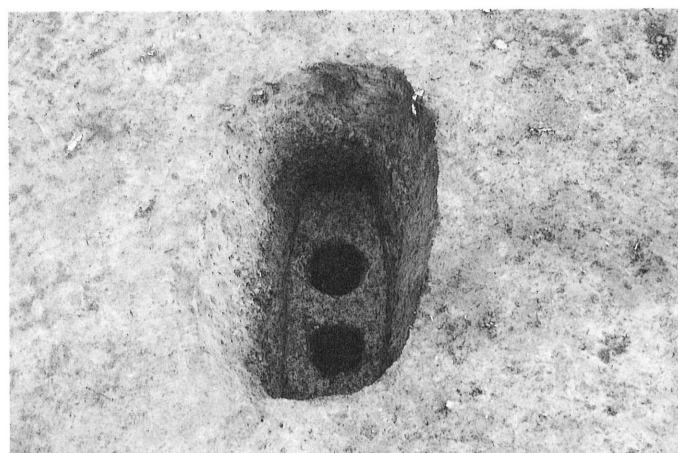
落とし穴SK09



落とし穴SK10



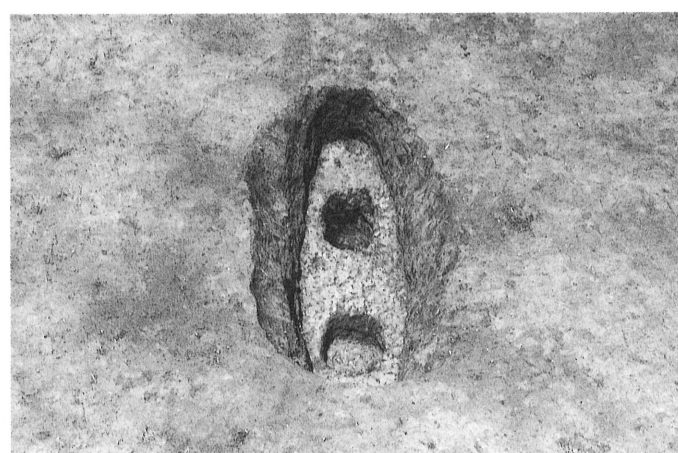
落とし穴SK11



落とし穴SK11 完掘



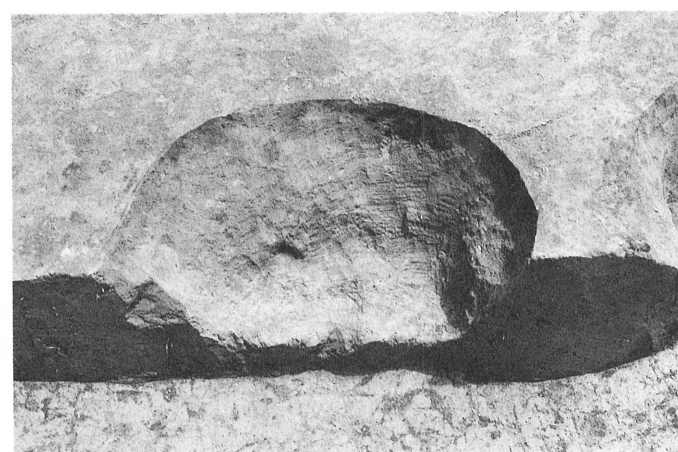
落とし穴SK12



落とし穴SK12 完掘



落とし穴SK13 土層断面

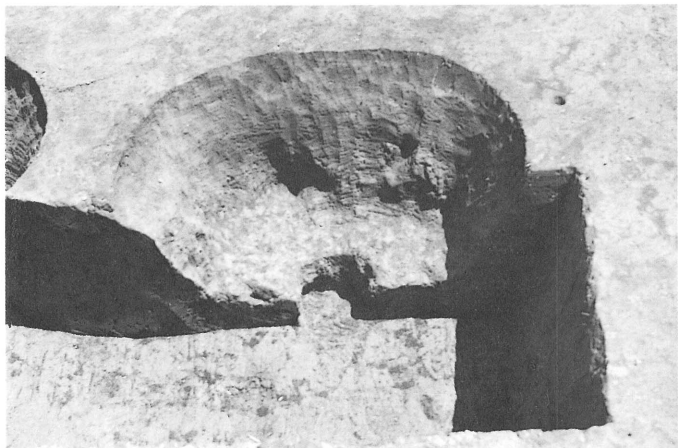


落とし穴SK13





落とし穴SK14 土層断面



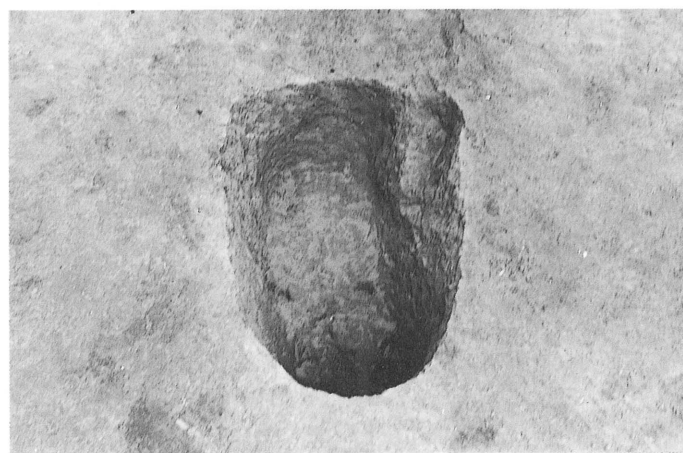
落とし穴SK14



落とし穴SK15



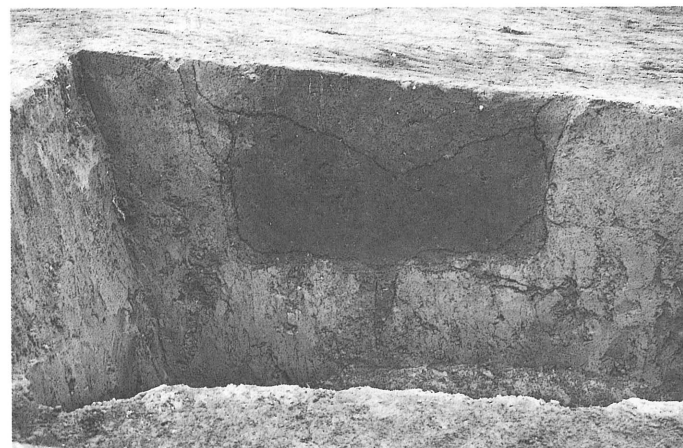
落とし穴SK16



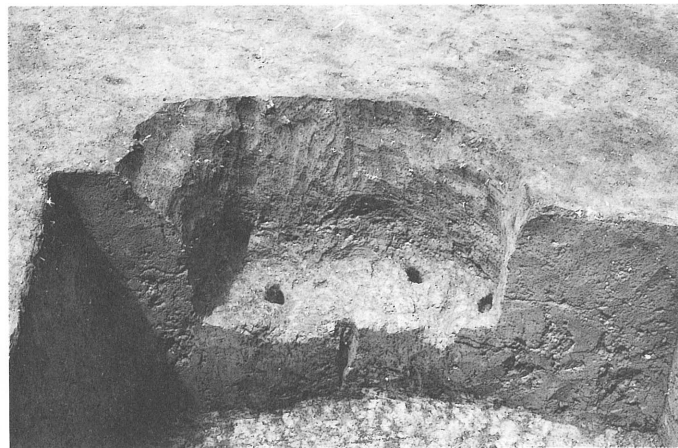
落とし穴SK17



落とし穴SK18



落とし穴SK19 土層断面



落とし穴SK19



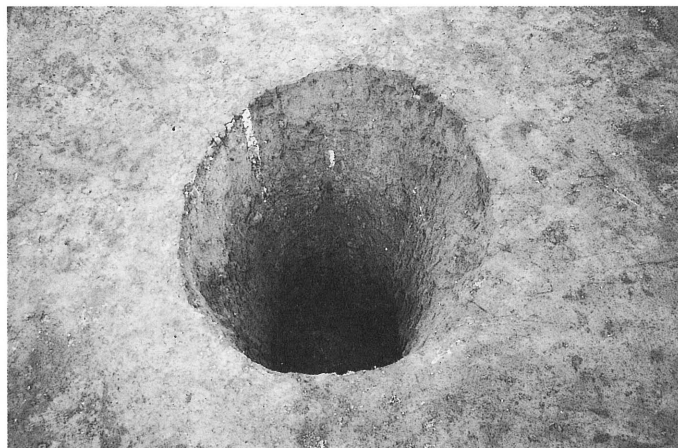




落とし穴SK20



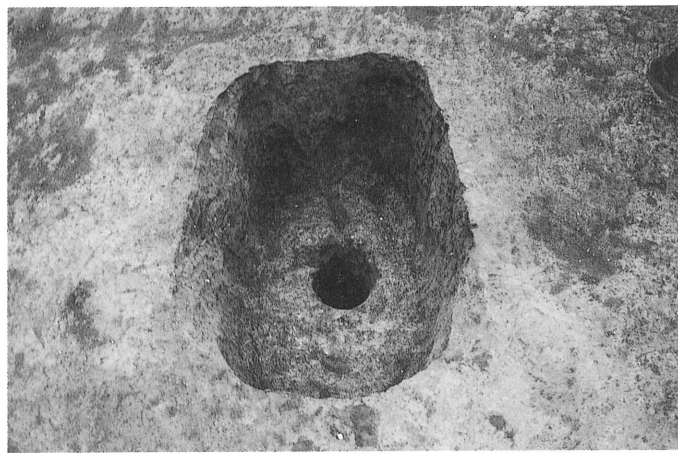
落とし穴SK21



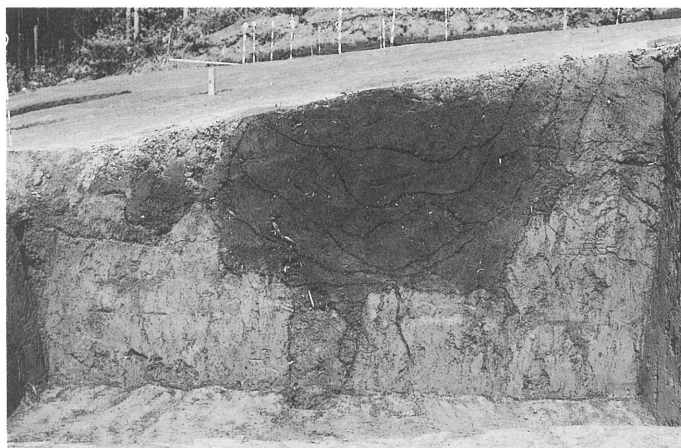
落とし穴SK22



落とし穴SK23



落とし穴SK25



落とし穴SK24 土層断面



落とし穴SK24





落とし穴SK26



落とし穴SK28



落とし穴SK27



落とし穴SK29



落とし穴SK30



焼土坑SX01



焼土坑SX03



焼土坑SX02







奈良大仏台遺跡B地点全景(南より)

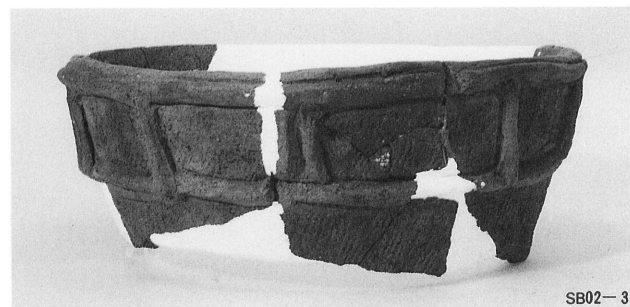


奈良大仏台遺跡B地点全景(北より)



落とし穴SK101

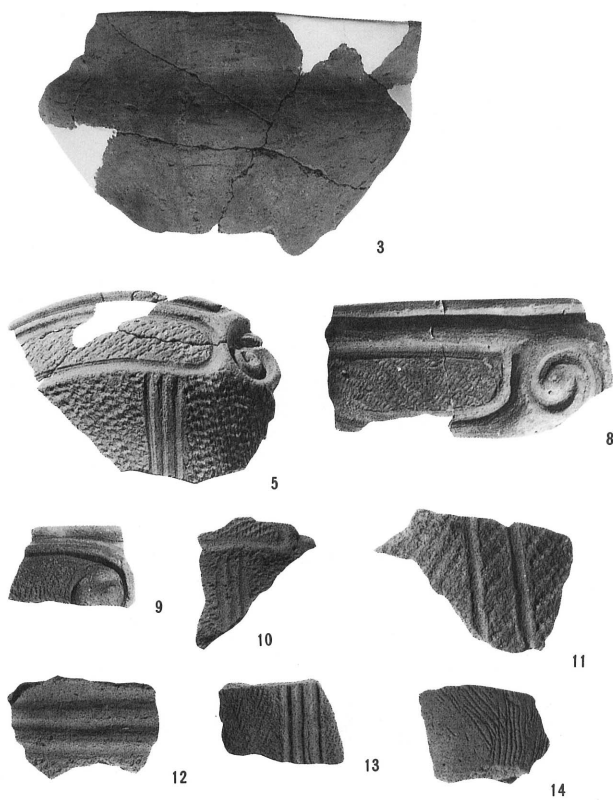
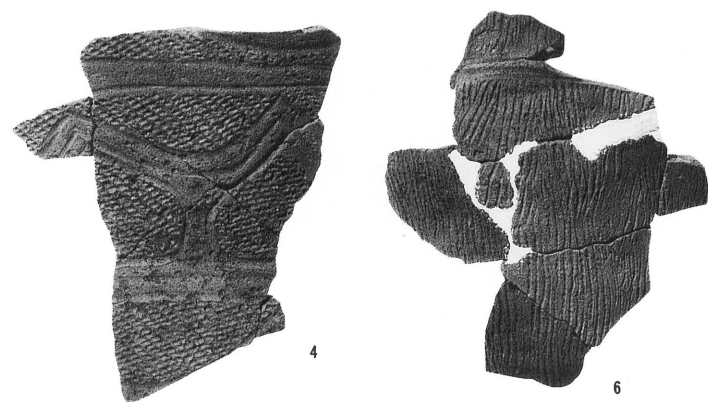








SB01



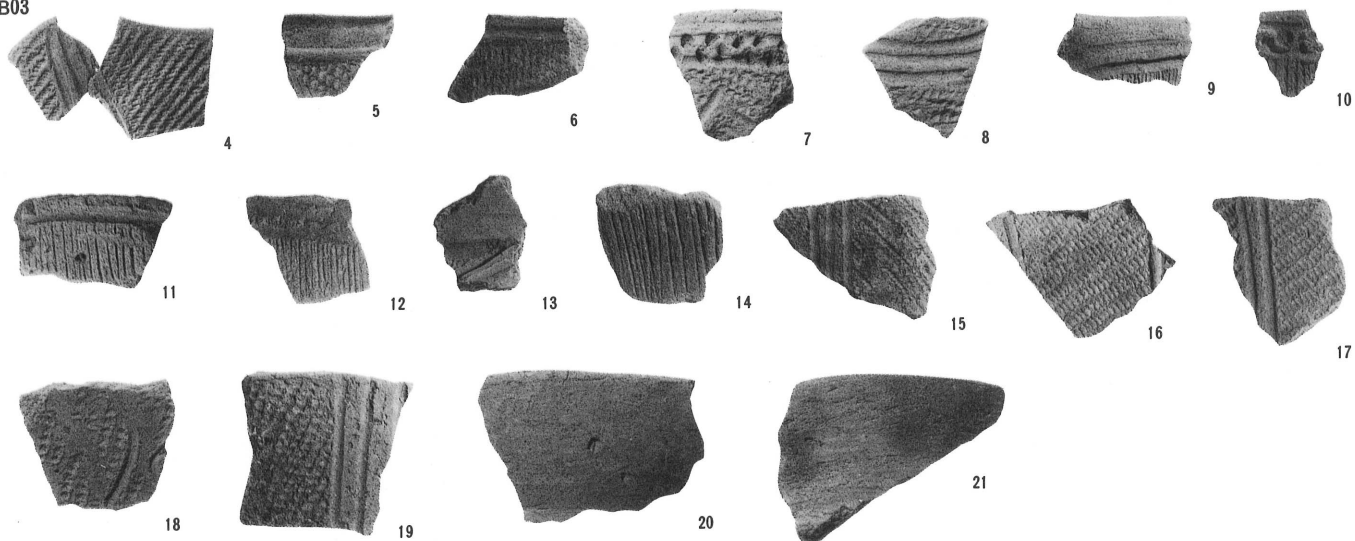
SB02







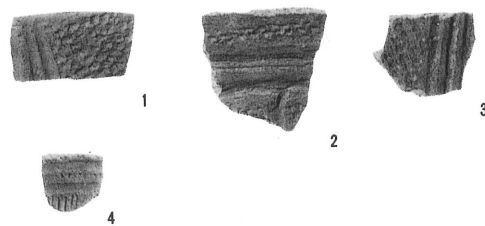
SB03



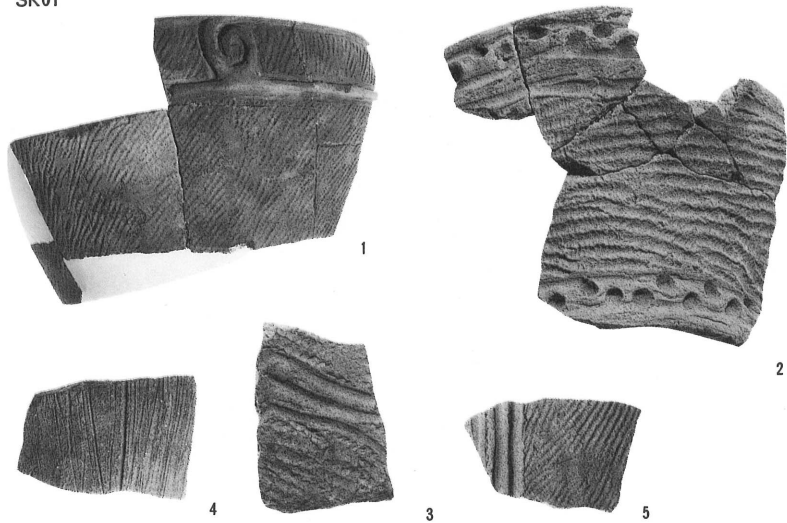
SB04



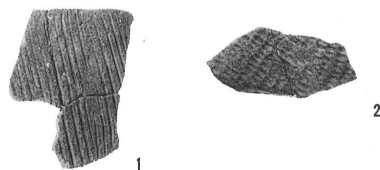
SK03



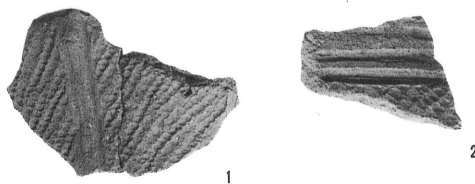
SK01



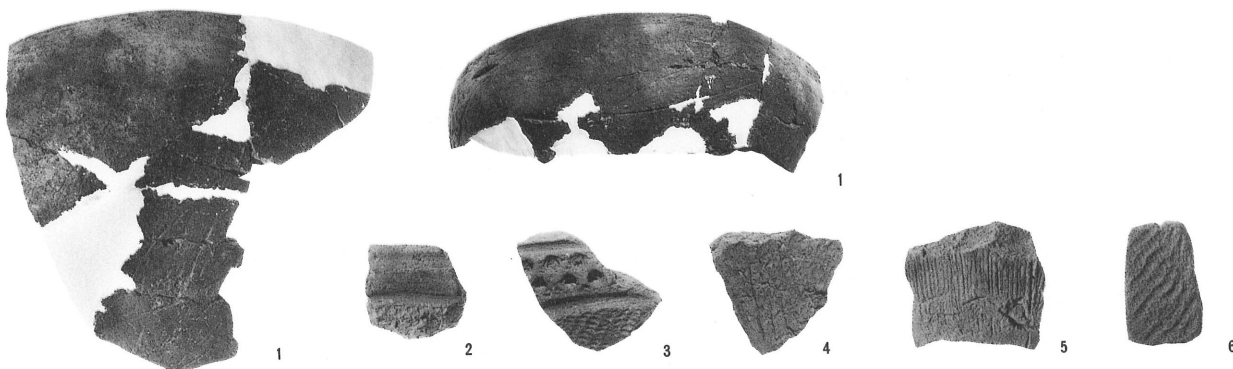
SK07



SK08



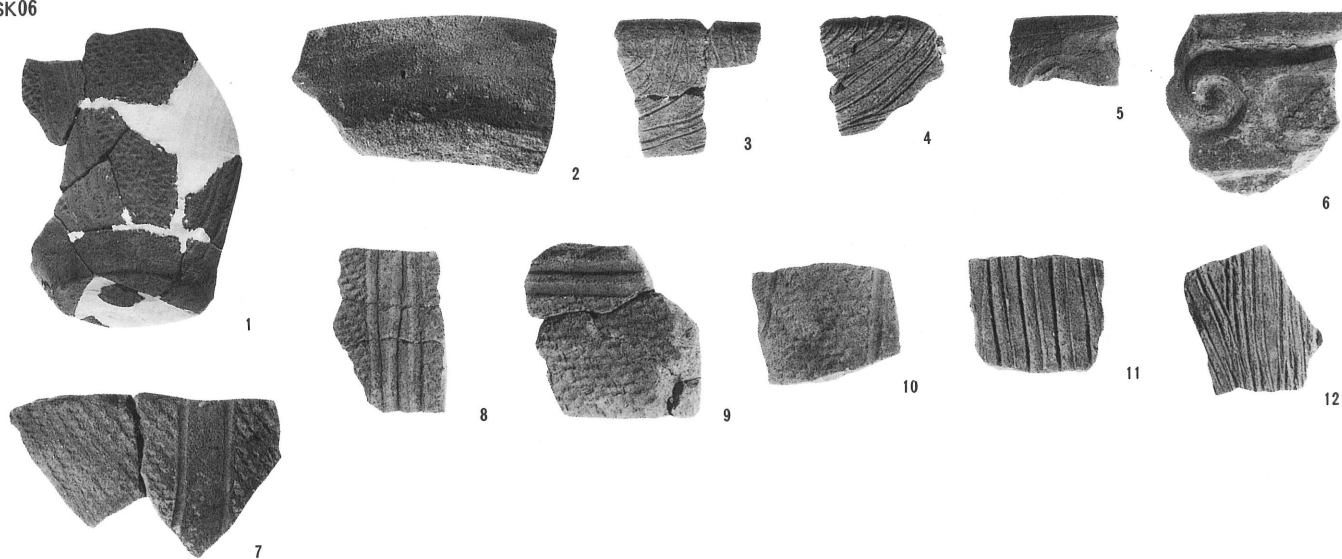
SK02



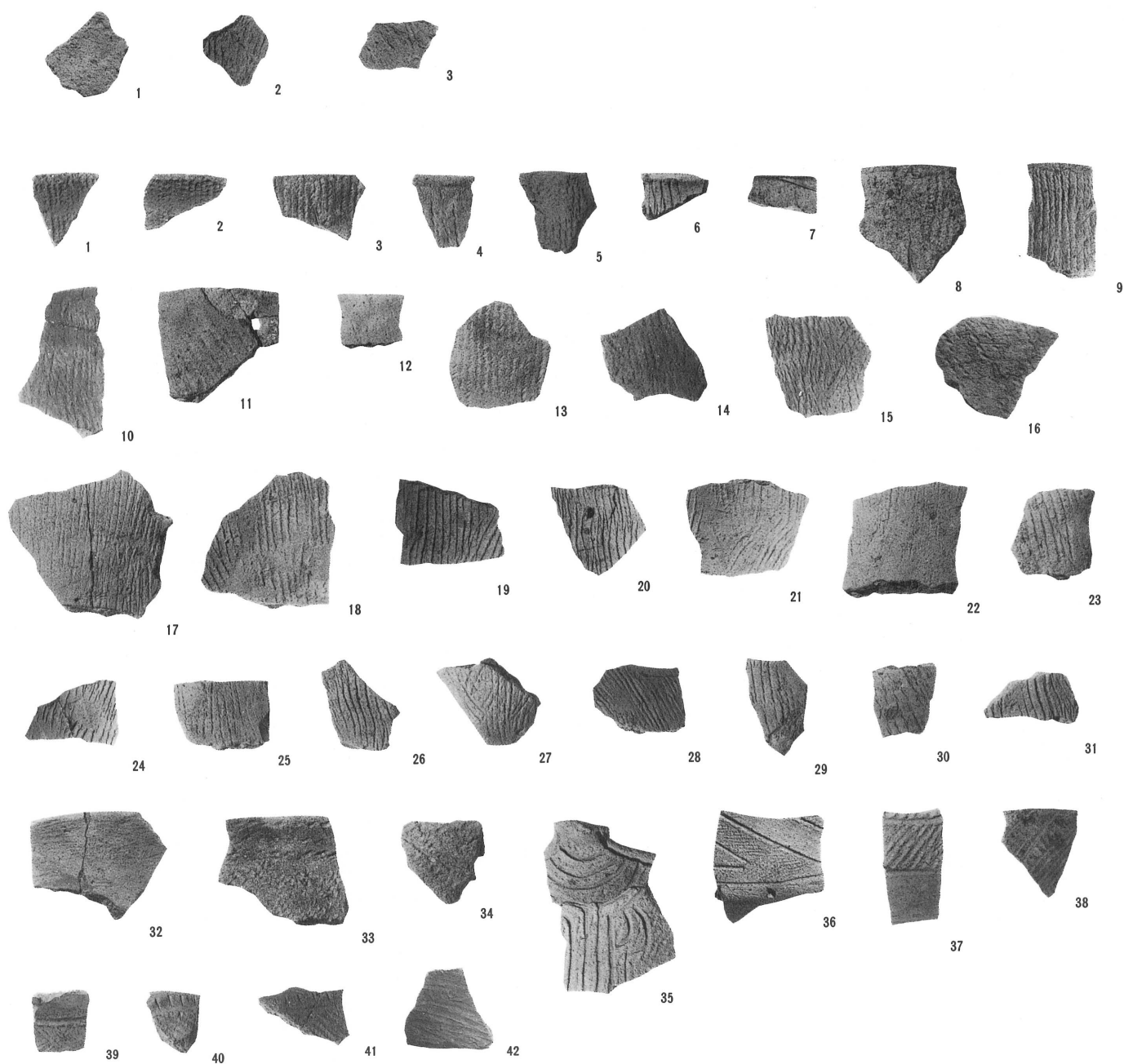




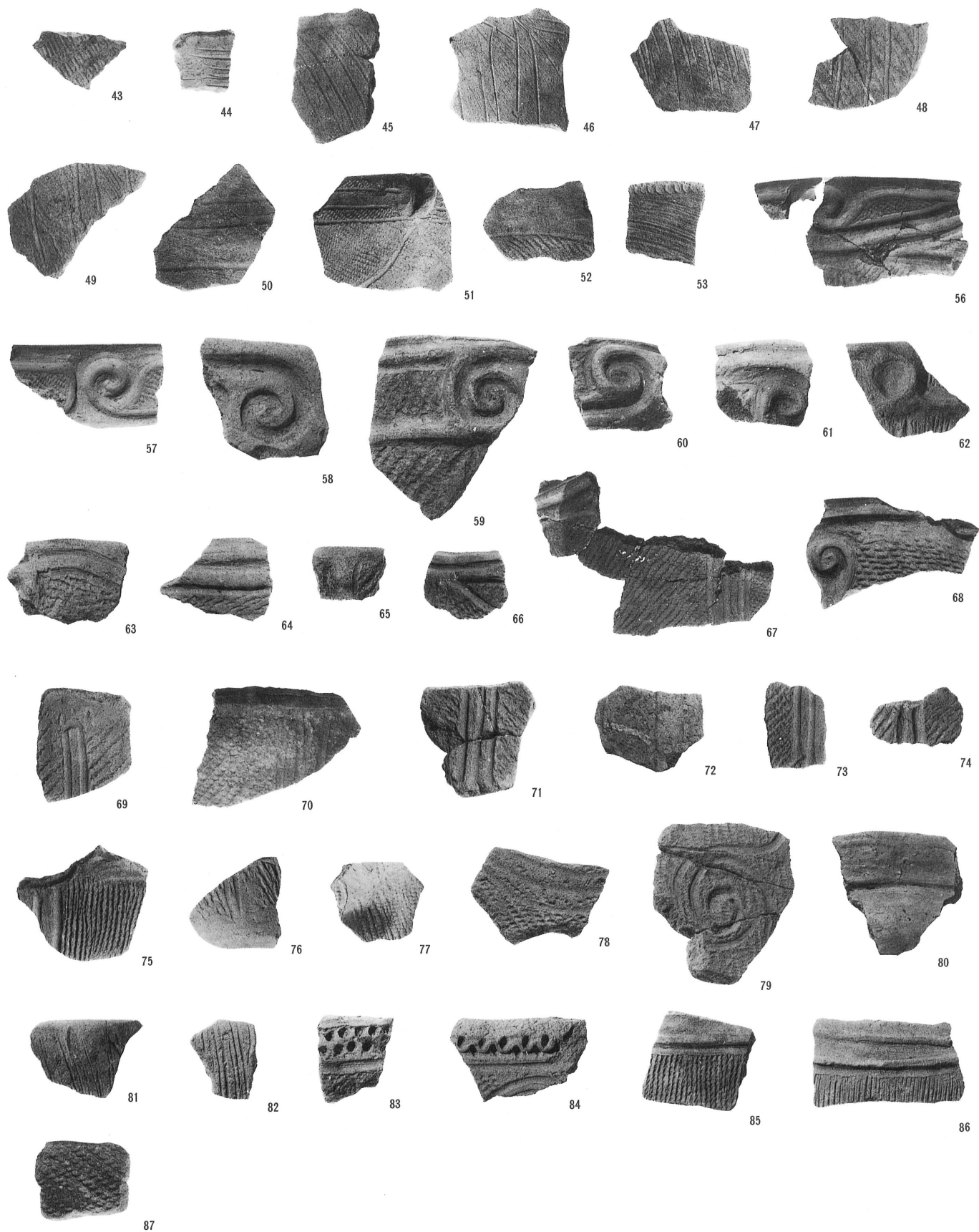
SK06



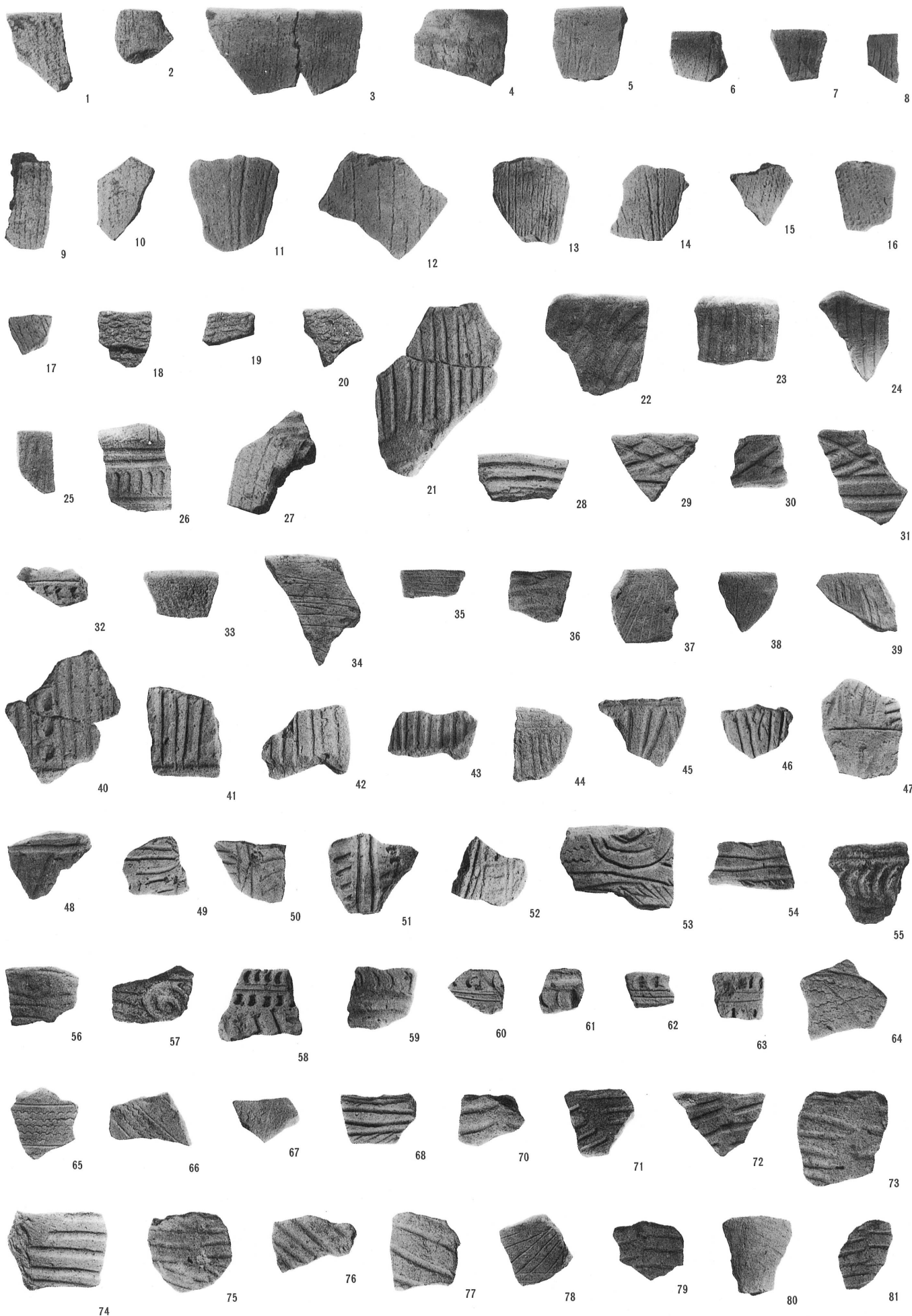
落し穴



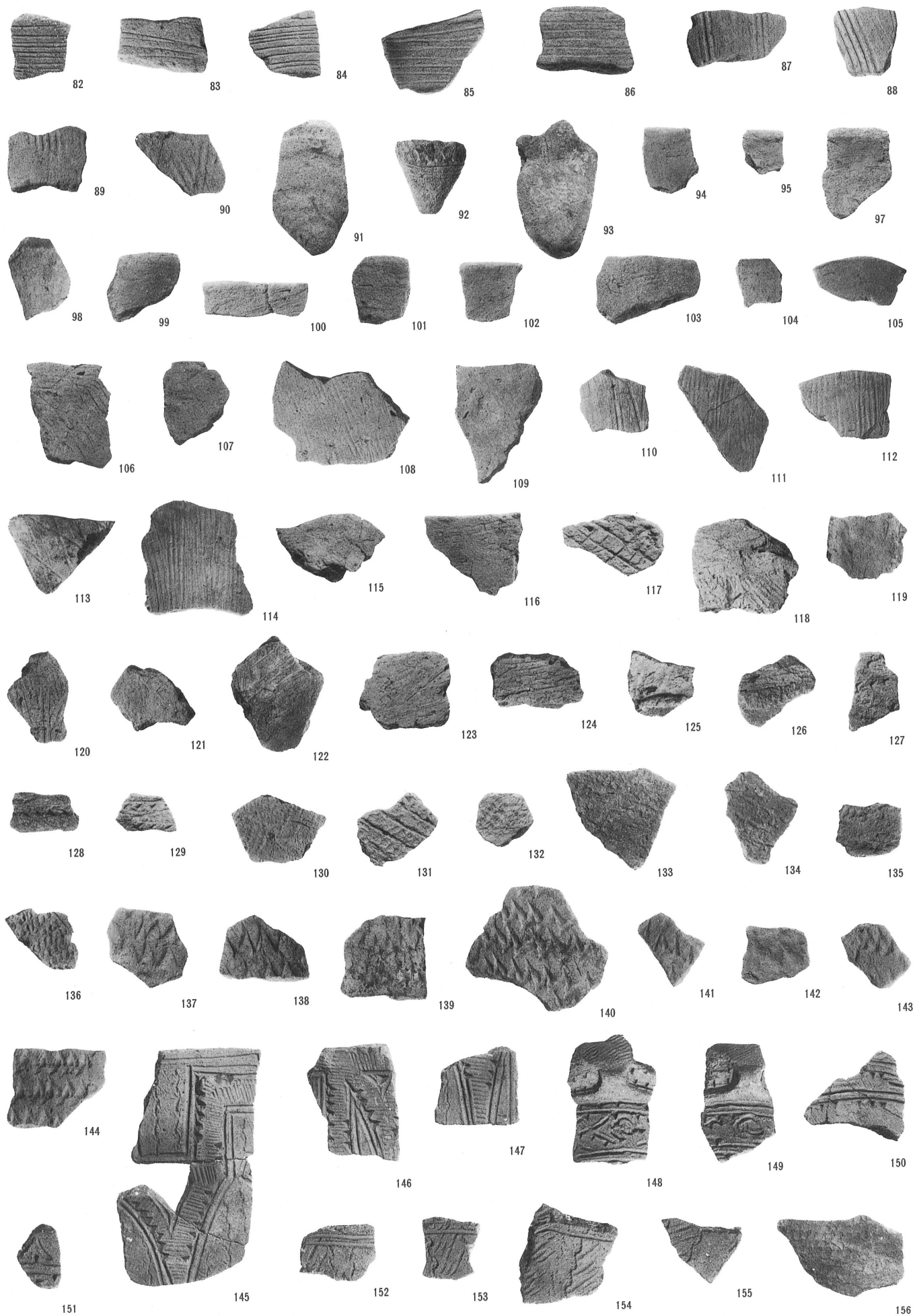






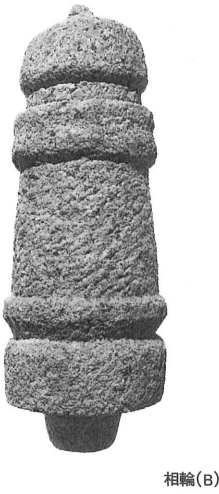
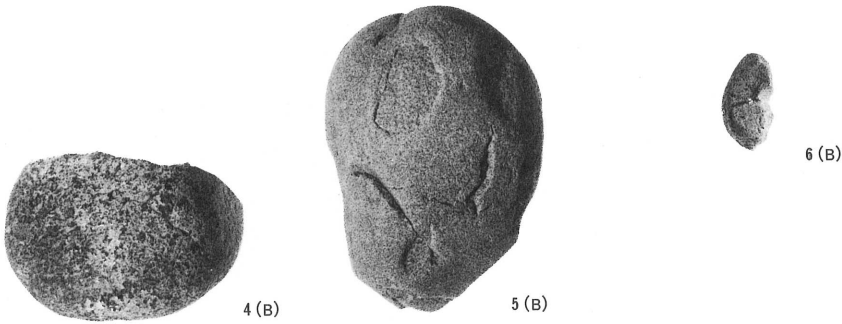
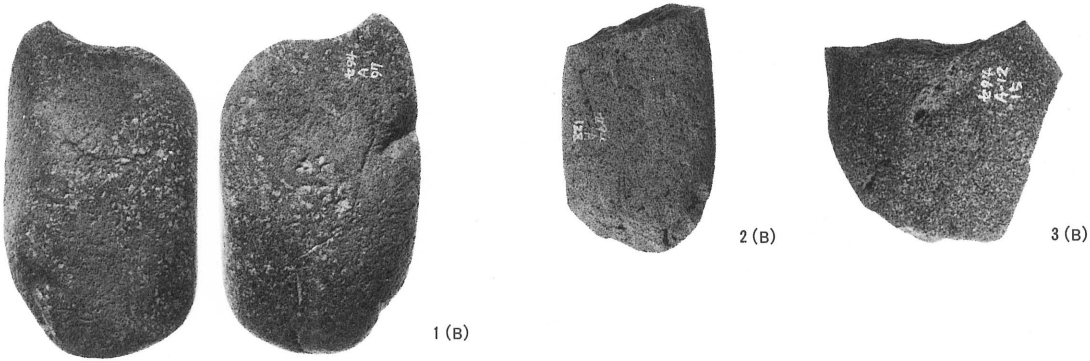
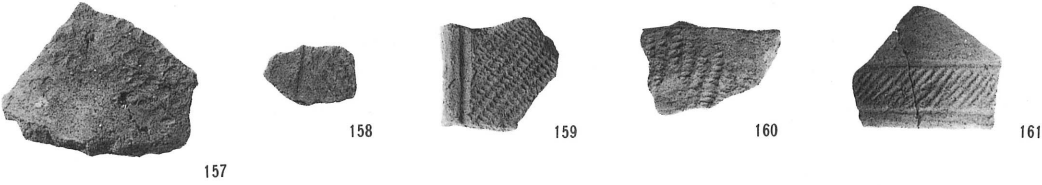














財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第 47 集

市原市奈良大仏台遺跡

平成 4 年 3 月 20 日 印刷

平成 4 年 3 月 26 日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 市 原 市 土 木 部 道 路 建 設 課

財団法人 市原市文化財センター

〒290 千葉県市原市能満1489番地

Tel 0436(41) 9 0 0 0

印 刷 三 陽 工 業 株 式 会 社

〒290 千葉県市原市五井5510-1番地

Tel 0436(22) 4 3 4 8